

厚生労働省 平成 29 年度障害者総合福祉推進事業

意思疎通支援事業における 要約筆記者の専門技術のあり方 報告書

平成 30（2018）年 3 月

特定非営利活動法人 全国要約筆記問題研究会

目次

1. 事業要旨	3
2. 事業目的	4
3. 事業の実施内容と調査等の結果	6
3－1 要約筆記利用の実態	6
3－2 連係入力による要約筆記場面の分析と課題	15
3－3 あるべき連係入力のモデル	94
4. 分析・考察	102
4－1 聴覚障害者の情報保障のあり方	102
4－2 要約筆記事業が担う部分	106
5. 検討委員会等の実施状況	111
5－1 会議録	111
5－2 動画撮影依頼文書	120
5－3 聞き取り調査依頼文書	122
5－4 名簿	123

1. 事業要旨

技術革新が進み聴覚障害者の音声情報獲得手段の方法は多様化した。

中途失聴、難聴者の文字情報による支援は、長く要約筆記者が担ってきた。運動の成果として、要約筆記事業は社会福祉施策の一つとして実施されるようになった。音声認識システムが日常生活で手軽に取り入れられるようになった今、聴覚障害者にとっての「音声認識と要約筆記の差異や、聴覚障害者の社会参加を支えるため要約筆記に求められる専門性について改めて整理し、今後の要約筆記事業のあり方を検討した。

要約筆記者は、聴覚障害者に話し手の意図がすぐ分かる形で文字情報に変換して受け渡す。読んで理解し聴覚障害者が自分の行動を決定できる通訳が求められる。対人援助技術の基礎を学び、その場の環境と利用者の状況を観察して、通訳を達成する。利用者に適した文字数の多寡で表出する。

現在、連係入力により文字量のある要約筆記が実施されている。それらを分析し、あるべき連係入力を検討した。一人入力でのポイントは、連係でも同様であった。一人入力より文字が多いだけに、読みやすさの確保は重要である。

連係は2人の作業である。一人の不足を補うものではなく、内容をさらに的確に豊かに伝えるために実施されるべきである。そのためには、一人入力で話し手の意図が伝えられることを基礎としたい。そのうえで読みやすさを確保する表出のリズムを習得することが重要である。そのための技術確保の方法は、継続して研究を続けたい。

音声認識を通訳として使用するには訂正等の課題がある。利用する者同士が音声認識を介して会話するなら有効な手段であり、聴覚障害者の社会参加を後押しするものである。音声認識の精度を高めるなどさらなる研究が求められる。

国内法整備を終えて障害者権利条約が批准された。環境整備や合理的配慮により共生社会を構築する方向性が示されている。

社会福祉事業で実施されてきた要約筆記事業だが、事業者が用意する環境整備、合理的配慮の依頼が増えつつある。個人に対するノートテイクでの派遣分野が広がっている状況も分かった。

福祉関係者のみならず、市民が要約筆記を知り、聴覚障害者支援として有益だと認めれば環境整備として要約筆記が用意されるに違いない。市民の理解につながるよう、要約筆記者は専門性を高め、社会福祉事業以外でも支援を継続することが大切である。環境整備や合理的配慮の認知度は低い。共生社会への実現に向けて、行政からさらなる啓発が必要だと考える。

2. 事業目的

2-1 目的

要約筆記事業は、2000 年に第二種社会福祉事業となった。現在は障害者総合支援法の地域生活支援事業で、意思疎通支援に位置付けられ、要約筆記者養成、派遣事業は福祉制度として取り組まれている。

聴覚障害者にとり、音声情報の文字化は重要な手段である。近年、ICT 技術が進歩し、音声認識システムが手軽に利用できる時代になった。音声のすべてが高速で文字化できる音声認識は、中途失聴、難聴者に有効な手段であることは間違いない。

この事業で、要約筆記と音声認識、それぞれの特性や制約を精査し、聴覚障害者の音声情報獲得の手段における適切さと妥当性を検証し、要約筆記者の専門性を明確にする一助としたい。

また、障害者差別解消法や改正障害者雇用促進法の施行で、社会福祉制度以外の施策で障害者を支える方向が示されている。

要約筆記の専門性を明確にするとともに、今後の聴覚障害者の情報保障について、福祉制度と他施策との関係性を整理することを目的とした。

2-2 実施内容の概要

本事業は、(一社) 全日本難聴者・中途失聴者団体連合会、要約筆記指導者養成研修主催の(社福) 聴力障害者情報文化センター、要約筆記事業に関わる(特非) 全国聴覚障害者情報提供施設協議会に協力を依頼し、検討委員会を設置し意見を伺いながら進めた。そのもとに情報提供施設で実際に要約筆記事業携わる職員、当会のパソコン要約筆記講師による調査研究事業担当を置き、具体的には次の手順で進めた。

まず、2016 年度指定課題 6 で実施したアンケート結果から、派遣事業数が多かった事業体を抽出した。その事業体に協力を求め、電話等による聞き取り調査を実施した。事業体には、障害者差別解消法施行前後の派遣件数や派遣の動向を聞くことで、要約筆記事業の現状を明らかにすることとした。

また、音声認識と要約筆記の関係を検討するため、双方に精通する要約筆記用ソフト IPtalk の制作者からのヒアリングを実施した。

並行して、2016 年度指定課題 6 で実施したアンケート結果から、連係入力による派遣が実施されている事業体を抽出した。地域性も加味し、4 事業体から要約筆記場面を動画で収集した。同じ音源を配布し、20 分間の連係入力(10 分交代)を行い、録画する依頼をした。動画作成にあたっては、画面下段に入力状況が分かるよう画面構成を指定し、録画の日時、場所は異なっても同じ状況で分析できるようにした。

動画は、利用者の読みやすさの視点と、入力状況の課題という 2 面から分析を進めた。利用者の視点で読みづらかった点について、入力で起きたことを分析することで、課題を整理した。

これと並行して、要約筆記事業を実施する事業体に協力を求め、関係入力の研究を交代で聴講するとともに、関係入力の研究を実施する事業体に資料提供など依頼し検討の参考にした。

分析から、関係のモデル整理を行い、関係入力を習得する研修実施の可能性を探った。要約筆記者養成カリキュラムでは、一人入力により情報保障を達成する基礎を学ぶ。その後、選択必修で関係入力を学ぶ場合のカリキュラム案を作成した。また、本事業の検討結果を要約筆記者養成テキスト第 15 講に反映させた。

事業での検討内容を参考にしながら、今後の聴覚障害者の情報保障のあり方と、今後の要約筆記事業が担う点を整理した。

3. 事業の実施内容と調査等の結果

3-1 要約筆記利用の実態

3-1-1 実施事業体への聞き取り調査

1) 目的

障害者総合支援法は平成 2013 年 4 月 1 日に施行となった。「手話通訳等を行う者の派遣その他の聴覚、言語機能、音声機能その他の障害のために意思疎通支援を図ることに支障がある障害者に対する支援のあり方について」が検討規程となっている。厚生労働省「平成 29 年度障害者総合福祉推進事業 指定課題 8」に係る本事業の基礎データとなる要約筆記派遣件数等を収集する。

2) 方法

『「意思疎通支援事業における要約筆記者の専門技術のあり方」事業 聞き取り調査ご協力をお願い』を発送し、担当者に対して、主に電話による聞き取り調査を行った。実施事業体は 2016 年度に実施した全国事業体へのアンケート結果から 22 事業体を抽出。2017 年度または直近の要約筆記派遣数、総合支援法に基づく派遣、依頼者が費用負担をする派遣、方法別や派遣種別(内容別)、また最近の派遣の動向を調査した。

3) 結果

前述の「聞き取り調査ご協力をお願い」文書は自治体の障害福祉課宛、情報提供施設等事業体宛と 2 種類となり、文書が派遣担当者に到達するまでに若干時間を要した。回答は派遣担当者から集約した数字を福祉課の方から得たもの、事業体の派遣担当者に直接聞き取りを行ったものがある。メールで回答を寄せられた事業体もあり回答数は 18 となった。

表 3-1 聞き取り調査 22 事業体の回答・回収率

	配布数	回収	回収率 (%)	未回収
都道府県	11	10	90.9	1
政令市	6	5	83.3	1
中核市	5	3	60.0	2
総計	22	18	81.8	4

以下、具体的な事項について集計結果を報告する。

① 2017 年度の要約筆記派遣数または見込み数

厚労省からは 2016 年度の要約筆記事業実施主体の割合が出されているが、今回の調査では、2017 年度内のデータを調査した。年度末近くに調査をしたため、事業体から収集したデータの期間から 2017 年度の派遣件数を割り出し表にした。

事業体により件数または派遣人数と集計方法が異なるため、集計単位を記載している。

表 3－2 総派遣件数の比較図

事業体 No.	集計単位	2015 年度派遣数	2017 年度派遣数	2015 年度を 100 とした場合の 2017 年度の割合
1	人数	—	7405	—
2	件数	396	703	178%
3	件数	—	441	—
4	件数	225	221	98%
5	人数	1531	1650	108%
6	件数	—	321	—
7	人数	1056	1400	133%
8	件数	407	471	116%
9	件数	204	298	146%
10	件数	243	126	52%
11	件数	—	414	—
12	件数	177	252	142%
13	件数	798	784	98%
14	件数	414	487	118%
15	件数	46	75	163%
16	件数	113	104	92%
17	件数	—	67	—
18	件数	204	240	118%

	: 都道府県
	: 政令市
	: 中核市

② 「総合支援法」に基づく要約筆記派遣 手書き パソコンの件数

手書き、パソコンの各件数を集約している事業体としていない事業体があるため、全体の集約はできなかった。手書き、パソコンの件数の推移については、派遣担当者の聞き取り内容を自由記述に反映させた（p 8）。

③ 依頼者が費用負担する要約筆記派遣 手書き パソコンの件数

②と同じように、費用負担先を集計していない事業体があり、全体の集約はできなかつ

たため、自由記述に反映させた。

④ 2015 年度と 2017 年度の総派遣件数の比較

要約筆記者派遣事業の集計は、上記に述べたように事業体ごとに異なる。そのため、2015 年度を 100% として、2017 年度の割合を表した。

多くの事業体は、障害者差別解消法以前より派遣件数全体が伸びている。

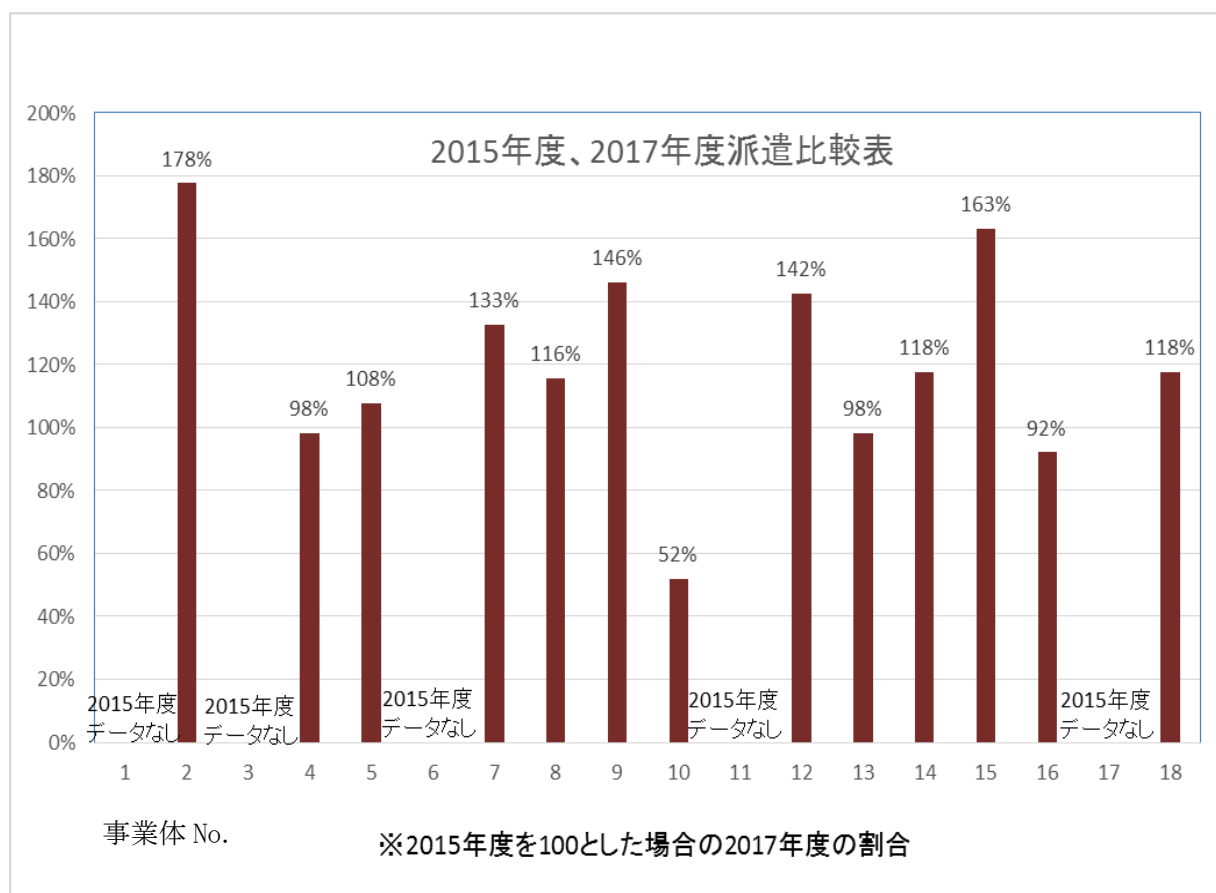
事業体 10 は、市町村の派遣は委託を受けていないため、県域のみの派遣のみ実施している。2015 年度に全国的な大会があり派遣件数が一時的に伸びたため、2017 年度が減少となっている。

今回、都道府県を対象としたが、データなしの理由は以下のとおりである。

事業体 1 …2015 年度以降、事業体のシステム変更があった。現在とは集計方式が異なっており、提出できないとのことだった。

事業体 3、6、13、17…差別解消法前後の派遣件数を比較するために追加調査を行ったが、年度末となり 2015 年度のデータ収集ができなかった。

図 3－1 2015 年度、2017 年度派遣比較表



(聞き取り調査：最近の傾向の自由回答)

全体投影

- ・ 障害者差別解消法施行後、全体投影の依頼が増加傾向にある。
- ・ 手書きに比べて、パソコンによる依頼が増えてきた。
- ・ 障害者差別解消法の影響というより、日ごろのチラシ配布など啓発の結果として派遣は増加傾向にある。
- ・ 以前に比較して、市の行事に手話とともに要約筆記をつける依頼が増加している。
- ・ 主催者負担で講演会に全体投影をつけたいという依頼がある。
- ・ 当事者が集まってのイベントなどの依頼など、昨年まではなかったような内容の派遣が数件あった。
- ・ 来場者 200 名以上の催事には、手話と要約筆記をつける県のルールがあるので件数が増えた。また周知も進んだ。
- ・ 以前は手話だけがつく行事に、要約筆記もつける現場が増えた。
- ・ 難聴者協会の手話教室、談話教室の派遣がほとんどで他は少ない。
- ・ パソコンは 2 団体までの依頼はコーディネート可能。それ以上の依頼には、手書きになると事前に説明する。
- ・ 県レベルの中途失聴、難聴者団体への派遣を認めてほしい。

ノートテイク

- ・ ノートテイクも増加傾向にある。
- ・ パソコン要約筆記の希望が増えている。
- ・ 受診等の意思疎通支援事業での利用割合は少ない。差別解消法施行後は企業内への派遣が増加傾向にある。
- ・ かつては大学から講義に要約筆記の依頼があったが、音声認識ソフトの利用で依頼が減少した。
- ・ 行政関係の職員研修など、会計や法律関係の専門的で長時間の依頼が増えている。
- ・ 法律相談など司法関係の派遣は少ない。
- ・ 以前は、受診や保護者会、学校行事が主で、ノートテイクの派遣自体が少なかった。最近は資格取得のスクーリング、就労（面接、社内研修、社内会議、式典）など、聞こえない人の生活の広がりが見られている。

その他

- ・ 主催者負担の講演会への派遣が増加傾向にある。
- ・ 行政関係は、障害者差別解消法施行後、予算を組むよう求めると理解してくれるようになった。今年度の予算が難しい場合は、来年度からの予算化をお願いして、その回のみ障害者総合支援法枠で派遣することもある。
- ・ 市町村の要綱に時間数や派遣範囲の決まりがある。その場合は県の予算または派遣事業体の自主事業で派遣して、今後につなげる場合がある。

- ・要約筆記者増が課題である。特にパソコン要約筆記者が不足。パソコン要約筆記で対応できない場合、手書きに切り替えることもある。
- ・派遣現場によって、連係入力、一人入力を事業体が選択して派遣している。

4) 考察

2005 年 11 月に「障害者自立支援法」が公布、2010 年同法改正を経て、平成 2013 年に「障害者総合支援法」として成立した。「共生社会の実現」や「可能な限り身近な地域で必要な支援を受けられる」という法の基本理念が定められ福祉サービスを利用できる障害者の範囲が広がった。また、都道府県に広域派遣の連絡調整事業が入った。

これにより聴覚障害者が自ら派遣依頼をして地域生活支援事業・コミュニケーション支援としての要約筆記を利用することで、多岐にわたる活躍、活動がさらに拡充することとなった。全体投影、ノートテイクの派遣場面が少しずつ広がり、利用されている。

要約筆記者は意思疎通を行う専門性を有するものとして養成されている。聴覚障害者が基本的人権を享有する個人として尊厳を持つことを知覚しており、派遣現場では、対人支援の観点から周囲に働きかけることも職務として自覚していると推察できる。

「障害者差別解消法」が 2013 年成立したことから、社会全体の意識も変化の兆しは見える。合理的配慮や環境整備の観点で依頼者負担による要約筆記派遣も増えつつあることが回答から伺える。

今回の聞き取り調査から全体の派遣件数は増加傾向にあることが分かる。パソコンの依頼が増えて全体投影、ノートテイクともに利用度が高まっている。

障害者権利条約批准に向けて整備された法律のもとで、聴覚障害をもつ当事者が依頼する派遣だけではなく、社会の側が聞こえの壁を除去するために要約筆記を申込む状況ができていく期待感がある。

いかなる場にも意思疎通に困難を生じることがないことを期待したい。

3-1-2 要約筆記用ソフト開発者への聞き取り調査

1) 目的

厚労省の指定課題が設定された背景説明に、「近年、めまぐるしく進歩する I C T 技術に対応した提供方法が、聴覚障害者の情報保障を考える上での混乱の一因」と書かれている。

10 年前は音声認識精度も不十分で、現在のように誰もが手軽にその恩恵にあずかる日がくるとは考えられなかった。処理能力の遅さと誤変換の修正作業に手間取り、音声終了から文字の表出の完了までに数十分かかるような実験結果もあった。システムも大がかりで、持ち歩けるものでもなかった。この 10 年の音声認識の研究の進展の速さは目を見張るものがある。

音声の文字化は、聴覚障害者の情報獲得における必須の手段である。音声情報が必要となる場面は主に 2 つある。可視化された音声情報を受信できればいい場面と、双方向のやりとりのある場面である。公共の建物などでの電光表示によるテロップなどは前者に入るし、コミュニケーションの行われる場は後者に入る。後者を支えてきたのは、主に要約筆記であった。要約筆記者がその場に介在して、話されたことの意図を聴覚障害者に伝達することにより、聴覚障害者のコミュニケーションを成立させてきた。

現代では、手軽に利用できる音声認識システムの開発と普及により、要約筆記を使用する以外にも聴覚障害者のコミュニケーションは可能になってきた。音声認識アプリの入ったスマートフォンを相手の前に差し出し、画面の文字を読み、言葉で返して会話する。会話をしたい相手と自分だけでやりとりができるのは手軽であるし、嬉しいことに違いない。要約筆記者を介在させる心理的負担もなく、依頼のための手続きも不要である。こうした特長は、聴覚障害者のコミュニケーション場面に大きなメリットとなる。

今後の要約筆記を検討するには、音声認識との関係性を整理する必要があると考えた。

2) 方法

上記の目的の達成のため、パソコン要約筆記と音声認識両方に精通するパソコン要約筆記ソフト IPtalk 開発者である栗田茂明氏に聞き取りを実施した。栗田氏は、IPtalk の開発、制作だけでなく、ソフトの中で音声認識による文字化を組み、昨年公開している。音声認識と要約筆記の現状と今後についてご意見を伺った。

2018 年 2 月、栗田氏の書かれた論文資料の指定部分を読み込み、伺ったのは次の 3 点である。

- ① IPtalk を制作された経緯
- ② 文字情報による聴覚障害者支援について（音声認識と要約筆記の関係）
- ③ IPtalk の今後

3) 結果

- ① IPtalk を制作された経緯

栗田氏によると、手書きよりキーボード入力の方が速いためパソコンの利用による要約筆

記は早くから¹考えられていた。実用的なパソコン要約筆記は、聴覚障害者コンピュータ協会が、1995 年の聴覚障害者コンピュータ協会例会でのワープロソフトの画面投影が最初である。

その後、1998 年に開催された全国障害者スポーツ大会「かながわ・ゆめ大会」の情報保障にボランティアとして栗田氏も参加した。当時のパソコン要約筆記は、ワープロソフトを使い 1 人で入力する方式だった。高速の入力技術が必要だったが、ボランティアの入力技能では難しかったため、2 人で連携する方式を考えたそうだ。

大会後、パソコン要約筆記サークル「ラルゴ」を立ちあげ、1999 年にサークルの練習会用に IPtalk を作成した。2000 年 3 月に開催された第 2 回全国パソコン要約筆記指導者養成講座をきっかけに、IPtalk が全国に広がり、現在では全国の多くの事業体で IPtalk を利用したパソコン要約筆記者の養成、派遣が行われている。

IPtalk は、多くの利用者や要約筆記者からの要望に応える形で日々更新され、多機能になり、現在では、遠隔機能や音声認識を取り入れる方法も可能となっている。

②文字情報による聴覚障害者支援について（音声認識と要約筆記の関係）

さまざまな場面での要約筆記を考えると、利用者のニーズに応えることが重要である。だが、慢性的に要約筆記者が不足しており、その解決策として音声認識の活用も一考すべきと栗田氏は言及している²。

パソコン要約筆記に音声認識が利用されたのは 1999 年ごろで、復唱者が復唱し、音声認識した結果を修正用パソコンに送信し、訂正係が修正してから表出していた。IPtalk でも 2003 年ごろから音声認識結果を流し込み、修正する方法がとられたが実用化に至らなかったとのことだった。現在は、音声認識ソフト・ドラゴンスピーチからの入力を前提とした機能もある。また、Google Chrome の新通信方式や音声認識エンジン Julius による認識結果も利用できる³。

現状では、まだまだ音声認識の認識率が完全ではない。栗田氏は音声認識を使った情報保障の現場について、次のように書いている⁴。

問題と聞いているのは、話者や先生が認識文をチェックする訳ではなく、認識文に責任を持つ人がはっきりしないとか、利用者が不確かな音声認識の文を見て分かつたつもりになってしまうことが放置されがち、(省略)」とし、「つまり、せっかくの最先端の技術・ソフトを導入しても、情報保障という観点での配慮、要約筆記の歴史の中でさんざん言われて来たいろいろな配慮が不足しているのだろうと思います。」

また、音声認識の誤変換には訂正者が必要であると理解したが、話し手や環境により、ど

¹1988 年の第 9 回全国難聴者研究大会でパソコンのワープロソフトをスクリーン投影したという記録がある。「IPtalk の開発とパソコン要約筆記」2016 vol.59 no.6

²「IPtalk の開発とパソコン要約筆記」2016 vol.59 no.6

³ 栗田茂明氏 IPtalk 9 t67 の説明 2018 年 1 月 1 日 第 1.00 版

⁴ 栗田茂明氏 IPtalk 9 t67 の説明 2018 年 1 月 1 日 第 1.00 版 p.161

の程度の訂正が必要となるかは一概に言えない。だが、訂正者にも一定のスキルが必要なことから、養成方法、その費用対効果などは課題があるとのことだった。

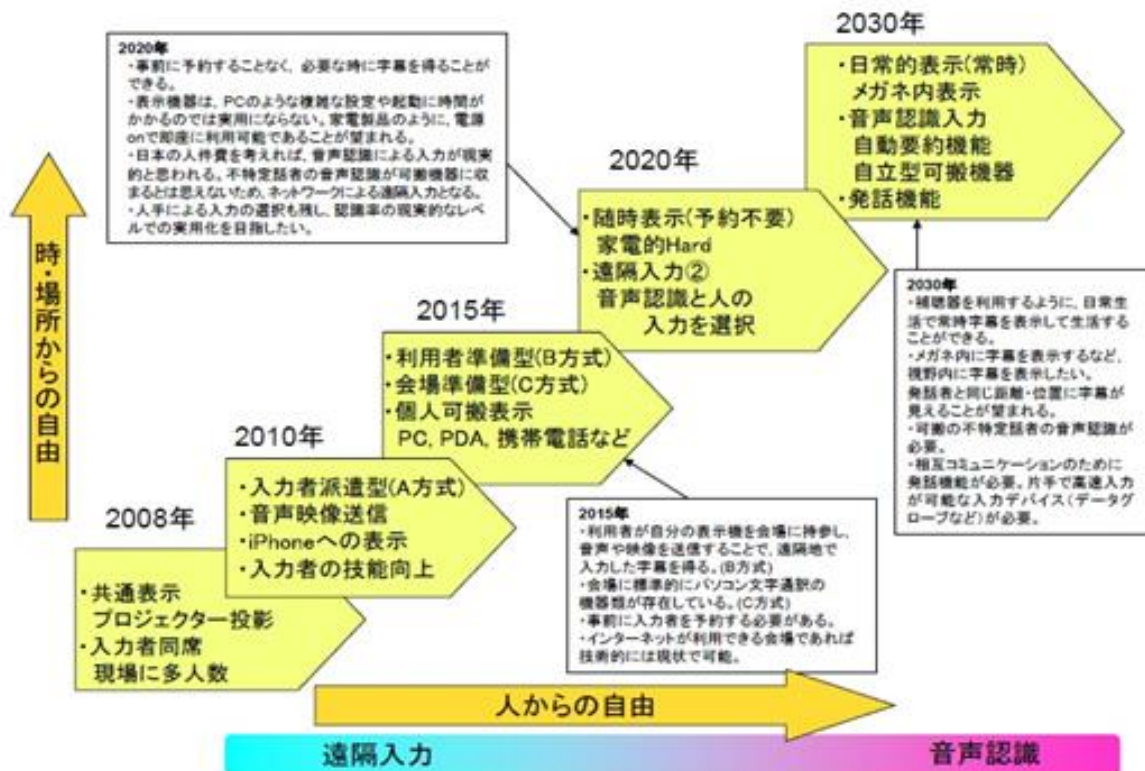
③IPtalk の今後

これについては、栗田氏が論文の一部に掲載しているので引用したい⁵。

図14は、Webサイトで公開¹⁹⁾している「パソコン要約筆記技術ロードマップ」である。「いつでもどこでも必要な時に」「他の人に頼ることなく」パソコン要約筆記を利用できるようになることが目標である。

ロードマップの縦軸は「時・場所からの自由」、つまり「いつでもどこでも」の自由度である。横軸は「人からの自由」、つまり「他の人に頼ることなく」の自由度である。「人からの自由」（横軸）なパソコン要約筆記とは、近い将来は「遠隔入力」で、将来的には「音声認識」と予想している。「時・場所からの自由」（縦軸）なパソコン要約筆記とは、表示に関しては、近い将来はスマホなどの個人的に持ち運びしているデバイスに、将来的にはメガネ内など視野に字幕が表示されることが期待される。もちろん、これらはIPtalkだけで実現することはできない。大学の研究者や企業のエンジニアの方たちが、聴覚障害者への意思疎通支援技術に興味をお寄せくださるとありがたいと思う。

図 3 - 2 パソコン要約筆記技術ロードマップ



⁵ 「IPtalk の開発とパソコン要約筆記」 2016 vol.59 no.6

4) 考察

栗田氏へのヒアリングからは、次のことが明確になった。

1. 音声認識が情報保障の観点からも利用できるものであること。ただし、提供する側で、訂正者を設けるなどの体制が必要である。
2. 音声認識による文字化が進むことで、人からの自由度が増し、同時に遠隔等を利用すれば、どこでも誰でも自由に音声の文字化を共有できるロードマップが可能である。

聴覚障害者が他の人と音声認識アプリを通じて会話するなら、誤認識の確認をその場で行える。文字になったとき、お互いの意図が不明なら、その場で確認すればいい。両者が自分の発言に責任を持ちつつ、修正、調整しながら会話を進める。これは健聴者も日ごろからしている自然な会話に他ならない。こう考えると、現状でも誤認識をその場で確認し合える状況なら、音声認識は力を発揮することになる。

だが、音声認識を情報保障として利用するには検討が必要であると分かった。現時点の音声認識精度では訂正者が必要とのこと。訂正者の養成をしないまま、通訳が必要な場で仲介役としてパソコン要約筆記を利用するのは難しいとヒアリングから理解した。

大量の文字を読みながら理解し、参加することが可能な人もいるだろう。だが、音声認識がそうしたニーズに応えられる一方、全ての聴覚障害者が参加の保障にはならないのではと考えた。聞こえの状況や加齢、リテラシー能力もそれぞれである。加えて、同じ人でも参加する場面や立場で文字情報に求めるものも一様ではない。音声認識が普及することで取り残される聴覚障害者を生んではならない。音声認識の技術や知見を有効に活用するとともに、対人支援を必要とする聴覚障害者に、パソコン要約筆記者が応える使命があると考えた。

3-2 連係入力による要約筆記場面の分析と課題

3-2-1 連係入力による要約筆記場面の分析

1) 目的

各地の派遣事業で要約筆記者が行っている連係入力の状況を分析することで、パソコン要約筆記における連係入力の技術的要素を見出す。それをもとに、連係入力の平準的モデル案の考察へとつなげる。

2) 方法

連係入力による派遣が実施されている事業体に依頼し、実際の要約筆記画面の映像を収集する。今回は、地域性も加味し、4事業体の映像を収集。4事業体とも22分間ほどの同一音源を使用し、通常行っているやり方で入力してもらう。提供してもらう映像画面は、分析のために、利用者が実際に見る表示部と連係入力の状況がつかめる8人モニターの映ったものとする。

分析は、読み手の視点からと入力者の課題からの2方面で行う。

【読み手の視点からの分析ポイント】（画面の表示部のみで分析）

①読みやすさ（視覚的な読みやすさ、理解面での読みやすさ）

- ・表出のリズム

表出までに待たされ感のあった箇所、速すぎたと感じた箇所

- ・適度な空白

空白がなく見づらいつと感じたところ

- ・訂正

F9、F11の使用されたところ

- ・その他

②構文について

- ・1文の主述のねじれ

- ・前後のねじれ

- ・助詞抜け

- ・助詞の間違いつ

- ・語句の不適切さ

- ・その他

③内容

- ・意味がとりにくいつと感じたところ

- ・その理由（備考欄に記入）

- ・展開の要素の有無（流れのわかる文作り）

【入力者の課題からの分析ポイント】（画面の8人モニターで分析）

①連係時の入力状況

- ・入力開始のタイミング
聞こえてきた話のどの部分から、入力し始めるか
- ・入力効率と連係結果の因果関係
表出に至らなかった入力、実際の表出への影響
- ・分担基準の洗い出し

②連係相手の対応

- ・円滑な連係
相手の入力を、モニタリングの状況

2 方面の分析には、以下のデータ分析も参考にする。

- ① 1 文の長さ
- ② 1 回の表出の文字数
- ③ 表出から表出までの時間
- ④ 2 人の入力状況を色分けにする
- ⑤ 入力者別の表出字数と表出回数
- ⑥ 20 分間の総文字数と、表出回数、1 分間の平均的表出文字数、1 回の平均的表出時間
- ⑦ 以上の 4 事業体比較表

3) 結果

【読み手の視点からの分析】

①読みやすさ

要約筆記においては、利用者の読みやすさの確保は不可欠である。長時間、文字を読み続け、そこから内容を理解するという作業は視覚的にも、脳内処理にもかなりの負担がかかるからである。これは、とくにパソコン要約筆記では通訳として機能するために担保されなければならない要素となる。

〔表出リズムのくずれ〕

要約筆記における基本的な表記は当然のこととし、おもにパソコン要約筆記における表出の読みやすさを見ていくことにした。ポイントは一定のリズムのある表出、スクロールである。

一人入力の場合は、1 人で責任をもって担当時間内を入力していく。そのため、コンスタントなスクロールを意識すれば、大きな表出リズムのくずれはさほど表れない。それは、2 人の入力者が協力して入力する連係入力でも同様でなければならない。

4 事業体ともに共通していたのが、表出リズムのくずれが頻出していたことである。

(p32～39 ②「表出文字数・表出までの時間」)

特に読みにくいと感じたのは、待たされてやっと表出、その後すぐに次の表出がなされ、読み切らないうちにスクロールする状況である。

事業体 I では、特に前半にその状況が表れていた。1 例として、17 秒かかって、「周囲

に聞くと、取っていないというのでまずいとは思っている。」が表出された後すぐに、次の「本当に世の中新聞を読んでいないのか？」が2秒弱で表出されている。事業体Ⅱでは、11秒半かかって、「取材しているのは、主に、経済記事。」が表出された後、次の「経済のニュースの取材。広島で殺人事件があっても取材できない。」が5秒で表出され、しかも一気に3行スクロールしている。

また、逆の場合も生じている。前が速く表出され、次がなかなか出てこないという待たされ感である。事業体Ⅲでは、「日本の新聞は部数がとても多い。」が1秒超、次の「しかし」も同様の秒数。「しかし」とあるので、次の内容を早く知りたいと思うが、時間がかかる。10秒弱待ち、やっと「地方紙で50万部発行する。」が表出された。

このような表出リズムのくずれが顕著に出ていたのは、事業体Ⅳである。文末の、「答える。」「高い。」「なる。」「事実。」「思う。」「人も。」「増えた。」「大きい。」などの1語のみが、頻繁に表出される。また、1文も細切れに表出されることが多くあった。「新聞紙は」「確かに」「市民生活から」「遠ざかっている。」や「かつては、」「紙、テレビ、」「ラジオなど、」「オールドメディアと」「言われているもので」「流れていた。」などがその例である。

以上のような表出リズムのくずれが、頻出することで読むリズムがくずれ、負担が大きいのは明らかである。

〔適度な空白〕

また、1行15文字で1画面6行と設定したが、空白のない読みにくさも表れていた。適度な改行により、適度な空白が確保されるが、1文が長いと改行がなされないために当然、空白がないものになる。以下の表は各事業体で出現した長文数と最長文字数である。

表3-3 各事業体で出現した長文数と最長文字数

1文の長さ	事業体Ⅰ	事業体Ⅱ	事業体Ⅲ	事業体Ⅳ
45～59文字	11	13	11	9
60文字以上	8	3	1	2
最長文字数	102文字	69文字	65文字	94文字

このような長文がたびたび出てくると、前後の文が15文字以内であっても、画面にはほとんど空白がなく、視覚的に非常に疲れる状態である。

〔訂正〕

表れていた訂正方法は、F9、F11、訂正送信である。一度画面に表出したものが訂正されるので画面のゆれは当然起きるうえに、読んでいた思考が中断され、訂正された語句の前に戻って読みなおすというさらなる負担がかかってくる。F9による訂正は、一度表出したものを入力部に引き戻し、修正後再度表出するため、その次の表出との間にリズムの大きなくずれが生じがちである。訂正送信は、少し前に読み終わった部分が突然訂正さ

れるので、訂正に気づかないことも起こりうる。また、訂正語句の文字数によっては画面に大きな揺れが生じる。

F 9を使用した例を事業体Ⅳで見てみる。「新聞業界全体でフォーマットを」の次に、「記事の互換性が生まれる。」と表出され、文としては、「新聞業界全体でフォーマットを記事の互換性が生まれる。」が表示される。その次に、「合わせることで」と表出されたが、すぐにF 9で戻され、さらに、「記事の互換性が生まれる。」もF 9で戻される。再表出されたのが、「合わせることで記事の互換性が生まれる。」。2回にわたってF 9で引き戻し、画面のゆれが生じていた。

事業体Ⅲは他の事業体に比べ訂正が多く見られた。特に、後半に集中していた。F 9、F 11、訂正送信のすべてが使われていて、その中でも、訂正送信が多く使用されていた。単純な誤変換・誤入力によるものは、「上げる」を「挙げる」に訂正、「基準び」を「基準に」に訂正するなどがあった。

さらに、大きな画面のゆれを生じさせていた例を1つ、挙げる。「この表現を使うときはこの形でとか」の次に、「それは、業界で、提携されている。」と続いて、1文が完成された。その後、訂正送信を使って、「形」を「ケース」に訂正。それによりすると、1文字が3文字に増えたことで、その後の行がガッガッと大きく動いた。さらに、その後1行空行が生じていた。訂正送信を使用したためと思われる。画面のゆれがあまりに大きいと、読むことに集中できない。

②構文について

〔1文内の主従のねじれ、前後のねじれ〕

日本語の文として整っているかどうかは、文字で読んで内容を理解できるかを左右する大きな要素である。特に、長文になったときに、また話されていることをそのまま入力したときに、主従のねじれ、1文の中での前後のねじれが散見されていた。

一番長文の多かった事業体Ⅰの例を見てみる。最長102文字の文である。

皆さんに、私は新聞記者として蓄積した知識、新聞記事をどう読めばいいのか、新聞記者、新聞情報を仕事に活用している、企業の幹部や中央官庁の幹部など、プロフェッショナルは新聞のどこに注目しているかをお話したい。

これは、話し手が参加者に話したいことを提示している内容である。話されているままを読点で区切りながら、単に羅列している文になっている。そのため、ねじれが生じ一読して意味がすぐにつかめないものになってしまった。

事業体Ⅱの例。

数字では現しにくいだが、新聞の影響、ニュースの影響は、もしかすると新聞離れを逆に強まっている可能性がある。

主語と述部の間に、「もしかすると新聞離れを」を入れたために、ねじれたものとなった。「影響は」に対応するためには「強めている」にしなければならない。

〔助詞抜け、助詞の間違い〕

また、このような長文ではなくとも、助詞抜けや助詞の間違いもかなり起きている。例えば、事業体Ⅳ。「大学で新聞を読んでいないと応えた人に、ニュースはなにで読んでいると聞くと、スマホやネットで読んでいる。」これは、文末が「読んでいると。」にならないと、整合性がない。また、「なにで読んでいると聞くと、」も「なにで読んでいるかと聞くと、」が正しい助詞の使い方である。

「この中にも新聞記事は読まない人はいると思う。」は「新聞記事を」が助詞の使い方としては正しい。話しことばに引きずられた結果だろう。

事業体Ⅱの例。「または、新聞情報を活用している、企業の幹部や、中央官庁の幹部など、プロフェッショナル、ニュースをどう扱っているかを紹介したい。」。主語にあたる「が」か「は」がない。また、何がどこにかかるかを示す助詞「の」がないために、意味の取れない文となっている。

〔語句の不適切さ〕

話し手は、「ただ、今、現実、世の中はどうなっているか」と話している。この部分を各事業体ではどのように入力しているのかをしてみる。

話し手の発言	ただ、今、現実、世の中はどうなっているかというと、
事業体Ⅰ	今世の中はどうかというと、
事業体Ⅱ	世の中の現状を見ると、
事業体Ⅲ	世の中のことを考えると、どうだろう。
事業体Ⅳ	現実、

事業体Ⅰは、聞いた音声を、そのまま入力し、事業体Ⅳは、「現実、」のみで意味のつかめないものとなっている。意味を理解し、適切な語句を選択する重要性がわかる。

同じことが、次の例でもいえる。話者の発言は、「じゃ、本当に新聞を世の中、よまなくなっているのか、というと、これ、一面、当然、真実なんですね。」。前半部分は、各事業体は同じ内容を入力していた。後半部分の適切な語句の選択をしてみる。

話し手の発言	これ、一面、当然、真実なんですね。
事業体Ⅰ	ある意味では真実。
事業体Ⅱ	これは一面の真実ではある。
事業体Ⅲ	(入力せず)
事業体Ⅳ	一面は真実。

事業体Ⅰが、意味を理解した語句の選択になっている。また、事業体Ⅲのように、あえてこの部分を入力せず、次につなげていくという選択もある。要約筆記者は、意味を理解すると同時に、言ったままの言葉に引きずられないのは重要なことである。

[その他]

時制の齟齬もあった。「私が大学生のとき、つまり、私たちが教えている学生たちの年代のころ。新聞を取っていた人は、すでに1割をきっている。」。

③内容

話を正しく聞きつかむ力は、要約筆記者には必要だが、意味の取り違い、内容のあいまいさも見られた。話を聞きつかめなかったという理由以外に、文にするとときに読点の位置を間違えたために意味の違ったものもあった。さらに、話の展開、つまり前後の流れが不明確なために内容がつかみにくい状況も見られた。

あえて話し手の発した語句を入力することで展開をわかりやすくしたものも見られた。内容や展開については、⑤内容（p56～63）を参照していただきたい。

ここでは、話し手の発した語句をそのまま入力することで、展開がわかりやすくなった例を示したい。下線の部分が話し手の発した展開を示す語句である。事業体Ⅱの例である。

「それと同様に、3つの座標軸を置いて情報をみると、物事が立体的に見えてくる。」

「先ほどの3つのポイントと、ここに挙げている、発信者の立場、動機、表現は対応している。」

「ここから情報を読み解けば、情報一般も読み解けるようになる。」

「たとえば、自分の子どもの言っていることを、どう読み解くか。」

「あるいは、取引先が情報を出してくれたときに、どう読み解くか。」

「この分析の仕方が役立つはず。」

「だから、みなさんが今日の話を聞いて、これを実践すれば、・・・・。」

【入力者の課題からの分析】

①関係時の入力状況

十分な入力技能をもち、要約技術や要約力を十分に有している入力者であっても、関係を行う場合、どこから入ればいいのかという見極めは難しい。音声に句読点はなく、切れ目となる目印はないため、話の流れを即座に捉え、ペアがどこまで表現するかを予測することが重要となる。

[入力開始のタイミング]

入力をはじめるタイミングとして、文節の始まりを起点とすることが多い。話し手が言いよんだり、「えー」などの無機能語を発した瞬間を利用することも特長のひとつであるといえる。

[00 : 13] えっと、2時間くらいになると思いますが、よろしくお願いします。
 [00 : 16] えっと一、まあ、あの、今日お集まりいただいている方というのは
 [00 : 22] わりと新聞を日ごろから読まれている。
 [00 : 26] もしくは、あの仕事なんかで使われている方がけっこういらっしゃる、
 [00 : 29] 多いんじゃないかと思いますね。
 [00 : 31] えー、ただ、今、現実、世の中全体を見ましてどうかといいますと、
 [00 : 36] たとえば、私が今教えている関西大学で授業をしていて、
 [00 : 40] 新聞を読んでいますかというふうに、
 [00 : 42] まあ、だいたい20代前半の学生さんにうかがうとですね、
 [00 : 46] ほとんど新聞は読んでないっていう答えがかえります。

(網かけ部分は関係相手の入力)

情報が過密な部分の入力は、文節を区切りとするのではなく、単語の切れ目で行い、より多くの情報を拾う方法へと即座に切り替えるなどの工夫がうかがえる。固有名詞などが頻出する場合、意味の切れ目よりも語句の切れ目を優先して入力開始をすることがわかる。

[02 : 39] ま、海外の皆さんが名前を知って聞いたことがあるような新聞というのは
 だいたい100万部いていません。
 [02 : 46] えー、まあ、そうですね、
 [02 : 49] ニューヨークタイムズなんかは日曜版だけ
 100万部超えていると思いますけれども、
 [02 : 54] たとえばフランス、ル・モンドとかですね、
 [02 : 56] えー、まあ、ワシントンポストとかですね、
 [02 : 59] えー、皆さんが聞いたことがあるような外国の新聞というのは
 [03 : 03] まあ、そもそも100万部いていないものが結構あります。

[入力効率と関係結果の因果関係]

入力開始から表出までにかかった時間を記録し、打鍵速度を確認した。一般的なローマ字入力による換算とし、全入力者の変換負荷の少ない平易な部分を採用して検証を行った結果、1秒あたりの打鍵速度に倍以上の開きがあっても、1秒あたり6以上の打鍵ができていれば、それほど影響がないと分析した。

一方、打鍵速度以外の面で入力効率を下げる要因も明らかになった。例えば「今日は皆さんに」を「今日は皆さんい」として、最後の一文字を修正する。このような軽微な修正でも、位置が文頭などであればロスタイムが生じ、これが頻繁にあると、大きな損失につながる事がわかる。

語句変換の作業効率をさらに分解すれば、より少ない打鍵数で確実に変換する変換作業そのものの効率と、誤変換からの立ち直りの速さ、修正作業の効率とがあるだろう。「記者が」という表出をするはずが、「っs」→「喜捨」→「貴社」→「記者が」という変換修正を繰り返す間に、5秒かかっている部分があった。5秒による損失を音声で確かめてみ

ると、文字起こし文の 02:59 で始まる一行が完全に言い終わっているということになる。
聞き落とした部分は次の文の主部であるので、述部だけ表出しても正しくは伝わらない。

さらに、表出に至らなかった入力・消去内容も入力効率に関係すると考えて、水面下での作業が実際の表出結果にどのような影響を与えるのかの一例を示す。

[03 : 31] で、それぐらいのペースで
[03 : 32] 今、発行部数、まあ、もしくは購読者数っていうのは減っているわけです。
[03 : 37] で、しかし、えー、また話を戻しますと、
[03 : 40] ですからまあ、新聞が読まれなくなっている。
[03 : 42] この、新聞、紙ですね。
[03 : 43] 紙の新聞をとらなくなっている。
[03 : 47] あー、皆さんがそこから少しはなれていることは、これ事実です。
[03 : 51] 数字でも裏付けられています。
[03 : 53] しかし、一方で、
[03 : 55] じゃ、新聞が読まれなくなっているか。
[03 : 57] えー、まあ、もう少し言い方を変えると、
[03 : 59] 新聞記事を皆さんが読まなくなっているかという、
[04 : 03] 必ずしもそうではありません。
[04 : 05] むしろ逆の現象が起きているってのが私の分析なんですね。

音声 3 分 31 秒から 4 分 5 秒における事業体 I の表出結果は、以下の通り。

[03 : 44－03 : 55] 紙の新聞をとらなくなっているのは事実。
[03 : 58－04 : 11] 一方で新聞記事を読まなくなっているのかというと、むしろ逆。

入力・表出は、入力者 A。だが B との間で、重複入力→同時消去、重複入力という問題が発生していた。具体的には、次のような工程が見られた。

([03:41] 入力者 2 名ともスタンバイの状態)
[03:44] 入力者 A が「しんぶん」と入力開始。
[03:45] 入力者 B も「しん」と入力開始した。
[03:46] A B とも消去の状態。入力部内は空になった。
[03:47] 両者の入力部は、A 「紙」、B 「か m」。
[03:48] A 「紙のしん」、B 「紙の」→消去 という状態になった

今回のように、入力表出作業が一段落し、次の通訳作業に入るタイミングが同時になると、重複入力が起こりやすい。この部分は繰り返しの部分なので、内容的には、それほど損失はない。しかし、このあと、B が入力を開始したのは [04:13]。[03 : 45] の入力開始から次の表出に結びつく入力開始までに 30 秒近く消耗したことになる。瞬間的に見える数文字の重複→修正ではあっても、入力効率を下げる要因になる。

ここではBが、「一方で」から始まる内容をAに任せ、次に目を向けて入力したのは損失を最小限にするために必要な英断であった。このように、重複入力をしたとき、負の連鎖からいかに早期に脱却するか判断もまた、入力効率に大きく影響するといえる。

〔分担基準の洗い出し〕

ひとつの文章を、どう分担して入力するか定義に統一されたものはないが、基本は、パートナーがどこまで打つかを予測し、その先から打ち始めるというもの。相手が打ち終わるのを待ってから打ち始めているようでは、1人で入力しているのとなんら変わらないので、パートナーの入力が終わるのを待たずに打ち始める。これが連係入力の、ひとつの特長といえる。

[00 : 22] / 2時間くらいになりますが、よろしくお願いします。

[00 : 29] 今日お集まりの方は、

[00 : 32] 新聞を日ごろから読んでいる、

[00 : 36] 仕事で使っている方が多いと思う。

[00 : 43] 今世の中はどうかというと、私が教える

[00 : 52] 関西大学の学生は、

[00 : 56] ほとんど読んでいないと答える。

事業体Ⅰの冒頭部分。まず入力者Bが表出。文字数だけをみると長い、「よろしくお願いします」に単語登録を使った。待たされ感はないが、文字自体は長いので、画面が2行一度にあがった。前半部分で一度スクリーンにあげていけば、画面の揺れも解消したはずである。

そのときのパートナーの動き。登録の中身を知っているようで、「よろ」の入力を見た時点でその先の話から入力を開始した。

入力者Aの2巡目「多い」は「大歩背」と誤入力・誤変換し修正ロスが発生。その先を入力者Bが入れることになったが、聞いたまま「現在」と一旦入れたものを、内容に合わせて「今」に変えた。適切な判断だったように思う。読点が入れられれば、もっと読みやすい表示になったのでは。

このチームは概ねコンスタントに表出できていたが、文節とも一文とも言えない箇所では、表出された部分があり、リズムカルとはいえないのが残念だった。できれば「私が教える」は、入力者Aが担当してほしかった部分である。

②連係相手の対応

〔円滑な連係〕

連係入力の特長は、同じ音声を同時に二人で言語処理しているところにある。一人入力の際のサブの補筆とは異なり、どちらも主筆である。そのため、入力の交代位置は、後からの入力者が入力したところとなる。先行して入力している者は、後から入力開始されたところまでが自分の分担範囲となる。

交代位置を教えるため、後から入力に入る者は、ここと決めたところは速やかに入力していかなければならない。概ね、話が順調に進んでいるときには、どの入力者も決めてから入力に至るまでほぼ同時、あるいは2秒以内でおさめていることが多かった。

また後発者は、先発者が入力をしている間に、次の入力を開始している。

[11 : 21]で、今日はちょっとそういうことで前置きが長くなりましたが、
[11 : 24]皆さんに私が新聞記者として、
11:25 皆さんに、～11 : 30
[11 : 27]えーまあ、
11 : 27 新聞記者として～11 : 35
[11 : 28]蓄積してきた知識ですね。
[11 : 31]えー、新聞記事をどう読めばいいのか。
11 : 33 新聞記事をどう～11 : 38
[11 : 33]えー、あるいは、新聞記者とかあるいは新聞情報を仕事に活用している、
11 : 35 新聞記者、新聞情報～11 : 44
[11 : 38]えー、たとえば企業の幹部だとかですね、
11 : 40 企業の幹部～11 : 50
[11 : 42]あるいは、えー中央官庁の幹部だとかですね、
[11 : 45]え、まあ、そういういわばプロフェッショナル、
[11 : 47]えー、ニュースをプロとして扱っているような人たちが
新聞をどう読んでいるか、
11 : 48 プロフェッショナル～11 : 56
[11 : 51]どこに注目しているかっていう話を皆さんにお伝えしたいと思います。
11 : 54 どこに注目～12 : 01
[11 : 55]

このようにシンプルな進行で進めていけるのがベストだが、2人で1つの文章を作る作業により、複雑なオペレーションが生じていることもある。たとえば、事業体Ⅲで待たされ感を感じた部分のひとつ、「日本の新聞は部数がとても多い。」「しかし、」の後の10秒[03 : 18－03 : 28]の空白時間には、入力部で、後出のやりとりがあった。該当部分の音声を掲載する。

[03 : 06]で、日本の新聞って実は、
[03 : 07]あの地方紙も含めて非常に部数が多いんですが、
[03 : 10]えー、それでもですね、えー、
[03 : 13]地方紙でまあたとえば50万部ぐらいのところってのは
かなり大きい部類に入りますが、
[03 : 17]それが2社くらい毎年消えてなくなっているぐらいのイメージです。

音声 3 分 06 秒から同 17 秒における事業体Ⅲの表出結果は、以下の通り。

[03 : 17]	A 「ちほす」 → 「ちほう → 地方紙」	B (入力なし)
[03 : 20]	A 「地方紙で」	B 「2 社」
[03 : 22]	A 「地方紙で 50」	B 「2 社くらい」
[03 : 23]	A 「地方紙で 50m」	B 「2 社くらいが」
[03 : 25]	A 「地方紙で 50 万部は」	B 「2 社くらいが」
[03 : 28]	A 「地方紙で 50 万部発行する」 + enter	B 「2 社くらいが」
[03 : 29]	A 「し n」	B 「2 社くらいが」
[03 : 31]	A 「新聞社」 + enter	B 「s 2 社くらいが」
[03 : 32]	A 「まいと」	B 「s 2 社くらいが」
[03 : 38]	A 「毎年減っていることになる。」	B 「、その 2 社くらいが」 + enter
[03 : 40]	A 「毎年減っていることになる。」 + enter	B 「紙」

注目すべきはこの作業中、すでに音声は先の内容に入っているということである。冒頭の A。ミスタッチがあり、若干のロスタイムが生じた。「地方紙で」と入力したあと、少し動きがゆっくりになったが、これは、B の「2」という入力が始まった瞬間でもあった。このとき A は、

耳 → 現在進行している、先の部分を聞く。
手 → 5 秒前くらいの音声を入力している。
目 → パートナーの入力内容を見ている。

という、3 つの作業を同時に行っている。

[03:28] で表出をいったん上げてから、間髪入れずに「新聞社」という言葉を付け足しているところから、表出を分割して早めたのだということもわかる。ただ対応としては、B の「2」を目視したあと「地方紙で」だけで先に表出し、その後を一気に入力・表出したほうが、待たされ感は減少する。

この間の B は、手を止めている時間が長いように感じるが、[03:40] で「紙の」という [03:22] 以降の話にすぐさま取りかかっている様子が見える。手を止めて、A の進捗状況をモニタリングし、自分の表出タイミングを見計らい、現在展開している音声を聞き取り、このくだりが終わった後のアクションにうつる段取りをしていたと推察できる。このあたりは、模範ともいえる連係といえる。

この部分の音声は、一見平易にみえて、実は難易度が高かった。直前に固有名詞と数字の列挙があり、一気に作業スピードが上がっていた。また、構音の膠着なども出現していた。

スクロールという点では、他の事業体のほうがはるかにコンスタントだったが、内容的

には、全事業体の中で最も正確性が担保されていた。そこから考えれば、事業体Ⅲの入力者2名は、この場面では同時性よりも正確性を最優先していたと考えられる。通訳として成功したと言えるだろう。

事業体	表出結果	備考
事業体Ⅰ	地方紙で50万部だとかなり大きい部類だ。それが2社毎年消えているイメージ。	一見良さそうに思うが、「日本の」という前提がなく、直前の海外紙の話しの続きと間違える。
事業体Ⅱ	日本の新聞は部数が多い。それでも、地方紙で50万部ほどの、大きなところ。それも2社は消えているのが現状。	2社の消えている頻度「毎年」が抜けている。
事業体Ⅲ	しかし、地方紙で50万部発行する新聞社、その2社くらいが毎年減っていることになる。	規模については割愛しているが意図の伝達に損失はない。
事業体Ⅳ	日本は発行部数がそもそも多い。地方紙では50万部発行ぐらいが多い。それが2社、毎年減っていくほどの数字になる。	50万部発行ぐらいが多いのではない。

リズムのくずれが顕著だった事業体Ⅳについても、その原因を分析した。
この事業体の入力者は、技能に大きな差があるように見て取れる。冒頭1分半の表出結果は、次のとおり。

松林／始めます、よろしくお願いします。
今日の参加者は、
新聞を日頃から読まれている、
仕事でも使われている方が多いと思う。
現実、
私が今教えている
関西大学で
聞くと、
学生さんのほとんどは
新聞を読んでいないと
答える。
日経新聞に勤めていた。
朝日新聞でも、読売でも、
購読者の平均年齢は
高い。
平均年齢は50～60代。
新聞をとらなくなってきた人も
増えてきている。

入力者Aは、タイピング速度が速く、モニタリング力も高い。

動画の中では、自身の表出を小分けにするほか、読点のあとで待つような場面が複数回見られた。おそらくは、入力者Bの連係経験が浅いため、入力開始部分を暗に示しているのではないか、あるいは、何らかの形でBの見守りなどを行っているのではないかと考えられる。もしくは入力が速いため、一回の表出量が多くなりがちで、いったん表示部に上げた文章の続きを打つ際、最後の1文節になってしまうことが多いのかもしれない。いずれにしても、このリズムの崩れは入力者間のバランスの問題であり、改善は容易だろう。事業体IVについては、リズムの崩れよりも分担率の偏りのほうが大きな課題だと推察する。

入力者Bが連係の経験が浅いという結論は、以下から推測される。2回表出した後、[00:37]から[00:56]まで入力をしていないことや、その後も[01:09]から[01:13]まで入力をしていないこと。おそらくは、意味の切れ目で文の途中で入っていくことに不慣れなため、飛び飛びに入力に入っているように見られる。文レベルでの区切りからしか入力開始ができていないことから、2人でひとつの文を作ることに慣れていないと推察できる。しかし、徐々に、文節レベルでの意味の切れ目の入力開始位置が増えてきて、5分を過ぎる頃から感覚がつかめてきたようだった。モニタリングも当初は、おぼつかず、Aが重複した部分を消去して対処していたが、徐々に自身の入力内容を調整する場面も見られるようになった。Bは、自身の文章の助詞を表出前に微調整するなど文章力は十分であり、後半になると、Aと自分との入力内容を見て、追加入力するなど伝達技術も高いものがうかがえた。克服すべきは連係における入力開始位置や分担率のあたりと入力技能のさらなる向上だろう。

連係入力では、相手の入力を常に見続けるモニタリング力が大切になる。そのためにはまず、1人で余裕を持った入力ができることが基本となる。余裕がなくなると、聞き取ることに集中できず、聞こえてきた音に飛びつき振り回されるため、文章のねじれや重複が起こりやすくなる。意味の通った文章にするためには、常にパートナーの状況を確認しておかなければならない。

4) 考察

パソコン要約筆記においては、一人入力か連係入力に関わらず、いかに読みやすく、理解しやすいものが待たずに出されるかにつikir。つまり、いかに要約筆記の三原則「速く・正しく・読みやすく」を達成しているかである。その観点で連係入力の画面を見たときに一番問題となったのが、表出のリズムが頻繁にくずれる読みにくさだった。待たされたり、速すぎたり。読むリズムがくずれ、非常に読みにくく疲れるものであった。それがどのような状況で起きるのかは一樣ではないが、入力者の交代時に起きやすいとすれば、一人ひとりが読みやすさを意識した表出をコントロールできる力を確実につける必要がある。待たされ感感覚として8秒以上表出がないと起きたが、表出のリズムが大きくくずれず、コンスタントな表出だと、その待たされ感は弱まった。速すぎ感にも同じことがいえた。コンスタントな表出の重要性がわかる。事業体Iは、コンスタントに感じる場面

が多かったが、表出までの時間が 10 秒以上と長いことが多々あった。そのため、分析担当者はその長い間隔に慣らされ、10 秒でも待たされ感を感じなかったほどである。いくら、コンスタントでも表出までの時間が長いのは、その場の通訳として機能するには厳しいものがある。

日本語構文の正確さも一人入力で身につけておくことである。日頃から、日本語そのものや日本語構文力を高めるのは、要約筆記者として当然のことである。

整文されていない日本語文、文のねじれなどは必ずしも関係だから起きたということではないだろう。もし、関係により起きたとすれば、互いのモニタリングを確実にする必要と同時に、同じような文構成で要約できる訓練が必要になるのかもしれない。

内容や話の展開も同様である。1 人で聞きつかむ力、展開を追う文章構成力がついていれば、関係でもできることと思われる。

一人入力ではありえないような長文の長さや多さは、関係入力に起きがちな事象といえるかもしれない。文字が次々に、長々と出てくると、読む立場では、出てくる文字をただ読んでいるといった感があった。意味をつかんでいるという感覚は持ちにくかった。

また、前半と後半とで入力の違いが大きく表れていたチームもあった。誰と組んでも同じ関係ができる力とともに、チームとしての統一感が必要である。

利用者のニーズは、その立場や目的によってさまざまであり、その声に応えるための選択肢のひとつに、関係入力があるといえる。関係入力とは、選択肢を増やすことで、利用者の目的を達成するものである。より豊かな情報保障を実現するためのもので、1 人で入力する力が備わっていないことの補完ではない。

多方面から分析をした結果、通訳として利用できる関係入力に求められるものも、いかに要約筆記の三原則を達成するかという原点にあった。

5) 分析結果資料

① 事業体ごとの入力画面の状況

昨年度のアンケート調査から、関係入力の手法を取るところをピックアップ。
その中で、以前より関係入力を実施する事業体、地域的に偏らないように5地域を選択。
依頼を出した。この中で、受諾していただいた4実施主体を詳細に分析。

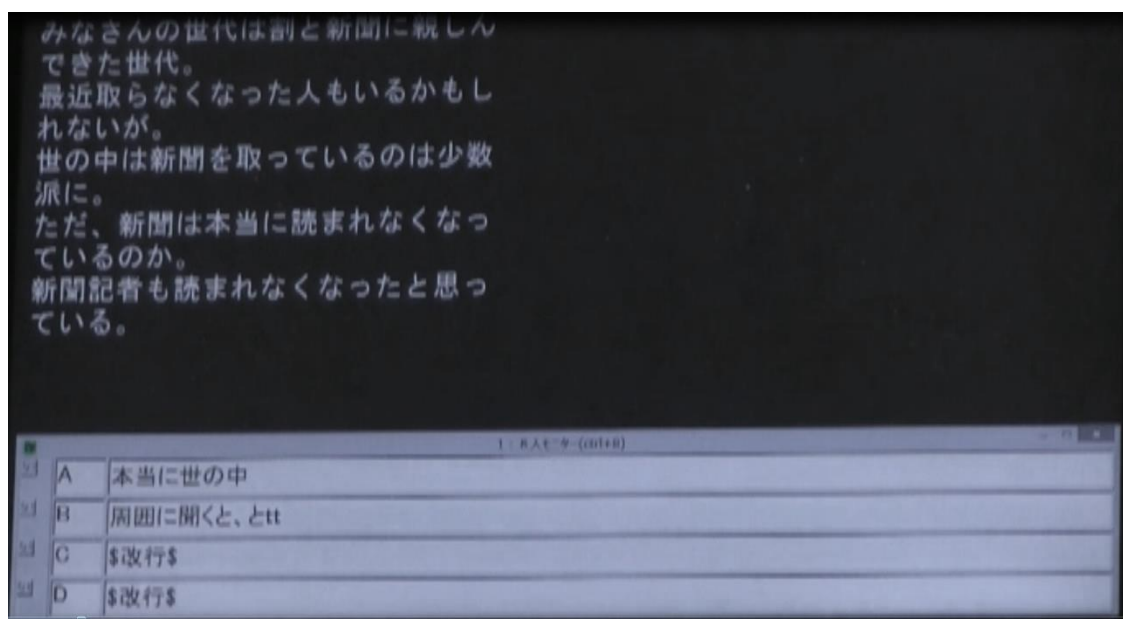
分析事業体 : 4

手 法 : 講演会冒頭の20分を関係入力。

動画は、当会から指定した画面で収録

1. IPtalk を利用。
2. 上に表示画面（スクリーンへの表出と同様15文字6行）
3. 下段に8人モニターを置いて、入力画面が分かるようにする。
4. 入力者の名前は、最初がAとB、次がCとDで、10分で交代。
または、通常の派遣と同様に交代する。入力者は登録要約筆記者。

【事業体Ⅰ】



【事業体Ⅱ】

る。
しかし、ネット、スマホを通じて新聞
に載っている記事を読む機会は、
実は増えている。
私は今、43歳。

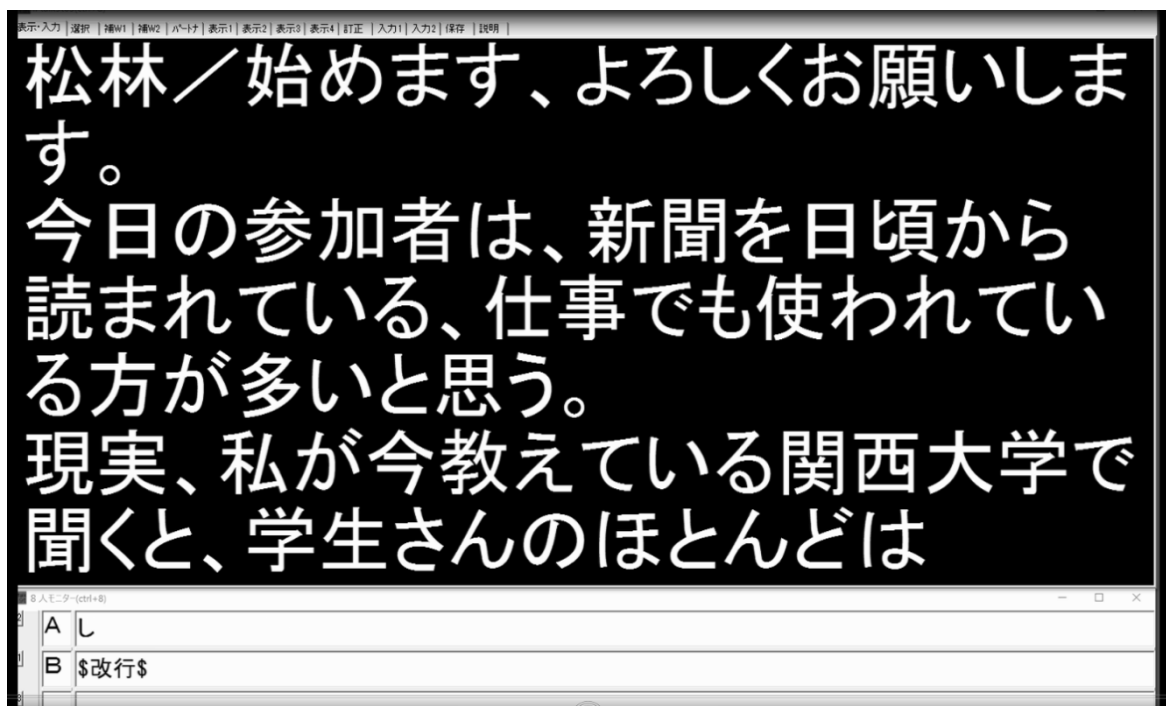
A	\$改行\$
B	私が大学生の
C	\$改行\$
D	\$改行\$

【事業体Ⅲ】

松林／よろしくお願いします。
今日、来られている人たちは、日
頃から新聞を

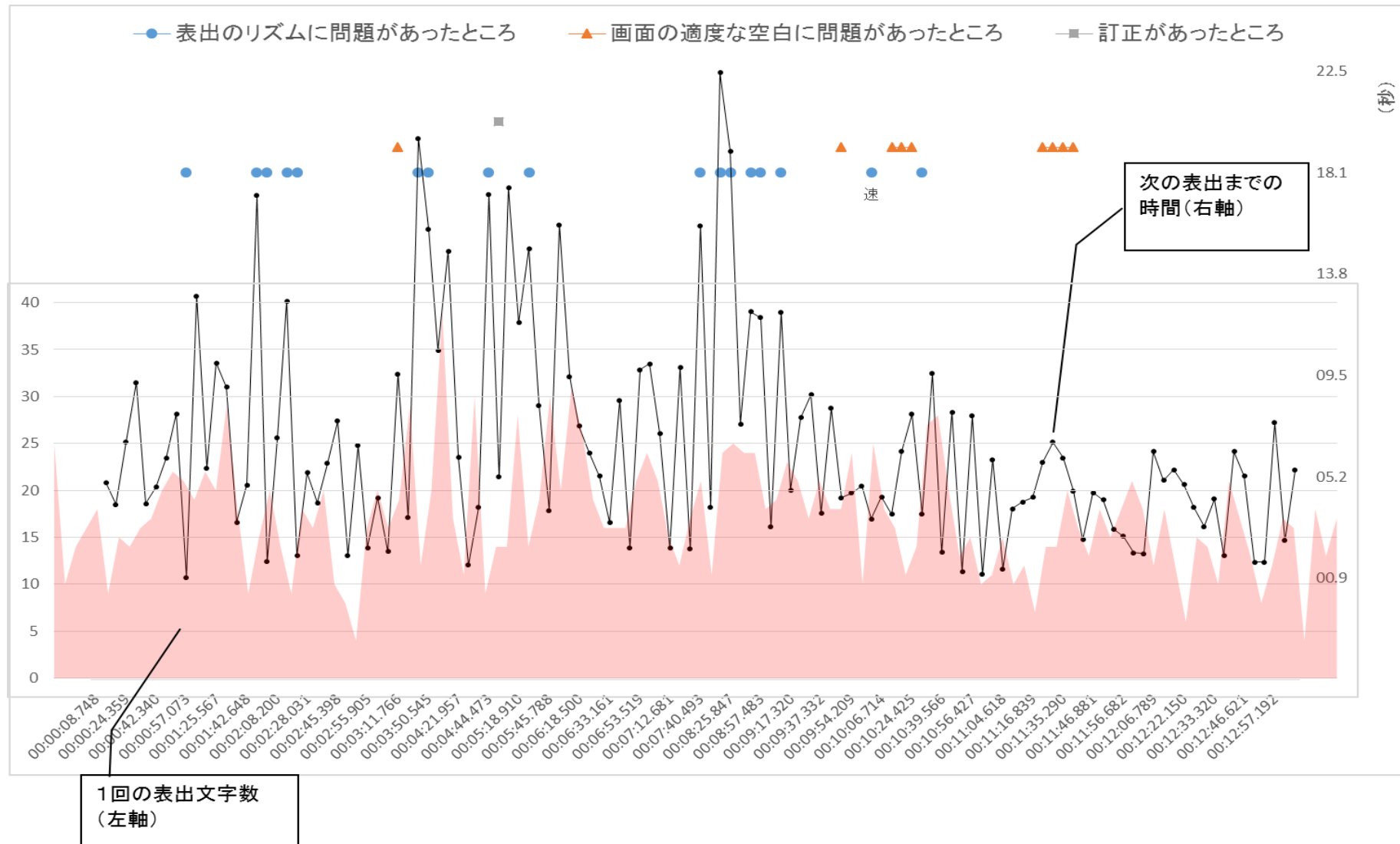
A	\$改行\$
B	読まれている方
C	●消去●
D	○消去○

【事業体Ⅳ】

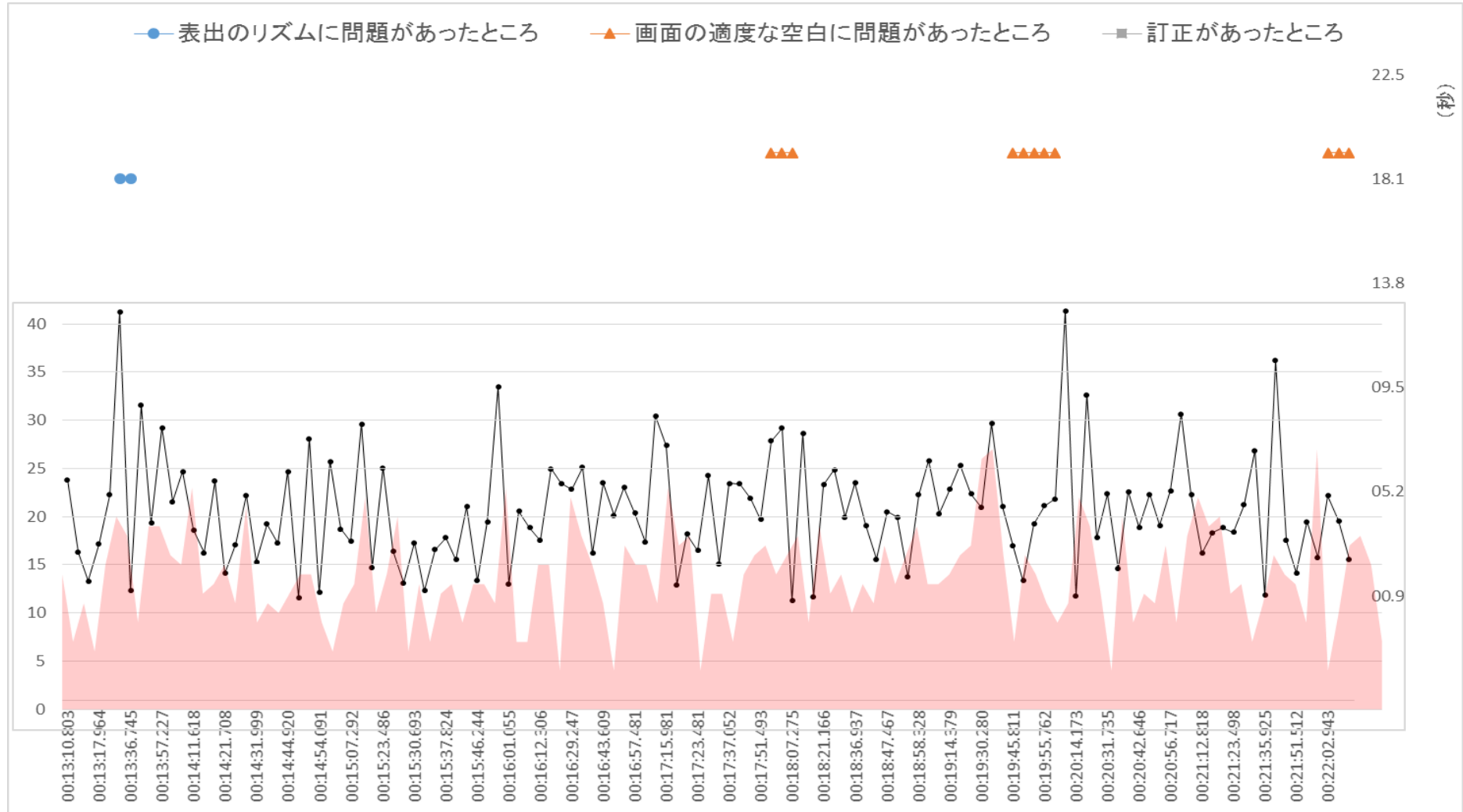


② 表出文字数・表出までの時間

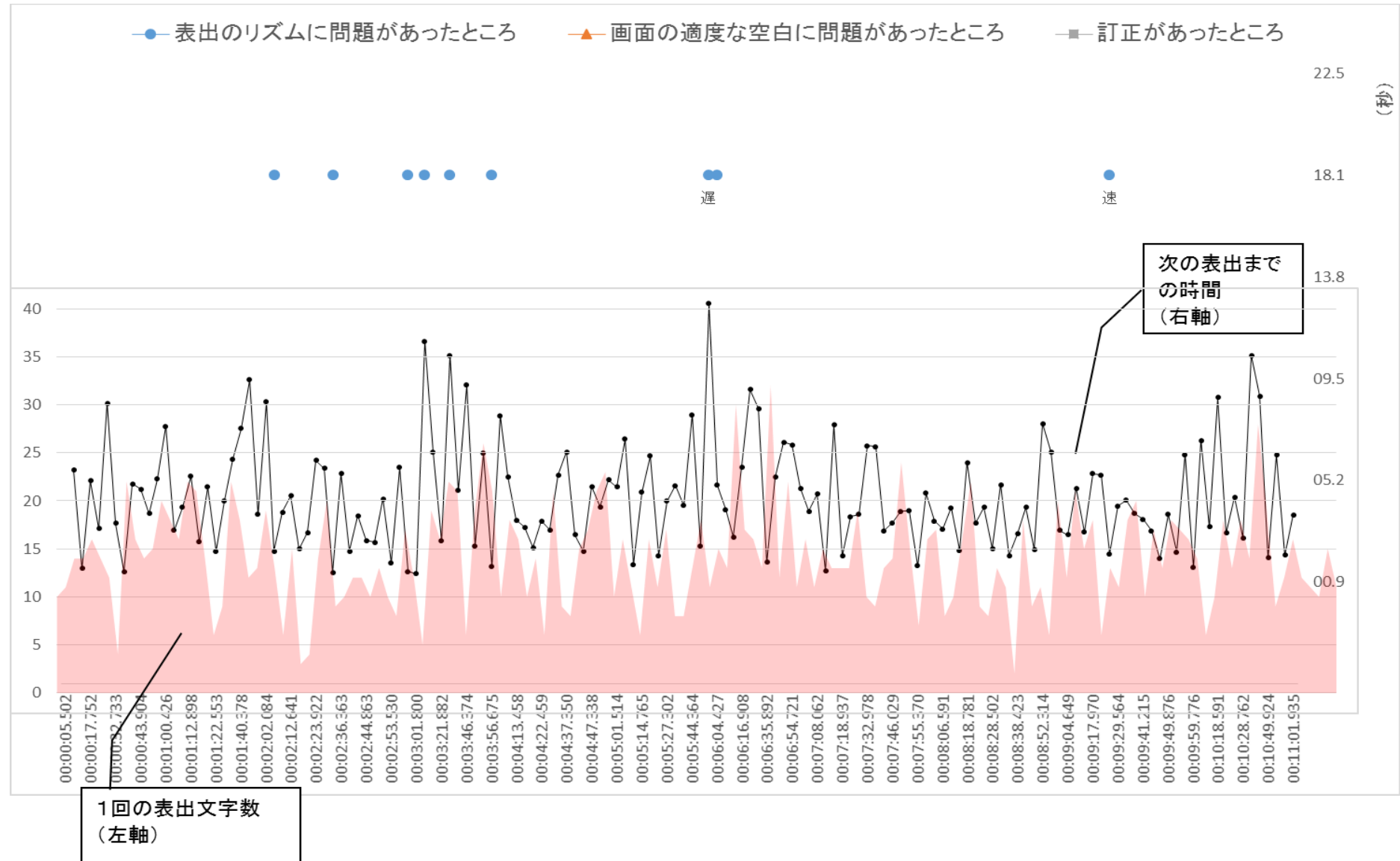
②-1-1 【事業体I】 1



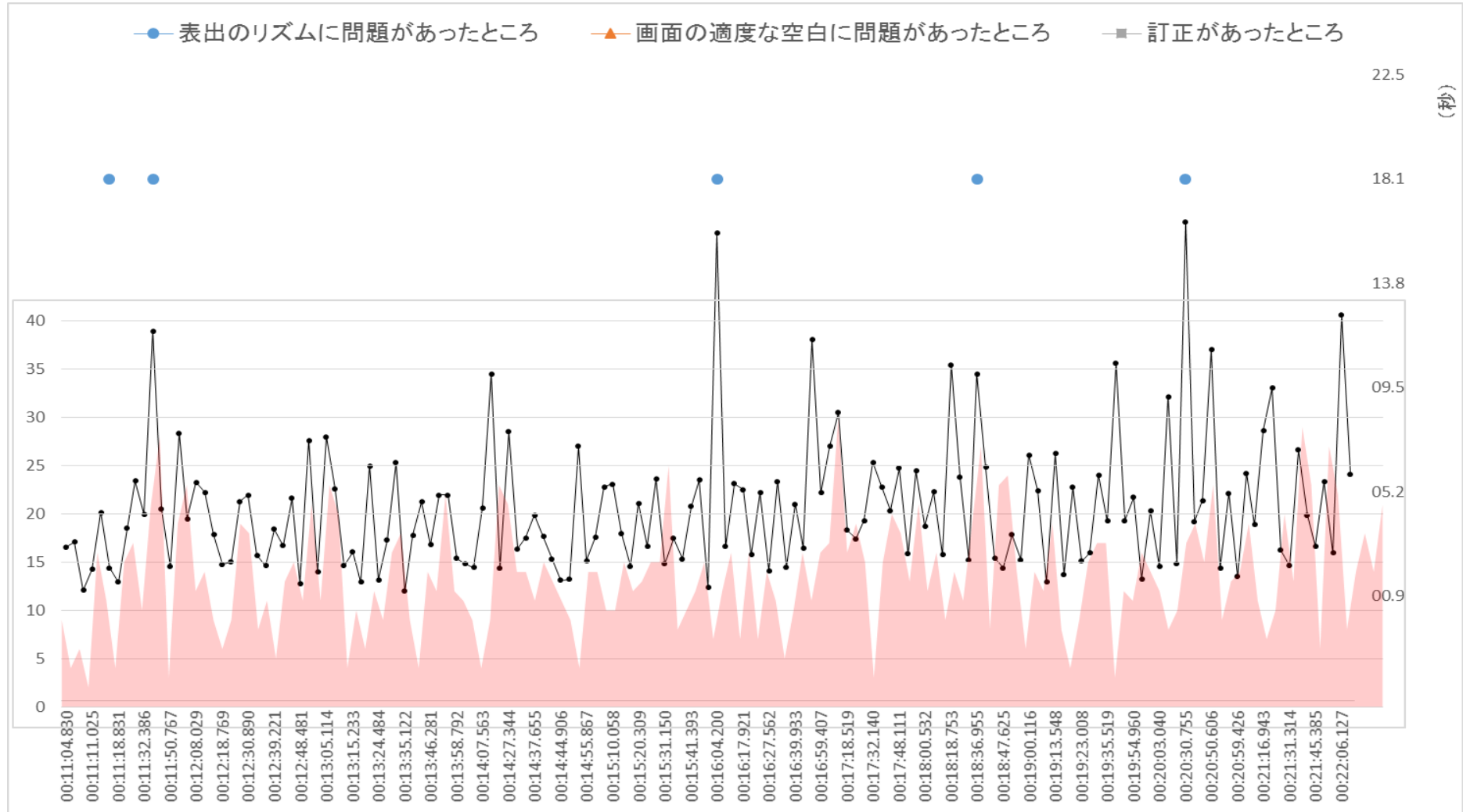
②－１－２ 【事業体Ⅰ】 ２



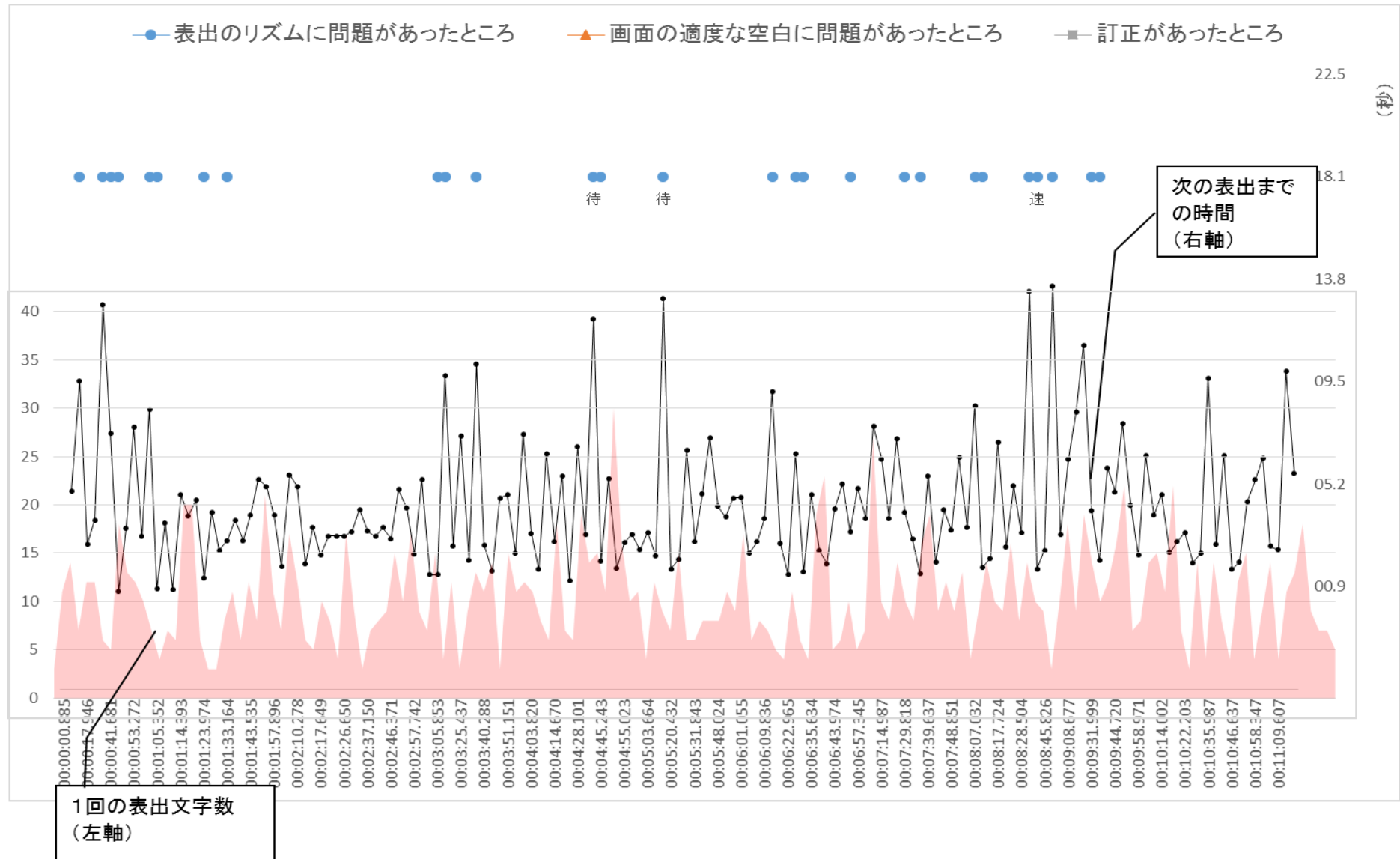
②－２－１ 【事業体Ⅱ】 1



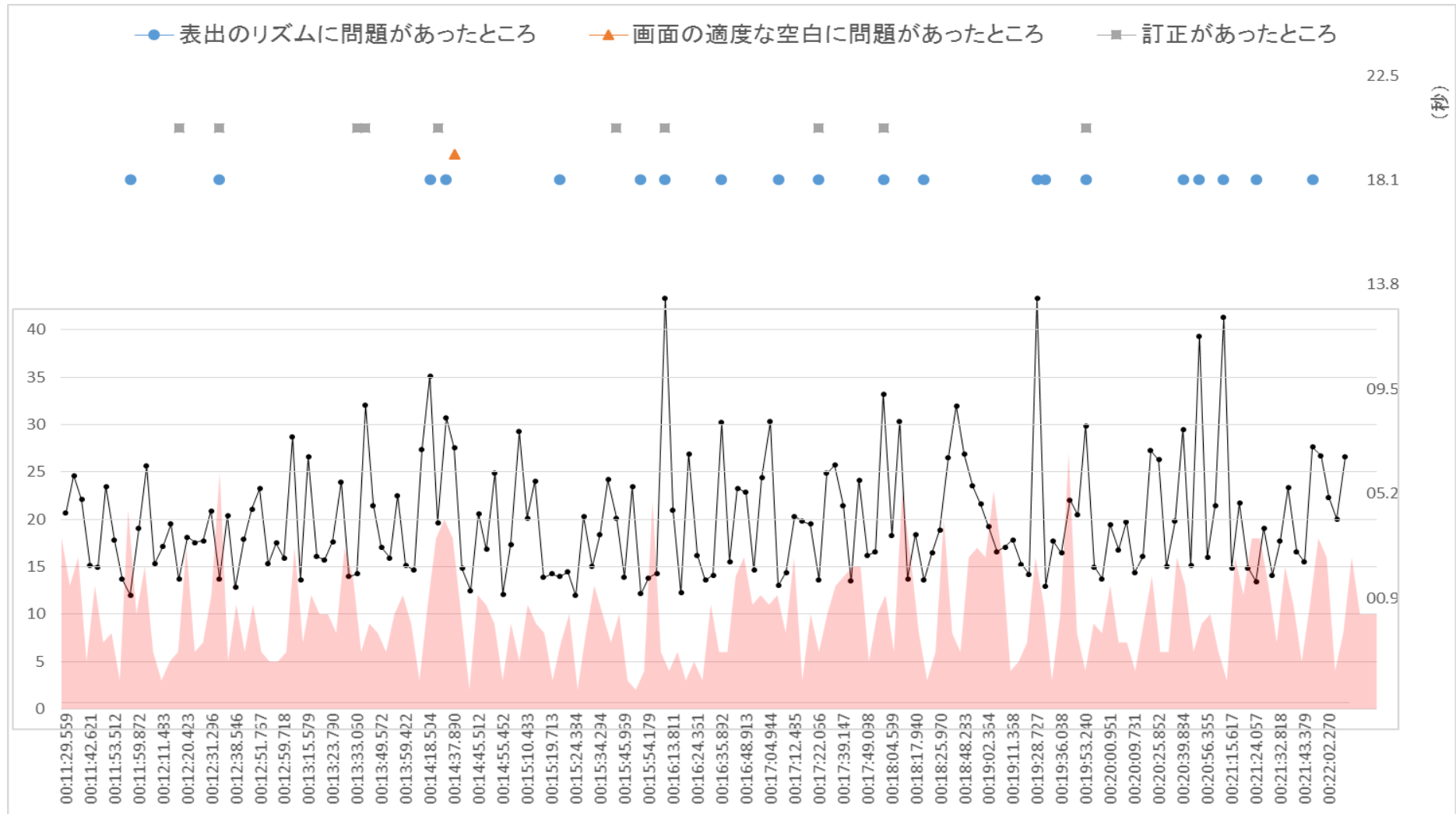
②-2-2 【事業体Ⅱ】 2



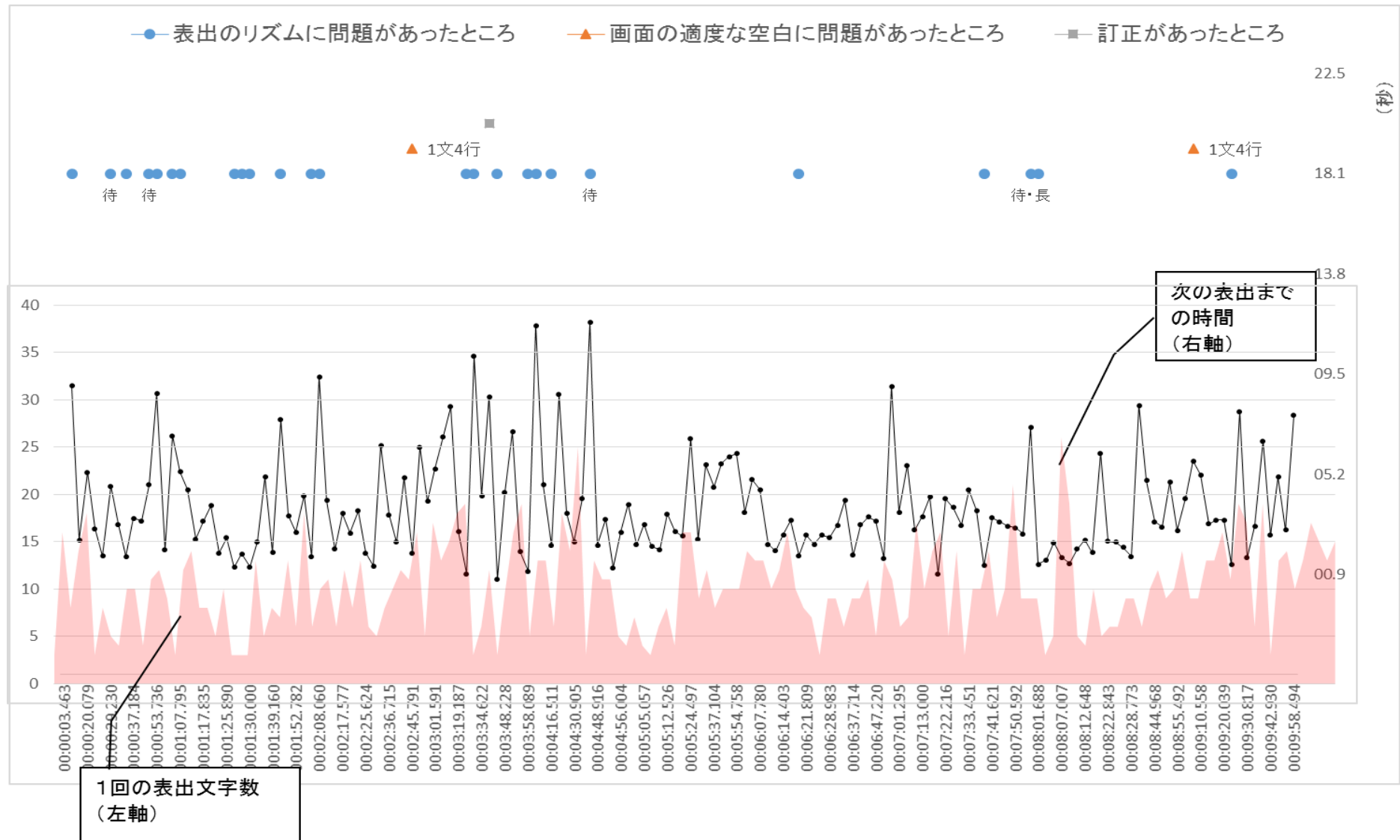
②-3-1 【事業体Ⅲ】 1



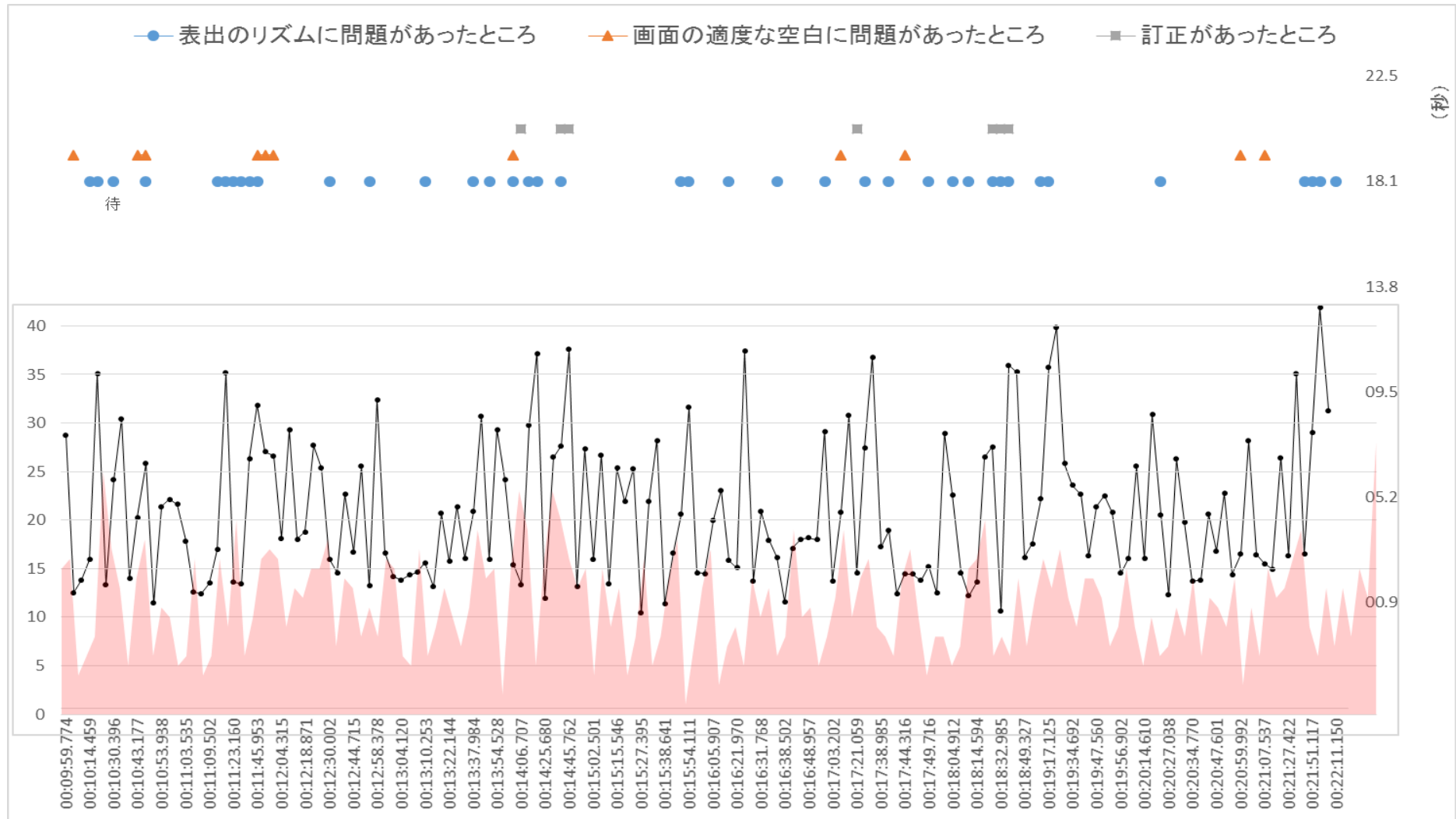
②－３－２ 【事業体Ⅲ】 ２



②-4-1 【事業体Ⅳ】 1



②－４－２ 【事業体Ⅳ】 ２



③ 表出までの時間と読みづらさ

③－１ 【事業体Ⅰ】

次の表出までの時間	表出文字数	表出文字	表出のリズム	空白	訂正	その他
	25	／2時間くらいになりますが、よろしくお願いします。	1			
00:00:04.942	10	今日お集まりの方は、				
00:00:03.999	14	新聞を日ごろから読んでいる、				
00:00:06.670	16	仕事で使っている方が多いと思う。				
00:00:09.207	18	今世の中はどうかというと、私が教える				
00:00:04.040	9	関西大学の学生は、				
00:00:04.734	15	ほとんど読んでいないと答える。				
00:00:05.971	14	日経新聞に私は務めていたが、				
00:00:07.872	16	他の新聞、朝日や読売に聞いても、				
00:00:00.890	17	読んでいるのはほとんど40代以上。				
00:00:12.893	20	平均年齢も50代、60代に上がっている。				
00:00:05.560	22	みなさんの世代は割と新聞に親しんできた世代。				
00:00:10.041	21	最近取らなくなった人もいるかもしれないが。				
00:00:09.010	19	世の中は新聞を取っているのは少数派に。				
00:00:03.236	22	ただ、新聞は本当に読まれなくなっているのか。				
00:00:04.835	20	新聞記者も読まれなくなったと思っている。				

00:00:17.161	29	周囲に聞くと、取っていないというのでまずいとは思っている。	1			
00:00:01.560	18	本当に世の中新聞を読んでいないのか？	1			
00:00:06.831	9	ある意味では真実。				
00:00:12.671	15	紙の新聞を取らなくなっている。	1			
00:00:01.810	20	年間 4000 万部ぐらい発行されているが、	1			
00:00:05.350	14	毎年 100 万部が減っている。				
00:00:04.070	9	これはすごい数字。				
00:00:05.748	18	海外の名前を聞いたことがある新聞は、				
00:00:07.549	16	だいたい 100 万部いっていない。				
00:00:01.836	20	ニューヨークタイムズ日曜版で 100 万部。				
00:00:06.511	10	フランスのルモンド、				
00:00:02.160	8	ワシントンポスト				
00:00:04.290	4	などは、				

③－２ 【事業体Ⅱ】

	次の表出までの時間	表出文字数	表出文字	表出のリズム	空白	訂正	その他
1		10	／時間になったので。				
2	00:00:05.623	11	よろしくお願いします。				
3	00:00:01.457	14	今日お集まりいただいたのは、				
4	00:00:05.170	14	新聞を日頃から読んでいたり、				
5	00:00:03.145	16	仕事で使っている方が多いと思う。				
6	00:00:08.466	14	ただ、世の中の現実をみると、				
7	00:00:03.370	12	私が教えている関西大学。				
8	00:00:01.311	4	ここで、				
9	00:00:05.050	22	新聞を読んでいると２０代前半の学生にきくと、				
10	00:00:04.810	16	ほとんどが読んでいないと答える。				
11	00:00:03.781	14	私は日経新聞に勤めていたが、				
12	00:00:05.250	15	朝日、読売新聞などに聞いても、				
13	00:00:07.491	20	読んでいるのは、４０歳代以上がほとんど。				
14	00:00:03.060	18	平均年齢は、各社に違いはあるものの、				
15	00:00:04.050	16	５０～６０歳代まで上がっている。				
16	00:00:05.362	22	皆さんの世代は新聞に慣れ親しんでいるだろう。				
17	00:00:02.579	21	最近は「取らなくなった」という人もいるが。				
18	00:00:04.900	14	世の中では、読むのは少数派。				
19	00:00:02.176	6	それが現状。				

20	00:00:04.324	9	ここからが本題だ。	1			リズムが崩れた（速）
21	00:00:06.101	22	では、新聞は本当に読まれなくなっているのか。				
22	00:00:07.400	18	これは、新聞記者も、そう思っている。				
23	00:00:09.451	12	皆、そう聞いているので、				
24	00:00:03.740	13	周囲も「取っていない」と。				
25	00:00:08.515	19	本当に読まなくなっているのかといえば、				
26	00:00:02.186	13	これは一面の真実ではある。				
27	00:00:03.841	6	紙の新聞は、				
28	00:00:04.530	15	確かに取らない人が増えている。				
29	00:00:02.280	3	年間に				
30	00:00:02.971	4	一般紙は				

③－３ 【事業体Ⅲ】

	次の表出までの時間	表出文字数	表出文字	表出のリズム	空白	訂正	その他
1		3	松林／				
2	00:00:04.901	11	よろしくお願いします。				
3	00:00:09.520	14	今日、来られている人たちは、	1			待たされ感
4	00:00:02.640	7	日頃から新聞を				
5	00:00:03.661	12	読まれている方だと思う。				
6	00:00:12.741	12	世の中のことを考えると、	1			
7	00:00:07.333	6	どうだろう。	1			
8	00:00:00.680	5	関西大学の	1			前の文末に続いて、改行されて表出。速い
9	00:00:03.330	18	学生のほとんどは新聞を読んでいない。				
10	00:00:07.581	13	私は日経新聞で働いていた。				
11	00:00:02.970	12	朝日、読売などの読者は、				
12	00:00:08.340	10	40代以上の人たち。	1			
13	00:00:00.770	7	平均としては、	1			速い
14	00:00:03.560	4	50から				
15	00:00:00.751	7	60代くらい。				
16	00:00:04.730	6	みなさんは、				
17	00:00:03.850	20	新聞を取らなくなってきた人もあるだろう。				
18	00:00:04.511	20	世の中では、読む人が少数派になっている。				
19	00:00:01.220	6	これが現状。	1			速い

20	00:00:04.000	3	では、	1			
21	00:00:02.390	3	本当に				
22	00:00:02.800	8	新聞が読まれなく				
23	00:00:03.675	11	なっているのだろうか。				
24	00:00:02.806	6	記者自身も、				
25	00:00:03.890	12	読まれなくなってきたなど				
26	00:00:05.391	8	感じているよう。				
27	00:00:05.100	21	周囲の人たちは、購読していないというので、				
28	00:00:03.870	11	まずいなと思っている。				
29	00:00:01.720	7	本当に世の中、				
30	00:00:05.568	17	読まなくなっているのだろうか。				
31	00:00:05.094	12	紙の新聞を購読しない人が				
32	00:00:01.811	6	増えている。				
33	00:00:03.370	5	一般紙は、				

③－４ 【事業体Ⅳ】

次の表出までの時間	表出文字数	表出文字	表出のリズム	空白	訂正	その他
00:00:08.998	3	松林／	1			待たされ感。入力部で言い回しを訂正しているためか。
00:00:02.347	8	始めます、よろしくお願いします。	1			
00:00:05.271	14	今日の参加者は、				
00:00:02.831	18	新聞を日頃から読まれている、				
00:00:01.659	3	仕事でも使われている方が多いと思う。				
00:00:04.661	8	現実、	1			待たされ感。その前が「現実」だけなのだが。
00:00:03.032	5	私が今教えている				
00:00:01.646	4	関西大学で	1			
00:00:03.276	10	聞くと、				
00:00:03.173	10	学生さんのほとんどは				
00:00:04.722	4	新聞を読んでいないと	1			待たされ感。前の文が短いのに。
00:00:08.657	11	答える。	1			
00:00:01.934	12	日経新聞に勤めていた。				
00:00:06.844	9	朝日新聞でも、読売でも、	1			待たされ感。
00:00:05.281	3	購読者の平均年齢は	1			「高い」だけなのに出てこない。
00:00:04.516	12	高い。				
00:00:02.378	14	平均年齢は50～60代。				
		新聞をとらなくなってきた人も				

00:00:03.146	8	増えてきている。				
00:00:03.826	8	新聞を読むのは、				
00:00:01.790	5	世の中での				
00:00:02.439	10	少数派になっている。				
00:00:01.172	3	では、	1			1 文節ずつで読みにくい。
00:00:01.748	3	新聞が	1			1 文節ずつで読みにくい。
00:00:01.190	3	本当に	1			1 文節ずつで読みにくい。
00:00:02.275	13	読まれなくなっているのか。				
00:00:05.068	5	新聞記者も				
00:00:01.817	8	そう思っている。				
00:00:07.540	7	周りに聞くと、	1			待たされ感。
00:00:03.393	13	みんな新聞をとっていないと				
00:00:02.689	6	答えるから。				
00:00:04.267	18	本当に新聞を読まなくなっているのか。				

④ 構文と読みづらさ

④－１ 【事業体Ⅰ】

1 文の 文字数	表出文	主述の ねじれ	前後の ねじれ	助詞抜け	助詞の 間違い	語句の不 適切さ	その他
25	／2時間くらいになりますが、よろしくお願いします。						
40	今日お集まりの方は、新聞を日ごろから読んでいる、仕事で使 っている方が多いと思う。						
42	今世の中はどうかというと、私が教える関西大学の学生は、ほ とんど読んでいないと答える。						
47	日経新聞に私は務めていたが、他の新聞、朝日や読売に聞いて も、読んでいるのはほとんど40代以上。					1	
20	平均年齢も50代、60代に上がっている。						
22	みなさんの世代は割と新聞に親しんできた世代。						
21	最近取らなくなった人もいるかもしれないが。						
19	世の中は新聞を取っているのは少数派に。						
22	ただ、新聞は本当に読まれなくなっているのか。						
20	新聞記者も読まれなくなったと思っている。						
29	周囲に聞くと、取っていないというのでまずいとは思ってい る。						
18	本当に世の中新聞を読んでいないのか？						
9	ある意味では真実。						
15	紙の新聞を取らなくなっている。						
34	年間4000万部ぐらい発行されているが、毎年100万部が減って いる。						
9	これはすごい数字。						

34	海外の名前を聞いたことがある新聞は、だいたい100万部いっ ていない。				1		
20	ニューヨークタイムズ日曜版で100万部。						
38	フランスのルモンド、ワシントンポストなどは、そもそも100 万部いっていない。						
37	地方紙で50万部だとかなり大きい部類だ。それが2社毎年消え ているイメージ。		1				
19	紙の新聞をとらなくなっているのは事実。						
29	一方で新聞記事を読まなくなっているのかというと、むしろ 逆。						
12	それはネットの存在です。						
20	大学で聞くと若い人は新聞を読んでいない。						

④－２ 【事業体Ⅱ】

1文の 文字数	表出文	主述の ねじれ	前後の ねじれ	助詞抜 け	助詞の 間違い	語句の 不適切 さ	その他
10 11 69 42 49 34 22 21 20 9 22 43 32 21	／時間になったので。 よろしくお願いします。 今日お集まりいただいたのは、新聞を日頃から読んでいたり仕事で使っている方が多いと思う。ただ、世の中の現実をみると、私が教えている関西大学。 ここで、新聞を読んでいると20代前半の学生にきくと、ほとんどが読んでいないと答える。 私は日経新聞に勤めていたが、朝日、読売新聞などに聞いても、読んでいるのは、40歳代以上がほとんど。 平均年齢は、各社に違いはあるものの、50～60歳代まで上がっている。 皆さんの世代は新聞に慣れ親しんでいるだろう。 最近「取らなくなった」という人もいるが。 世の中では、読むのは少数派。それが現状。 ここからが本題だ。 では、新聞は本当に読まれなくなっているのか。 これは、新聞記者も、そう思っている。皆、そう聞いているので、周囲も「取っていない」と。 本当に読まなくなっているのかといえば、これは一面の真実ではある。 紙の新聞は、確かに取らない人が増えている。			1			述部がない 体言止めの使用が不適切 「か・と」

21	年間に一般紙は 4000 万部、読まれている。						
20	そこから、毎年、100 万部が減っている。						
9	かなりの数である。						
22	海外の著名な新聞は、だいたい 100 万部未満。						
22	ニューヨークタイムズは、日曜版は超えている。						
47	フランスのル・モンドとか、ワシントンポスト等、有名な外国紙は、そもそも 100 万部に達していない。						
12	日本の新聞は部数が多い。						
24	それでも、地方紙で 50 万部ほどの、大きなところ。					1	「それでも」の使い方。前後の文章とのつながりがおかしい。
16	それも 2 社は消えているのが現状。					1	前の文章からの受けがおかしい 「イメージ」→「現状」

④－３ 【事業体Ⅲ】

	1文の 文字数	表出文	主述 のね じれ	前後 のね じれ	助詞 抜け	助詞 の間 違い	語句 の不 適切 さ	その他
1	14	松林／よろしく申し上げます。						
2	33	今日、来られている人たちは、日頃から新聞を読まれている方 だと思う。						
3	18	世の中のことを考えると、どうだろう。						
4	23	関西大学の学生のほとんどは新聞を読んでいない。						
5	13	私は日経新聞で働いていた。						
6	22	朝日、読売などの読者は、40代以上の人たち。						
7	18	平均としては、50から60代くらい。		1				
8	26	みなさんは、新聞を取らなくなってきた人もあるだろう。						
9	20	世の中では、読む人が少数派になっている。						
10	6	これが現状。						
11	25	では、本当に新聞が読まれなくなっているのだろうか。						
12	26	記者自身も、読まれなくなってきたなと感じているよう。						
13	32	周囲の人たちは、購読していないというので、まずいなと思っ ている。						
14	24	本当に世の中、読まなくなってきたのだろうか。						
15	18	紙の新聞を購読しない人が増えている。						
16	23	一般紙は、年間4000万部ほど発行されている。						
17	21	その中で毎年、100万部ほどが減っている。						
18	9	これはすごい数字。						

19	27	海外の有名な新聞は、100 万部までは発行されていない。					
20	58	ニューヨークタイムズの日曜版は超えていると思うが、ルモンドやワシントンポストなどは、そもそも 100 万部っていない。					
21	15	日本の新聞は部数がとても多い。					
22	41	しかし、地方紙で 50 万部発行する新聞社、その 2 社くらいが毎年減っていることになる。					
23	11	紙媒体から離れている。					
24	14	これは、数字の裏付けもある。					
25	18	でも、本当に読まなくなっているのか。					

④－４ 【事業体Ⅳ】

	1文の 文字数	表出文	主述 のね じれ	前後 のね じれ	助詞 抜け	助詞 の間 違い	語句の 不適切 さ	その他
1	19	松林／始めます、よろしくお願いします。					1	始めます、一始めます。
2	40	今日の参加者は、新聞を日頃から読まれている、仕事でも使わ れている方が多いと思う。						
3	44	現実、私が今教えている関西大学で聞くと、学生さんのほとん どは新聞を読んでいないと答える。					1	現実
4	11	日経新聞に勤めていた。						
5	24	朝日新聞でも、読売でも、購読者の平均年齢は高い。						
6	12	平均年齢は50～60代。						
7	22	新聞をとらなくなってきた人も増えてきている。						
8	23	新聞を読むのは、世の中での少数派になっている。						
9	22	では、新聞が本当に読まれなくなっているのか。						
10	13	新聞記者もそう思っている。						
11	26	周りに聞くと、みんな新聞をとっていないと答えるから。						
12	18	本当に新聞を読まなくなっているのか。						
13	6	一面は真実。						
14	27	紙のこのような新聞はとらなくなっている人がふえている。						
15	20	年間4000万部ぐらいが発行されている。						
16	19	毎年100万部程度の部数が減っている。						
17	13	この数字は結構大きいもの。						
18	22	海外の有名な新聞は、100万部っていない。						

19	62	ニューヨークタイムズの日曜版は100 万部を超えているが、フランスのル・モンドやワシントン・ポストなど100 万部を売っていない。			1			ワシントン・ポストは、
20	15	日本は発行部数がそもそも多い。						
21	18	地方紙では50 万部発行ぐらいが多い。						
22	22	それが2 社、毎年減っていくほどの数字になる。						
23	21	紙の新聞から皆さんが離れているのは、事実。						
24	10	数字でも表れている。						
25	16	では、読まれなくなっているのか。						
26	24	むしろ逆の現象が起きているというのが、私の分析。						
27	13	まず、ネットの存在がある。						

⑤ 内容

⑤－１ 【事業体Ⅰ】

	表出文	備考
1	／2時間くらいになりますが、よろしくお願いします。	
2	今日お集まりの方は、新聞を日ごろから読んでいる、仕事で使っている方が多いと思う。	
3	今世の中はどうかというと、私が教える関西大学の学生は、ほとんど読んでいないと答える。	
4	日経新聞に私は務めていたが、他の新聞、朝日や読売に聞いても、読んでいるのはほとんど40代以上。	
5	平均年齢も50代、60代に上がっている。	
6	みなさんの世代は割と新聞に親しんできた世代。	
7	最近取らなくなった人もいるかもしれないが。	
8	世の中は新聞を取っているのは少数派に。	7の文とつながらない。
9	ただ、新聞は本当に読まれなくなっているのか。	
10	新聞記者も読まれなくなったと思っている。	
11	周囲に聞くと、取っていないというのでまずいとは思っている。	
12	本当に世の中新聞を読んでいないのか？	
13	ある意味では真実。	
14	紙の新聞を取らなくなっている。	
15	年間4000万部ぐらい発行されているが、毎年100万部が減っている。	
16	これはすごい数字。	
17	海外の名前を聞いたことがある新聞は、だいたい100万部いっていない。	「海外の名前を聞いた」と読める。「海外で、」か「有名な」としたい。

18	ニューヨークタイムズ日曜版で 100 万部。	
19	フランスのルモンド、ワシントンポストなどは、そもそも 100 万部いって	
20	いない。	
20	地方紙で 50 万部だとかなり大きい部類だ。それが 2 社毎年消えているイ	
21	メージ。	
21	紙の新聞をとらなくなっているのは事実。	
22	一方で新聞記事を読まなくなっているのかというと、むしろ逆。	「一方で」の接続詞によりつながりがわ
23	それはネットの存在です。	かる。
24	大学で聞くと若い人は新聞を読んでいない。	わかりづらい文。2 2 の文とつながらな
		い。

⑤-2 【事業体Ⅱ】

	表出文	備考
1	／時間になったので。	述部がなく、文の結論を推測させている
2	よろしくお願いします。	
3	今日お集まりいただいたのは、新聞を日頃から呼んでいたり仕事で使っ	
4	ている方が多いと思う。ただ、世の中の現実をみると、私が教えている関西	
5	大学。	
6	ここで、新聞を読んでいると 20 代前半の学生にきくと、ほとんどが読ん	
7	でいないと答える。	
8	私は日経新聞に勤めていたが、朝日、読売新聞などに聞いても、読んでい	
9	るのは、40 歳代以上がほとんど。	
10	平均年齢は、各社に違いはあるものの、50～60 歳代まで上がっている。	
11	皆さんの世代は新聞に慣れ親しんでいるだろう。	
12	最近は「取らなくなった」という人もいるが。	
13	世の中では、読むのは少数派。それが現状。	
14	ここからが本題だ。	
15	では、新聞は本当に読まれなくなっているのか。	
16	これは、新聞記者も、そう思っている。皆、そう聞いているので、周囲も	
17	「取っていない」と。	主語が誰かわからない
18	本当に読まなくなっているのかといえば、これは一面の真実ではある。	
19	紙の新聞は、確かに取らない人が増えている。	
20	年間に一般紙は 4000 万部、読まれている。	
21	そこから、毎年、100 万部が減っている。	

17	かなりの数である。	
18	海外の著名な新聞は、だいたい 100 万部未満。	
19	ニューヨークタイムズは、日曜版は超えている。	
20	フランスのル・モンドとか、ワシントンポスト等、有名な外国紙は、そもそ	
	も 100 万部に達していない。	
21	日本の新聞は部数が多い。	
22	それでも、地方紙で 50 万部ほどの、大きなところ。	
23	それも 2 社は消えているのが現状。	前後の文とのつながりがよくない
24	その勢いで、発行部数、購読者数が減っている。	話し手の意図は「イメージ」として伝えたかつ
25	「新聞紙」、紙の新聞を取らなくなっている。これは真実。	たが、「現状」になってしまった

⑤－3 【事業体Ⅲ】

	表出文	備考
1	松林／よろしくお願いします。	
2	今日、来られている人たちは、日頃から新聞を読まれている方だと思う。	
3	世の中のことを考えると、どうだろう。	
4	関西大学の学生のほとんどは新聞を読んでいない。	
5	私は日経新聞で働いていた。	
6	朝日、読売などの読者は、40代以上の人たち。	
7	平均としては、50から60代くらい。	
8	みなさんは、新聞を取らなくなってきた人もあるだろう。	みなさん「の中に」は、～だろう。
9	世の中では、読む人が少数派になっている。	
10	これが現状。	「これが」とあるので、まとめとわかる。
11	では、本当に新聞が読まれなくなっているのだろうか。	
12	記者自身も、読まれなくなってきたなと感じているよう。	「よう」より、言い切りの方がわかりやすい。
13	周囲の人たちは、購読していないというので、まずいなと思っている。	読点の位置で、周囲の人たちがまずいと思っていると誤読。
14	本当に世の中、読まなくなってきたのだろうか。	
15	紙の新聞を購読しない人が増えている。	
16	一般紙は、年間4000万部ほど発行されている。	
17	その中で毎年、100万部ほどが減っている。	
18	これはすごい数字。	
19	海外の有名な新聞は、100万部までは発行されていない。	
20	ニューヨークタイムズの日曜版は超えていると思うが、ルモンドやワシントンポストなどは、そもそも100万部っていない。	

21	日本の新聞は部数がとても多い。	
22	しかし、地方紙で 50 万部発行する新聞社、その 2 社くらいが毎年減っていることになる。	
23	紙媒体から離れている。	
24	これは、数字の裏付けもある。	
25	でも、本当に読まなくなっているのか。	
26	必ずしもそうではない。	
27	逆の現象が起きていると、わたしは分析している。	
28	ネットの存在が、そのひとつ。	
29	大学で新聞を読んでいない人が多いと、先ほど話した。	

⑤－４ 【事業体Ⅳ】

	表出文	備考
1	松林／始めます、よろしくお願いします。	
2	今日の参加者は、新聞を日頃から読まれている、仕事でも使われている方が多いと思う。	
3	現実、私が今教えている関西大学で聞くと、学生さんのほとんどは新聞を読んでいないと答える。	
4	日経新聞に勤めていた。	私は、と主語を入れる。話が展開するので。
5	朝日新聞でも、読売でも、購読者の平均年齢は高い。	
6	平均年齢は 50～60 代。	平均年齢は、前の文と重複し、しつこくなるので、取る。
7	新聞をとらなくなってきた人も増えてきている。	
8	新聞を読むのは、世の中での少数派になっている。	
9	では、新聞が本当に読まれなくなっているのか。	
10	新聞記者もそう思っている。	
11	周りに聞くと、みんな新聞をとっていないと答えるから。	「それは、」などを入れると前の文とのつながりが明確になる。
12	本当に新聞を読まなくなっているのか。	
13	一面は真実。	この一面は、などにすると、「一面は真実」が浮かない。
14	紙のこのような新聞はとらなくなっている人がふえている。	
15	年間 4000 万部ぐらいが発行されている。	
16	毎年 100 万部程度の部数が減っている。	
17	この数字は結構大きいもの。	

18	海外の有名な新聞は、100 万部っていない。	
19	ニューヨークタイムズの日曜版は100 万部超えているが、フランスのル・	
20	モンドやワシントン・ポストなど100 万部を売っていない。	
21	日本は発行部数がそもそも多い。	
22	地方紙では50 万部発行ぐらいが多い。	意味の取り違い。50 万部発行の地方紙は大きな部類に入る。の意味。
23	それが2社、毎年減っていくほどの数字になる。	
24	紙の新聞から皆さんが離れているのは、事実。	
25	数字でも表れている。	
26	では、読まれなくなっているのか。	
27	むしろ逆の現象が起きているというのが、私の分析。	
	まず、ネットの存在がある。	

⑥ 関係時の入力状況と関係相手の対応

⑥－１ 【事業体Ⅰ】

	次の表出までの時間	表出文字数	表出文字	表出文字		ペアの対応		備考
				多い	少ない	適切	間違い	
1		25	／2時間くらい…	1				話者の発言に飛びついたため、遅れた。後半、短縮登録を使用。
2	00:00:04.942	10	今日お集まりの…					
3	00:00:03.999	14	新聞を日ごろか…			1		ペアが「仕事」を拾ったので、読点を使った。
4	00:00:06.670	16	仕事で使ってい…					
5	00:00:09.207	18	今世の中はどう…	1		1		読点で表出せず、続けて「私が」と入れていたので、ペアが「関西」と入力して自分側に引き取った。なかなか表示部にあがらず、待たせられ感が強い。
6	00:00:04.040	9	関西大学の学生…					
7	00:00:04.734	15	ほとんど読んで…					
8	00:00:05.971	14	日経新聞に私は…					
9	00:00:07.872	16	他の新聞、朝日…				1	入力が遅れているので、表出がペアとほぼ同時になっている。
10	00:00:00.890	17	読んでいるのは…					
11	00:00:12.893	20	平均年齢も50…	1				
12	00:00:05.560	22	みなさんの世代…	1				

13	00:00:10.041	21	最近取らなくな…	1				
14	00:00:09.010	19	世の中は新聞を…	1				
15	00:00:03.236	22	ただ、新聞は本…	1				
16	00:00:04.835	20	新聞記者も読ま…	1				
17	00:00:17.161	29	周囲に聞くと、…	1				
18	00:00:01.560	18	本当に世の中新…					
19	00:00:06.831	9	ある意味では真…					
20	00:00:12.671	15	紙の新聞を取ら…			1	表示部にあげることためらったため、かなり待たされた。	
21	00:00:01.810	20	年間 4000 万…					
22	00:00:05.350	14	毎年 100 万部…					
23	00:00:04.070	9	これはすごい数…					
24	00:00:05.748	18	海外の名前を聞…					
25	00:00:07.549	16	だいたい 100…					
26	00:00:01.836	20	ニューヨークタ…					
27	00:00:06.511	10	フランスのルモ…			1	ペアが先に「ワシントンポスト」を入力したので、戻って「ルモンド」を入れた。この間、なにも表出されなかったもので、画面が動かなかった。	

⑥－２ 【事業体Ⅱ】

	次の表出までの時間	表出文字数	表出文字	表出文字		ペア		備考
				多い	少ない	適切	間違い	
1		10	／時間になった…	1	1			なぜ句点？次の文章が短いのも、句点を読点にして助詞を加えれば、解消できる。
2	00:00:05.623	11	よろしく願い…					
3	00:00:01.457	14	今日お集まりい…					
4	00:00:05.170	14	新聞を日頃から…					
5	00:00:03.145	16	仕事で使ってい…					
6	00:00:08.466	14	ただ、世の中の…					
7	00:00:03.370	12	私が教えている…					
8	00:00:01.311	4	ここで、…					
9	00:00:05.050	22	新聞を読んでい…					
10	00:00:04.810	16	ほとんどが読ん…					
11	00:00:03.781	14	私は日経新聞に…					
12	00:00:05.250	15	朝日、読売新聞…					
13	00:00:07.491	20	読んでいるのは…	1			1	入力ミス連発。歳を入れることによって表出が遅くなるのなら、40代でよい。本来は、13→遅い 14→速い 表出となるところだが、14も入力ミスあり。結果的に、表出自体はテンポよくあがった。
14	00:00:03.060	18	平均年齢は、各…					
15	00:00:04.050	16	50～60歳代…					
16	00:00:05.362	22	皆さんの世代は…					

17	00:00:02.579	21	最近は「取らな…	1			1	なぜ句点。
18	00:00:04.900	14	世の中では、読…					
19	00:00:02.176	6	それが現状。…					
20	00:00:04.324	9	ここからが本題…					
21	00:00:06.101	22	では、新聞は本…					
22	00:00:07.400	18	これは、新聞記…					
23	00:00:09.451	12	皆、そう聞いて…					
24	00:00:03.740	13	周囲も「取って…					
25	00:00:08.515	19	本当に読まなく…					
26	00:00:02.186	13	これは一面の真…					
27	00:00:03.841	6	紙の新聞は、…					話の流れが逆になり、結論もないので、意味が通らない。 ペアの文頭と合うように、句点で終わらず「といえぱ」に修正。 一面の真実…？
28	00:00:04.530	15	確かに取らない…					
29	00:00:02.280	3	年間に…					
30	00:00:02.971	4	一般紙は…					

⑥-3 【事業体Ⅲ】

		表 出 文 字 数	表出文	表出文字		ペアの対応		
	次の表出までの時間			多い	少ない	適切	間違い	
1		3	松林／		1			
2	00:00:04.901	11	よろしくお願い…			1		ペアの思考を読み、無駄な介入をしないで静観
3	00:00:09.520	14	今日、来られて…			1		
4	00:00:02.640	7	日頃から新聞を…					
5	00:00:03.661	12	読まれている方…					
6	00:00:12.741	12	世の中のことを…					
7	00:00:07.333	6	どうだろう。					
8	00:00:00.680	5	関西大学の					
9	00:00:03.330	18	学生のほとんど…			1		ペアの文が未完結のまま、次の入力作業に移ったことに気づいて、冒頭にもどって「どうだろう」と述部を入力表出。再び元の自分の入力文（主語）へという動きをした
10	00:00:07.581	13	私は日経新聞で…					
11	00:00:02.970	12	朝日、読売など…					
12	00:00:08.340	10	40代以上の人…					
13	00:00:00.770	7	平均としては、					
14	00:00:03.560	4	50から					

15	00:00:00.751	7	60代くらい。		1	50からという脱落情報に気づき、すばやくフォローした。
16	00:00:04.730	6	みなさんは、	1		少ないというか、後続のペアの入力内容を見て、「みなさんは」だけ表出したが、不要だった。
17	00:00:03.850	20	新聞を取らなく…			
18	00:00:04.511	20	世の中では、読…			
19	00:00:01.220	6	これが現状。			
20	00:00:04.000	3	では、	1		少ないが、ペアの「新聞が読まれなく」の前を自分がまだ埋めるということを知らせるための小刻み表出と思えるので、妥当。
21	00:00:02.390	3	本当に			
22	00:00:02.800	8	新聞が読まれな…			
23	00:00:03.675	11	なっているのだ…			
24	00:00:02.806	6	記者自身も、			
25	00:00:03.890	12	読まれなくなっ…			
26	00:00:05.391	8	感じているよう…			
27	00:00:05.100	21	周囲の人たちは…			

⑥－４ 【事業体Ⅳ】

	次の表出までの時間	表出文字数	表出文	表出文字		ペアの対応		備考
				多い	少ない	適切	間違い	
1		3	松林／					
2	00:00:08.998	16	始めます、よろ…					
3	00:00:02.347	8	今日の参加者は…			1		
4	00:00:05.271	14	新聞を日頃から…			1		
5	00:00:02.831	18	仕事でも使われ…			1		
6	00:00:01.659	3	現実、		1	1		ペアの入力開始の様子見をしつつの入力・表出のためか？
7	00:00:04.661	8	私が今教えてい…			1		
8	00:00:03.032	5	関西大学で				1	関係の意味がない。エンターで一度表示部に上げる作業をしている間に、後発入力者が入れるのに入らない。以下、× 1
9	00:00:01.646	4	聞くと、		1		1	× 1
10	00:00:03.276	10	学生さんのほと…				1	× 1
11	00:00:03.173	10	新聞を読んでい…					
12	00:00:04.722	4	答える。		1			なぜ、「新聞を～いないと」「答える」と分割したのか。

13	00:00:08.657	11	日経新聞に勤め…		1	Bが「つとめて」の入力中に、この入力をAは開始している。このタイミングで入り、ペアに分担の終わり位置を知らせることが必要。
14	00:00:01.934	12	朝日新聞でも、…			
15	00:00:06.844	9	購読者の平均年…		1	Aが平均年齢はと先に表出したのに、Bは17番目の表出文の書き出しを消さずに延々続けている。先にいくべき。
16	00:00:05.281	3	高い。		1	同上。包括する形でペアが文章を完結しているのに気づき、先に回るべき。
17	00:00:04.516	12	平均年齢は50…		1	Aは自分と重複する内容を入力しているBに気づいて、Bがそのまま表出しても支障ないように文章を仕上げて次にうつった。
18	00:00:02.378	14	新聞をとらなく…		1	×1
19	00:00:03.146	8	増えてきている…			
20	00:00:03.826	8	新聞を読むのは…			
21	00:00:01.790	5	世の中での	1		なぜ、ここで分割して出したのか。
22	00:00:02.439	10	少数派になって…			
23	00:00:01.172	3	では、			
24	00:00:01.748	3	新聞が	1		1文節ずつ表出してしまうリスクを考慮していないのか、ほかに理由があるのか？
25	00:00:01.190	3	本当に	1		
26	00:00:02.275	13	読まれなくなっ…			

⑦ 音声と入力文対応（途中から掲載）

⑦－１ 【事業体Ⅰ】

		開始	終了	入力時間	話し手	A・C	B・D
・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・
話し手	141	00:09:07.791			え～まあそうですね、中学生とか高校生ぐらいは、たまに読むようになっていたとかですね。		
A	36	00:09:08.503	00:09:17.163	00:00:08.660		親が購読していたため中高生から読んでいた。	
話し手	142	00:09:12.035			あるいは成人してからは自分でも取るようになったとか、		
B	35	00:09:15.028	00:09:24.879	00:00:09.851			あるいは成人後は自分でも取るなど。
話し手	143	00:09:15.905			そういう方もたぶんいらっしやると思います。		

話し手	144	00:09:18.266			ただそういう長年の読者でも意外と新聞記事の読み方をご存じないんですね。		
話し手	145	00:09:20.736					
A	37	00:09:21.893	00:09:32.874	00:00:10.981			
話し手	146	00:09:24.770					
話し手	147	00:09:28.030					
B	36	00:09:28.919	00:09:36.970	00:00:08.051	で、これは私の反省点でもあるんですが、新聞記者時代に、	長年の読者でも新聞の読み方は知っていない。	
話し手	148	00:09:29.881					
話し手	149	00:09:35.931					
					え～自分たちの書いている記事がどの程度、理解されているのか。自分たちが、え～意図したようにきちんと読まれているのかっていうことは、	これは私の反省でもあるが、記者時代、	

⑦－２ 【事業体Ⅱ】

		開始	終了	入力時間	話し手	A・C	B・D
・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・
話し手	141	00:09:07.791			え～まあそうですね、中学生とか高校生ぐらいは、たまに読むようになっていたとかですね。		
A	30	00:09:08.443	00:09:12.107	00:00:03.664		親が購読していたので、	
B	28	00:09:10.241	00:09:17.729	00:00:07.488			中学生から読むようになっていたとか。
話し手	142	00:09:12.035			あるいは成人してからは自分でも取るようになったとか、		
A	31	00:09:13.983	00:09:22.991	00:00:09.008		あるいは、成人してからは自分でとるとか。	
話し手	143	00:09:15.905			そういう方もたぶんいらっしやると思います。		

話し手	144	00:09:18.266			ただそういう長年の読者でも		
B	29	00:09:19.824	00:09:24.636	00:00:04.812			そのような読者でも、
話し手	145	00:09:20.736			意外と新聞記事の読み方をご存じないんですね。		
A	32	00:09:23.925	00:09:29.641	00:00:05.716		意外と新聞記事の読み方は知らない。	
話し手	146	00:09:24.770			で、これは私の反省点でもあるんですが、		
B	30	00:09:27.276	00:09:33.759	00:00:06.483			実は、私の反省点でもある。
話し手	147	00:09:28.030			新聞記者時代に、		
話し手	148	00:09:29.881			え～自分たちの書いている記事がどの程度、理解されているのか。		
A	33	00:09:30.130	00:09:37.551	00:00:07.421		新聞記者時代に、自分たちの書く記事が	

⑦－３ 【事業体Ⅲ】

		開始	終了	入力時間	話し手	A・C	B・D
・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・
話し手	141	00:09:07.791			え～まあそうですね、中学生とか高校生ぐらいは、たまに読むようになっていたとかですね。		
A	60	00:09:10.660	00:09:15.820	00:00:05.160		親が購読していたからと、	
話し手	142	00:09:12.035			あるいは成人してからは自分でも取るようになったとか、		
B	71	00:09:12.731	00:09:25.392	00:00:12.661			中高で読むようになっている人が、
話し手	143	00:09:15.905			そういう方もたぶんいらっしゃると思います。		
話し手	144	00:09:18.266			ただそういう長年の読者でも		

A	61	00:09:20.466	00:09:31.694	00:00:11.228	意外と新聞記事の読み方をご存じないんですね。 で、これは私の反省点でもあるんですが、 新聞記者時代に、 え～自分たちの書いている記事がどの程度、理解されているのか。	成人してから、その流れで購読するようになる。	
話し手	145	00:09:20.736					
話し手	146	00:09:24.770					
話し手	147	00:09:28.030					
話し手	148	00:09:29.881					
B	72	00:09:30.540	00:09:33.654	00:00:03.114	自分たちが、え～意図したようにきちんと読まれているのかっていうことは、	新聞記者時代、自分たちの記事が	
B	73	00:09:35.201	00:09:39.478	00:00:04.277			
話し手	149	00:09:35.931					
A	62	00:09:37.430	00:09:44.174	00:00:06.744		どの程度理解されているのか、	

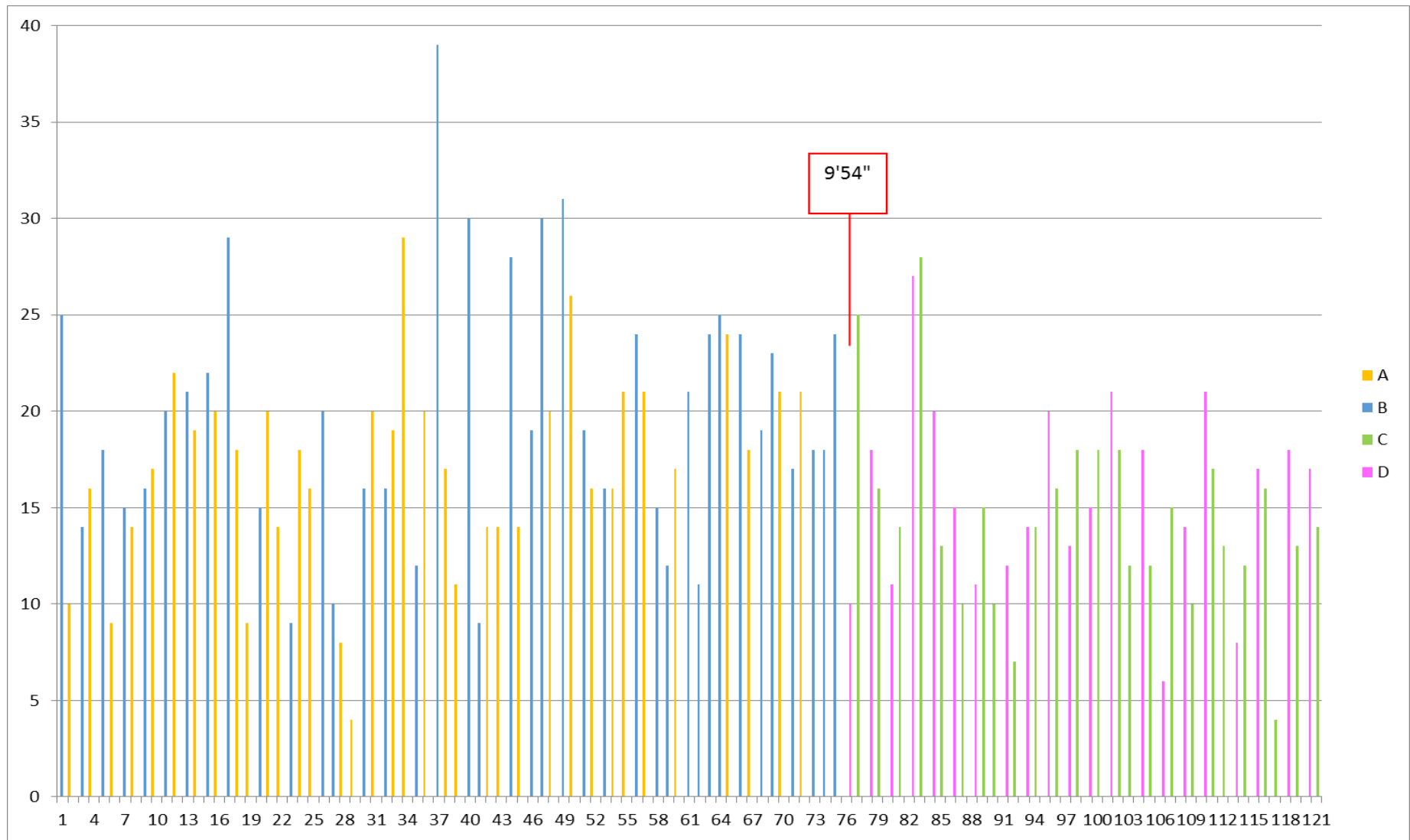
⑦－４ 【事業体Ⅳ】

		開始	終了	入力時間	話し手	A	B
・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・
話し手	141	00:09:07.791			え～まあそうですね、中学生とか高校生ぐらいは、たまに読むようになっていたとかですね。		
話し手	142	00:09:12.035			あるいは成人してからは自分でも取るようになったとか、		
A	117	00:09:14.088	00:09:16.577	00:00:02.489		読んでいた。	
B	34	00:09:14.857	00:09:19.921	00:00:05.064			成人してからは自分ではとるようになった
話し手	143	00:09:15.905			そういう方もたぶんいらっしゃると思います。		
話し手	144	00:09:18.266			ただそういう長年の読者でも		
B	35	00:09:20.423	00:09:21.456	00:00:01.033			人も。

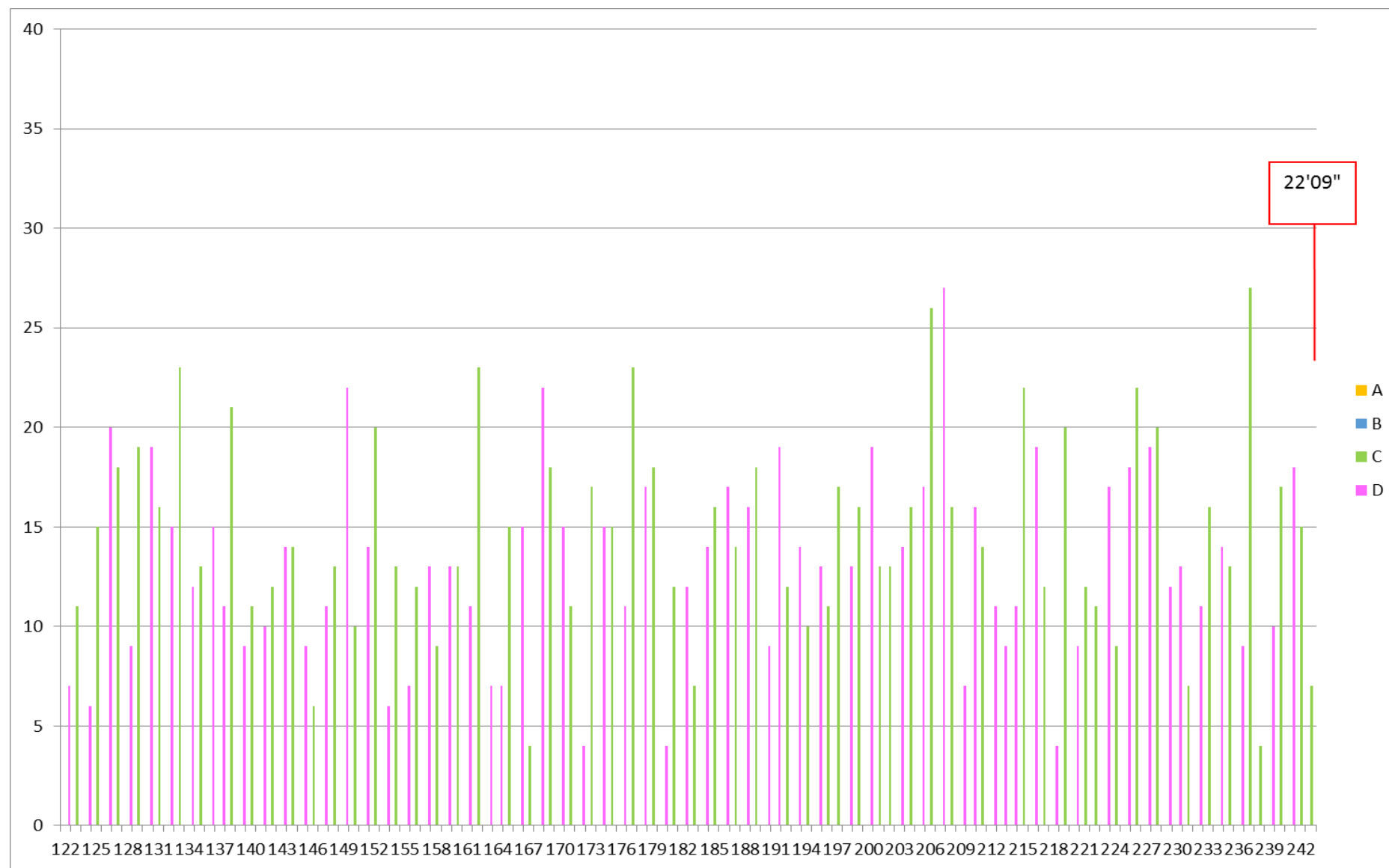
話し手	145	00:09:20.736			意外と新聞記事の読み方をご存じないんですね。	そのような長年の読者でも、	新聞記事の読み方を知らない。
A	118	00:09:22.788	00:09:29.180	00:00:06.392			
話し手	146	00:09:24.770					
B	36	00:09:24.846	00:09:29.744	00:00:04.898			
話し手	147	00:09:28.030					
話し手	148	00:09:29.881					
A	119	00:09:30.992	00:09:33.584	00:00:02.592	え～自分たちの書いている記事がどの程度、理解されているのか。	私の反省点でもある。	新聞記者時代に、書いている
B	37	00:09:32.448	00:09:37.252	00:00:04.804			

⑧ 1回の表出文字数の推移

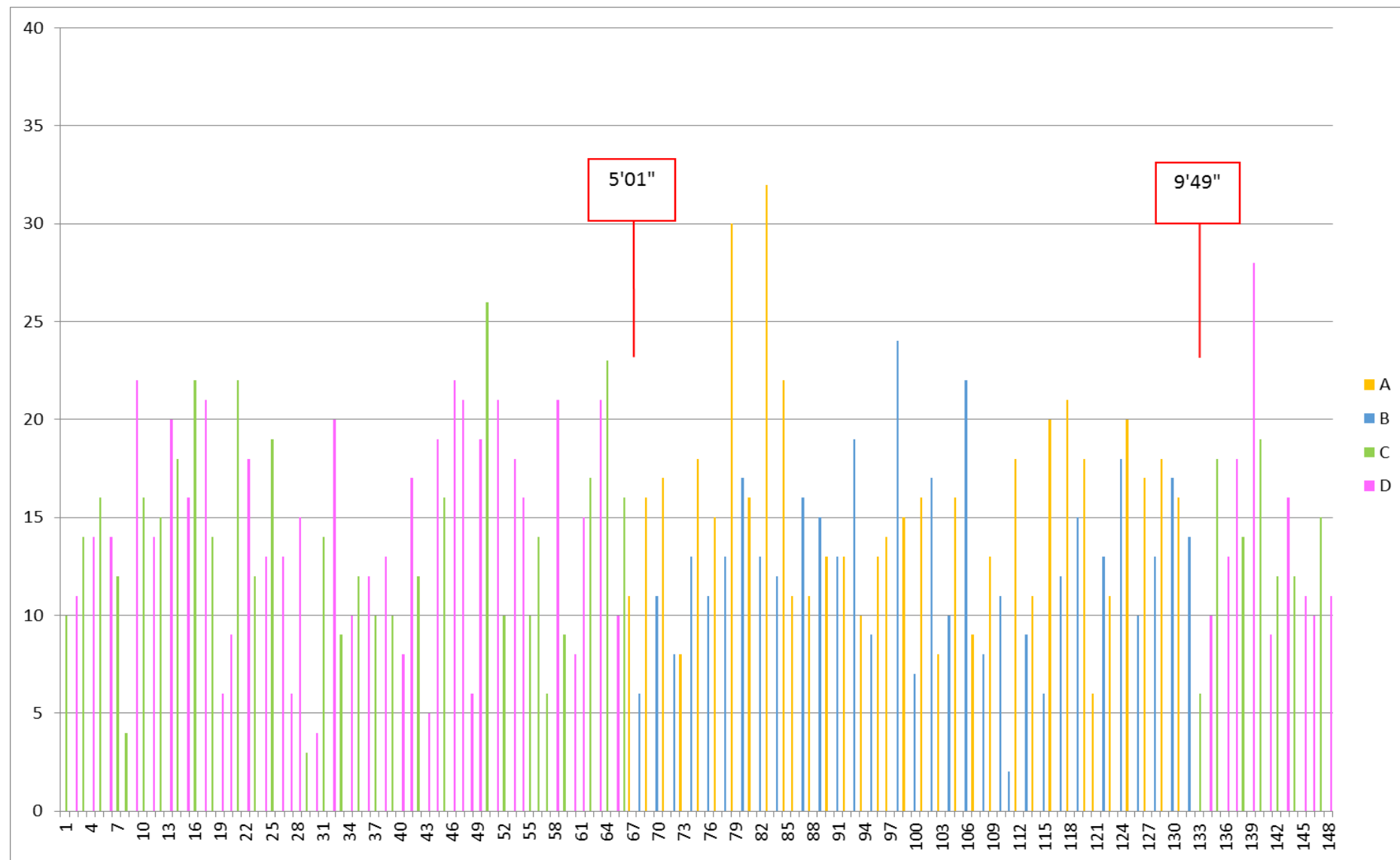
⑧－1－1 【事業体Ⅰ】 1



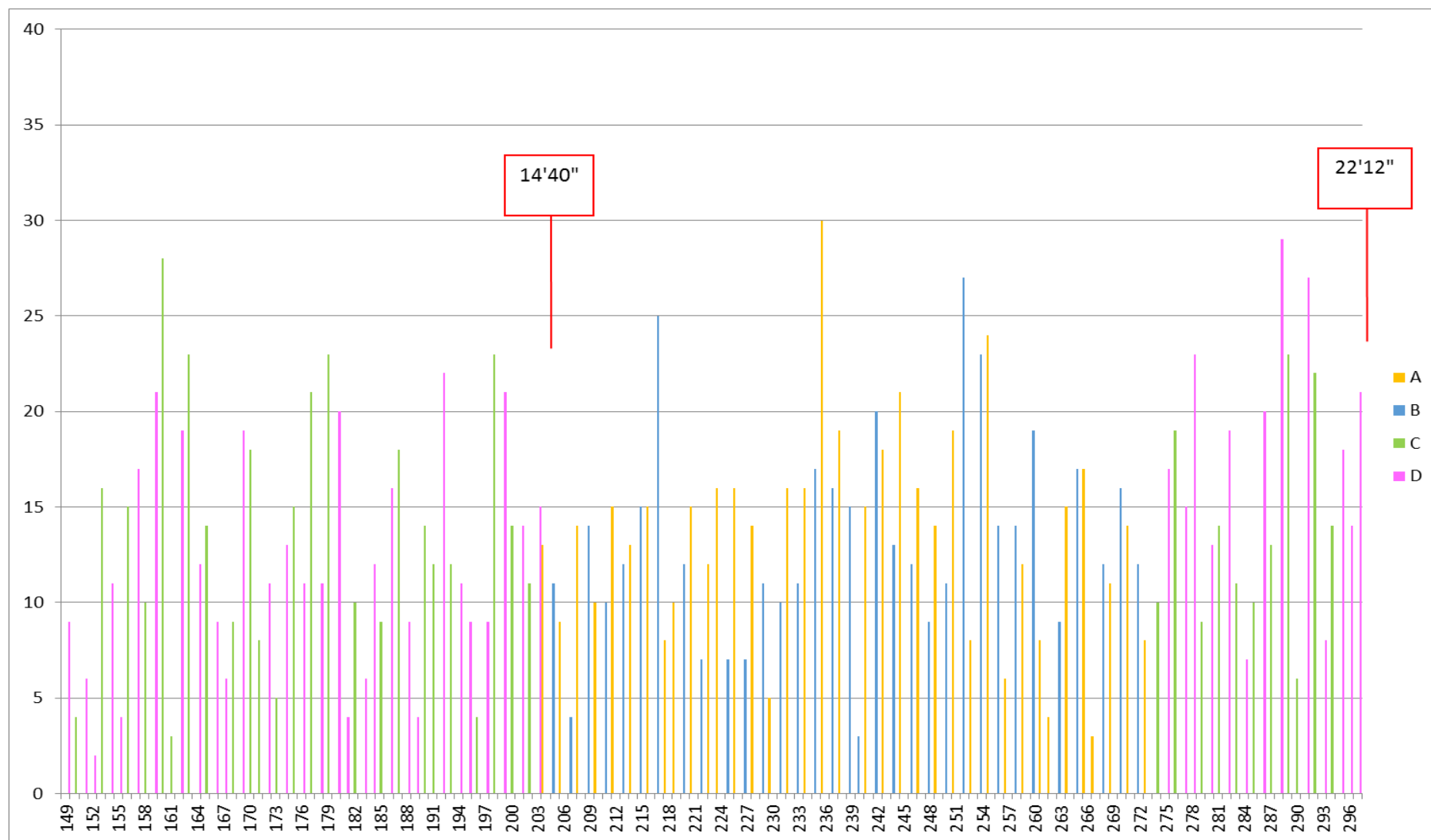
⑧－１－２ 【事業体Ⅰ】 ２



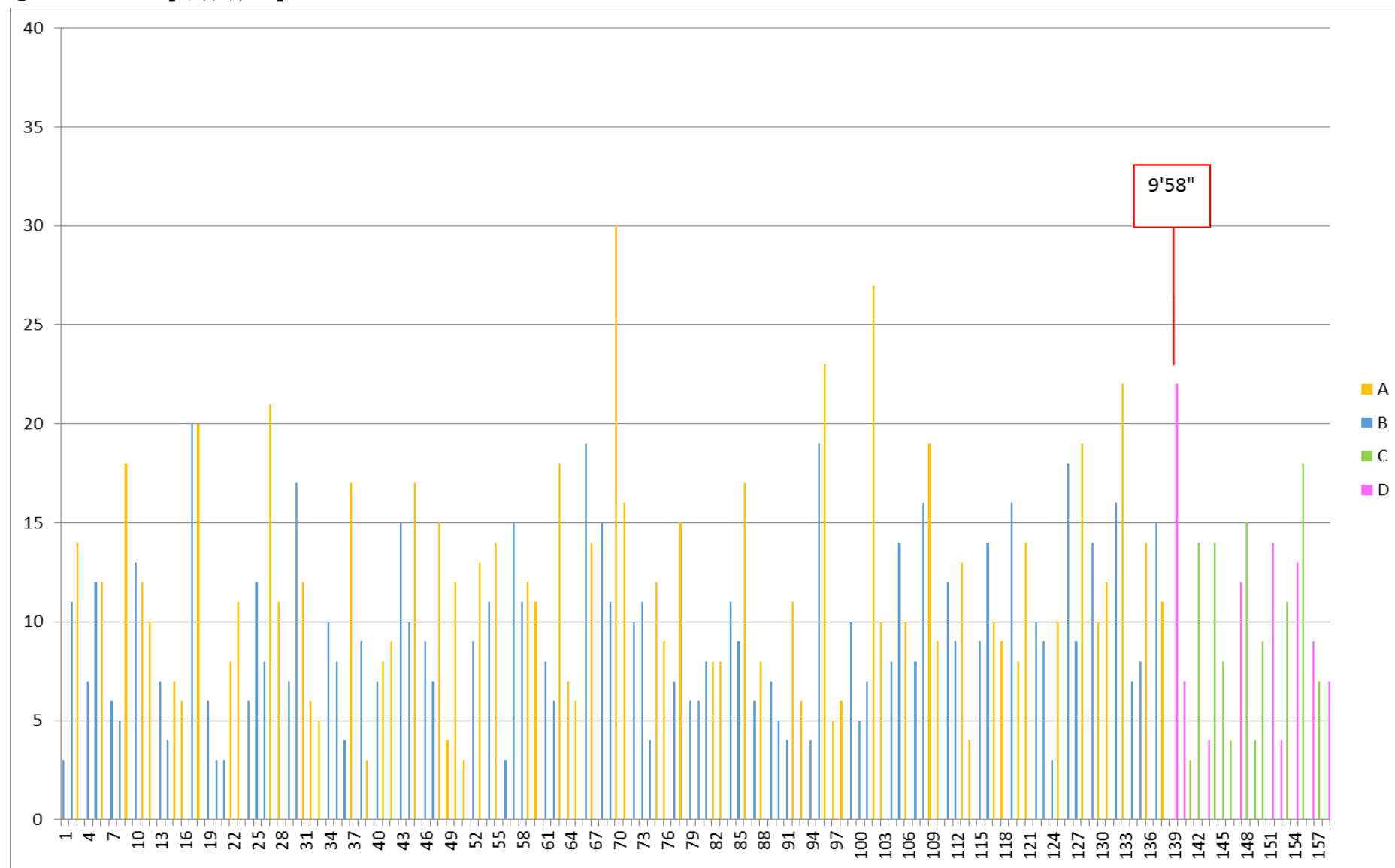
⑧－2－1 【事業体Ⅱ】 1



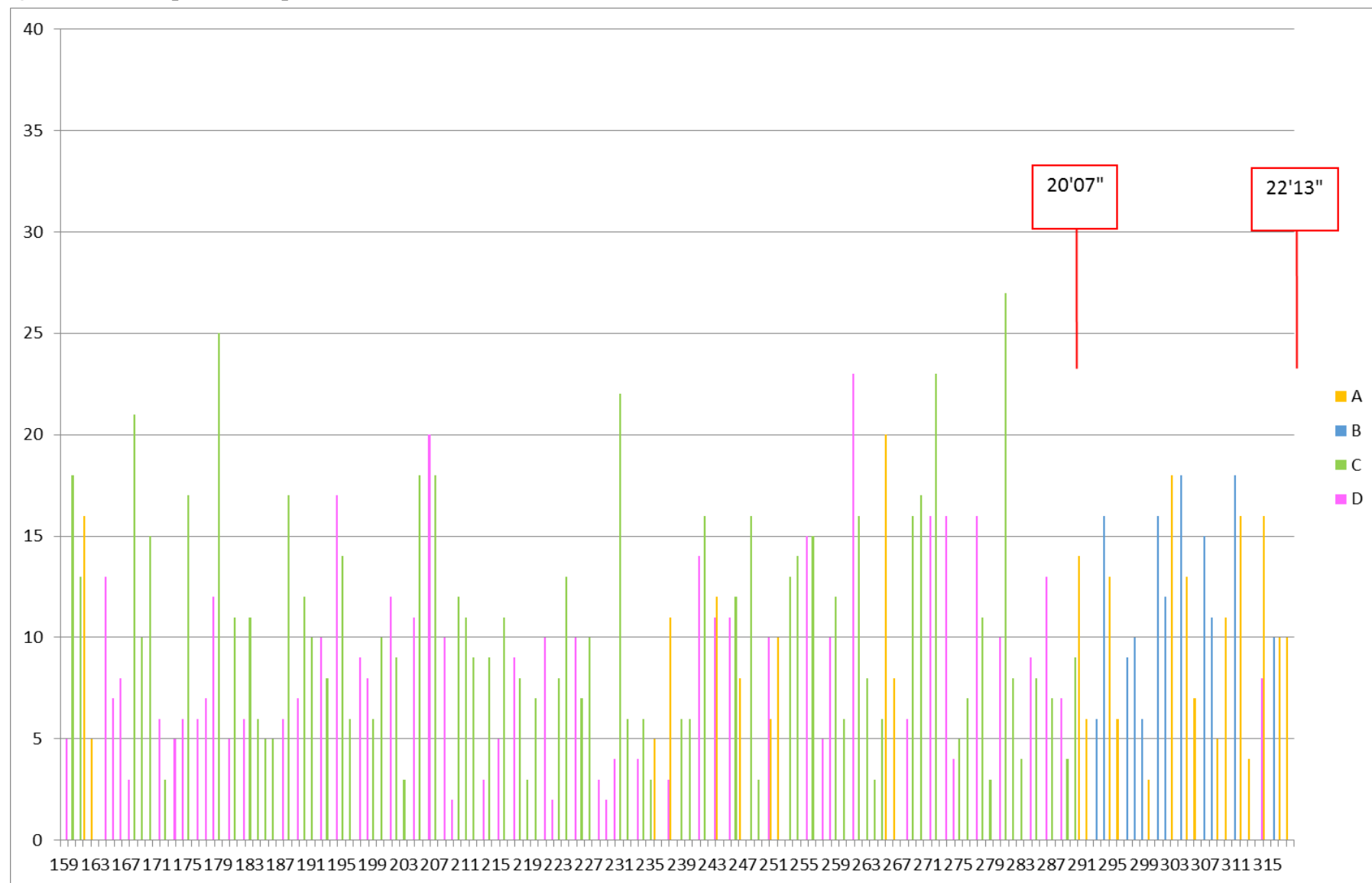
⑧－２－２ 【事業体Ⅱ】



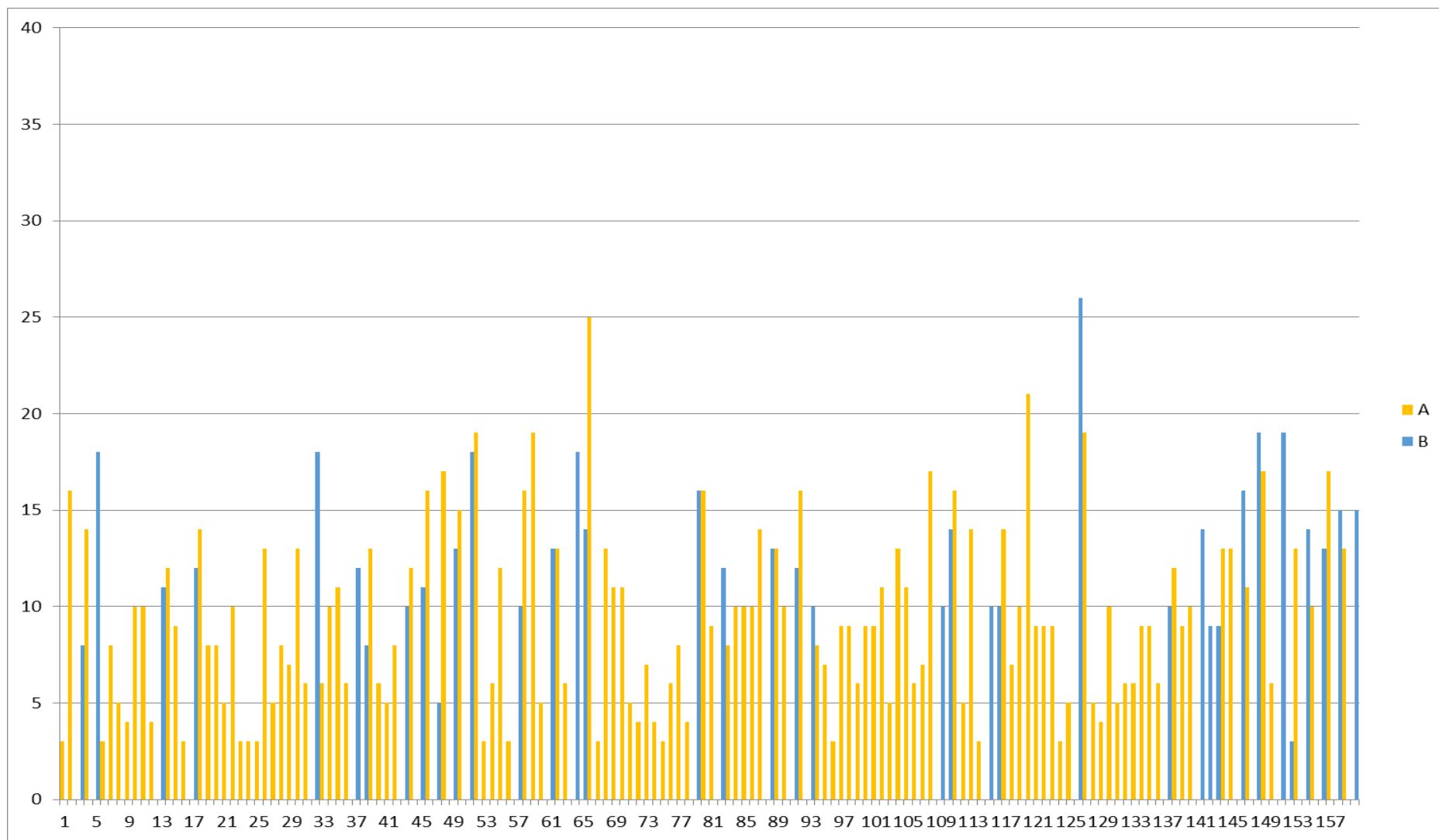
⑧－3－1 【事業体Ⅲ】 1



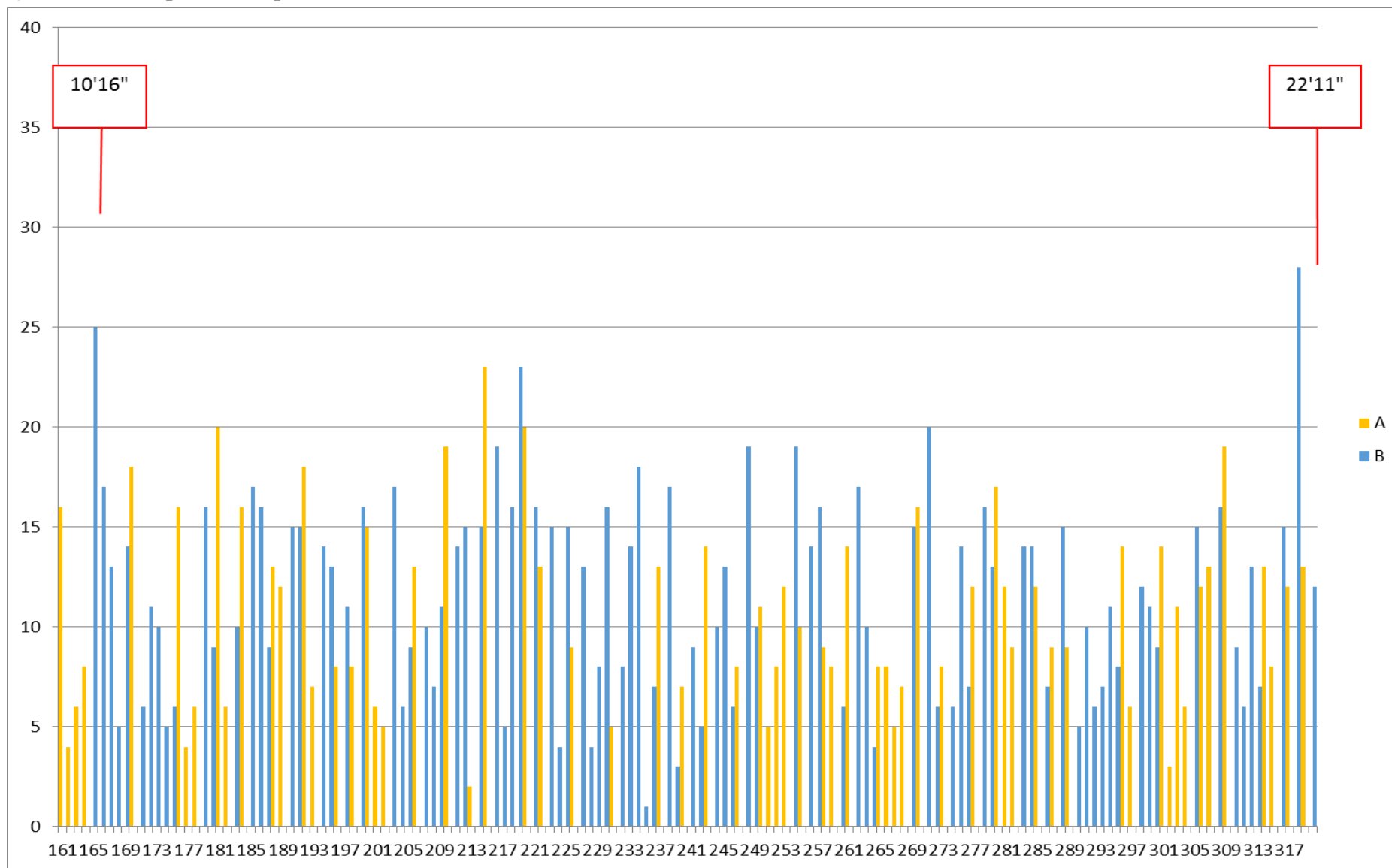
⑧－3－2 【事業体Ⅲ】 2



⑧－４－１ 【事業体Ⅳ】 １



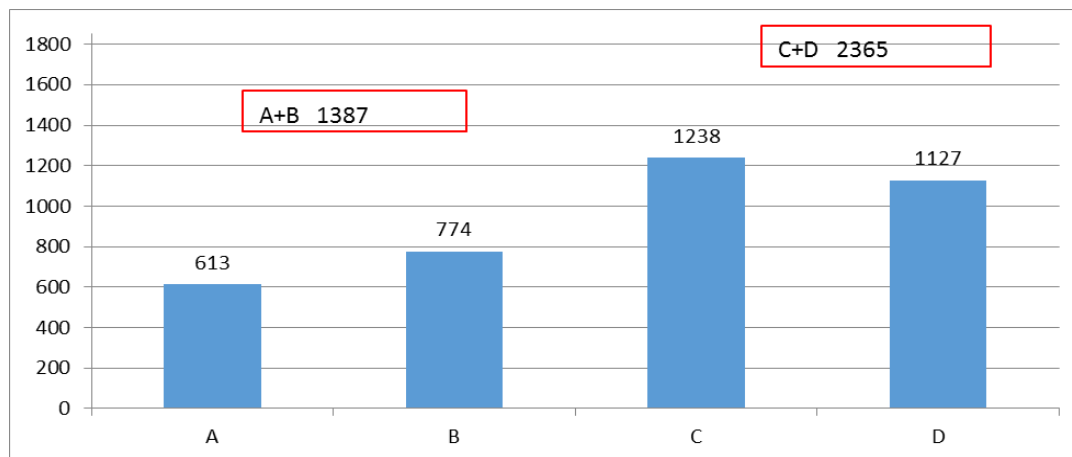
⑧－4－2 【事業体Ⅳ】 2



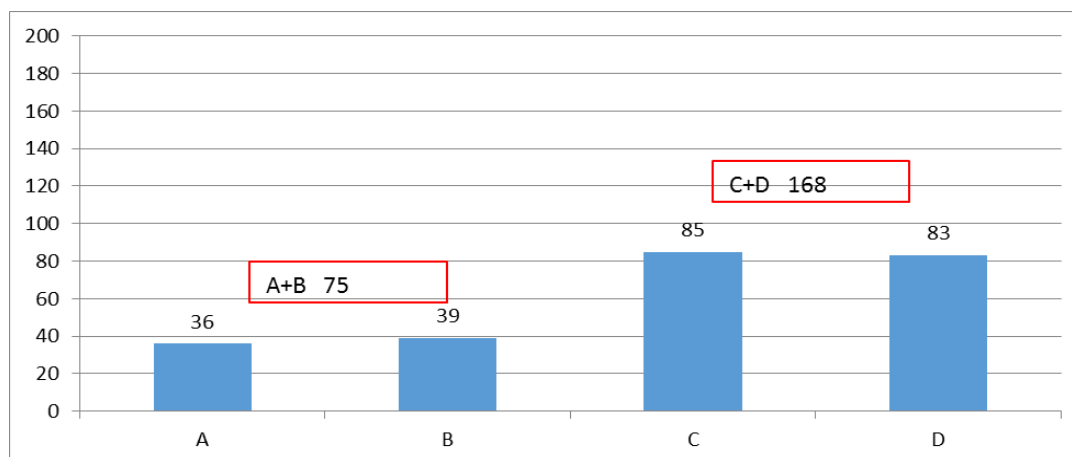
⑨ 入力者別の表出文字数・表出回数・平均表出文字数

⑨ー1 【事業体 I】

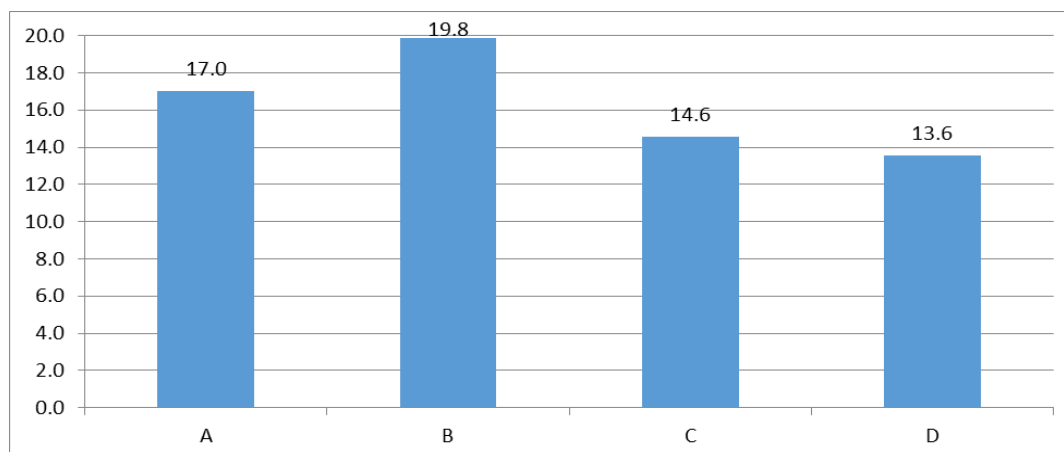
入力者ごとの表出文字数



入力者ごとの表出回数

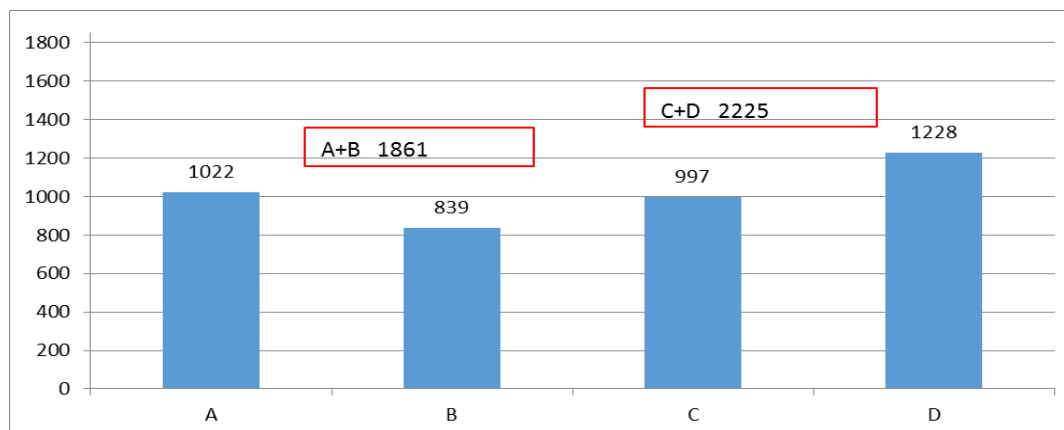


入力者毎の1回の平均表出文字数

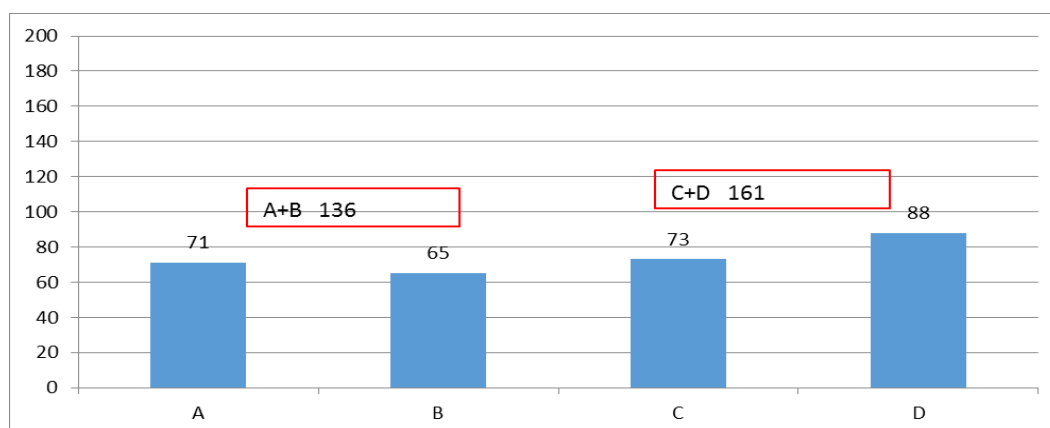


⑨ー 2 【事業体Ⅱ】

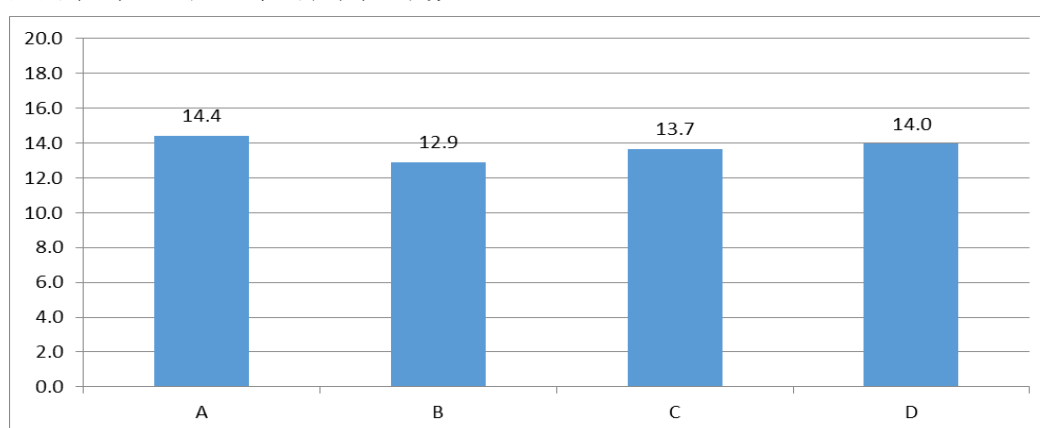
入力者ごとの表出文字数



入力者ごとの表出回数

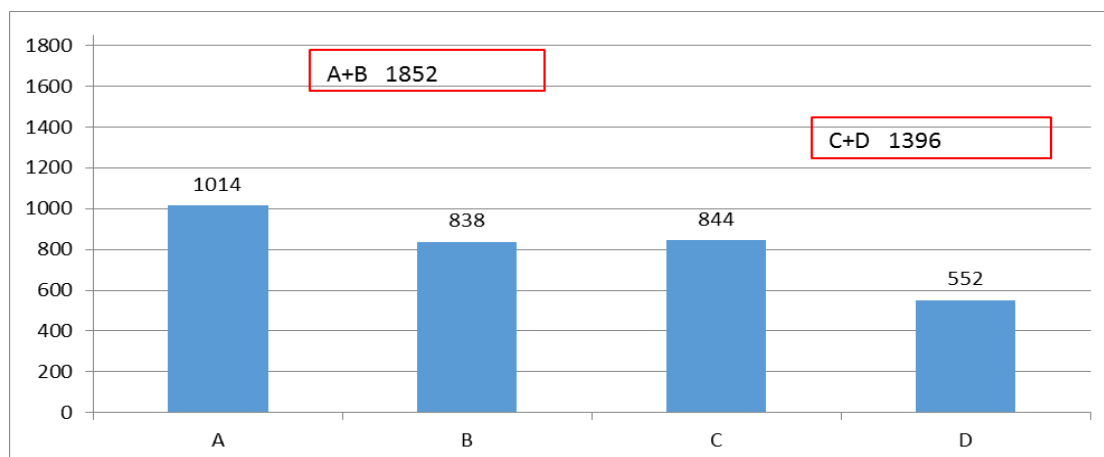


入力者毎の1回の平均表出文字数

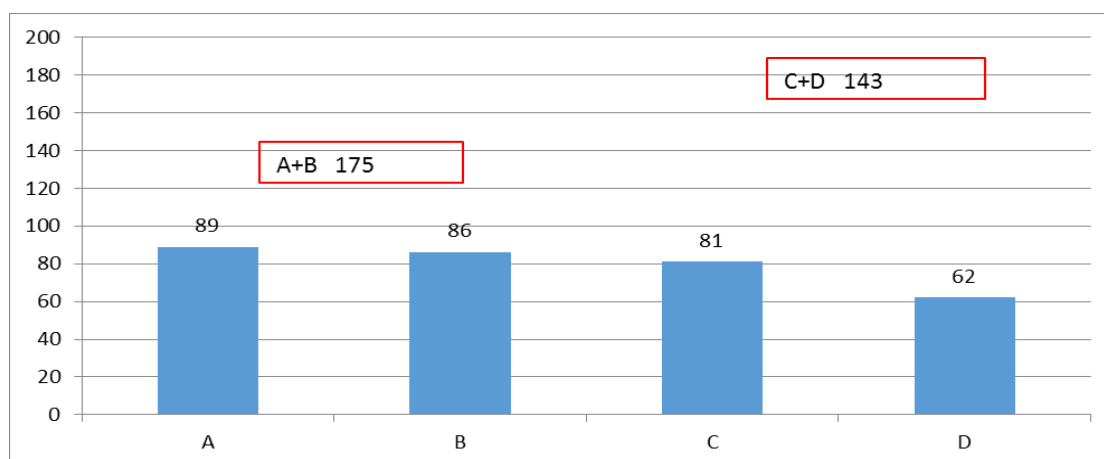


⑨－３ 【事業体Ⅲ】

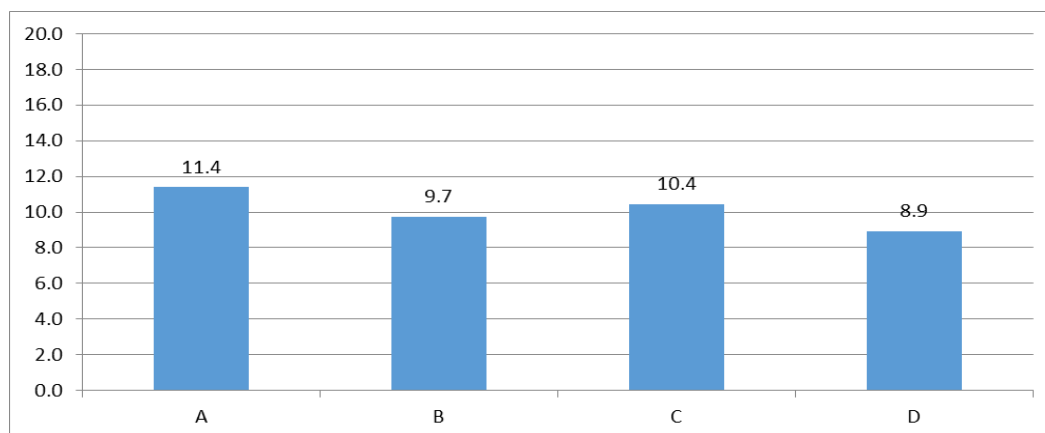
入力者ごとの表出文字数



入力者ごとの表出回数

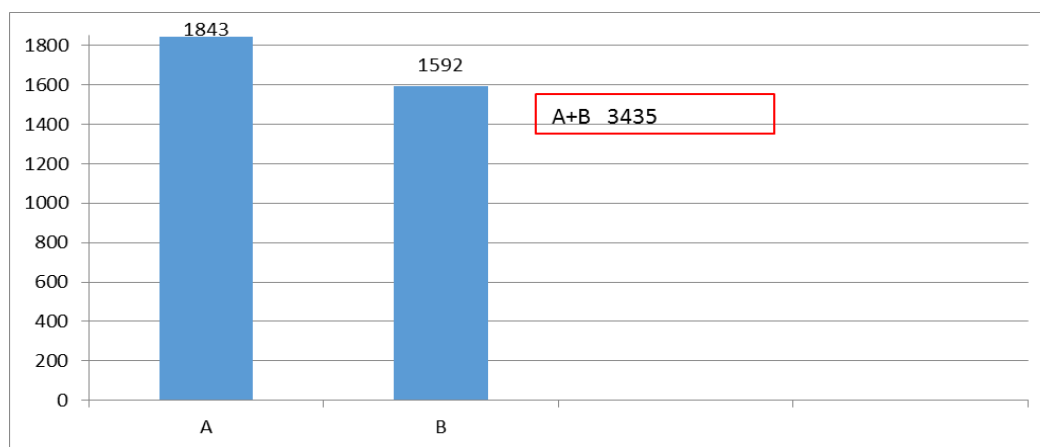


入力者毎の1回の平均表出文字数

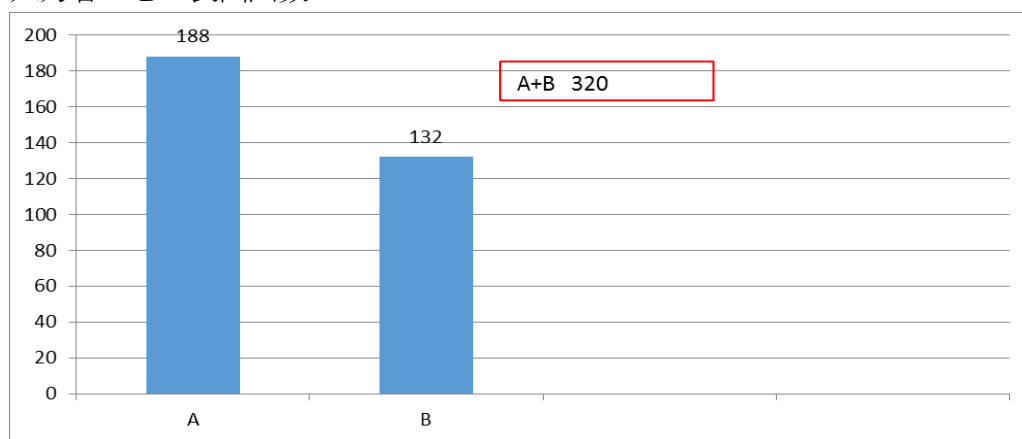


⑨ー4 【事業体Ⅳ】

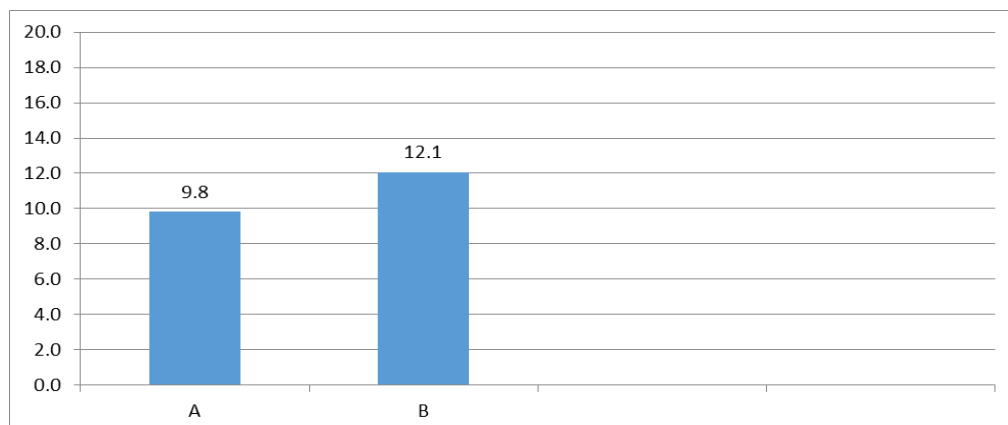
入力者ごとの表出文字数



入力者ごとの表出回数



入力者毎の1回の平均表出文字数



3-2-2 要約筆記利用の実態と課題

1) 目的

事業所への聞き取り調査から見えた差別解消法以降の派遣件数および派遣内容の変化や動向、要約筆記ソフト開発者の考える要約筆記と音声認識の関係、実際の連係入力動画による読み手と連係入力状況の視点からの分析などを実施した。これらから現状の課題を整理する。

2) 実態と課題

要約筆記の利用は、個人が制度を利用する依頼と利用者の要望に応じた合理的配慮のもとでの依頼、社会の中で当然用意されていないとならないという環境整備としての依頼などによるものがある。差別解消法施行以来、派遣件数は微増している。これは差別解消法の施行により、利用者自身、また社会の意識の変化が影響したものと思われる。その中で、パソコン要約筆記の派遣も、全体投影、ノートテイクともに増え、自治体によってはパソコン要約筆記者不足による手書きへの変更を余儀なくされているところもある。利用者個人が依頼する総合支援法下における制度利用はもちろんのこと、依頼者自身が費用負担する合理的配慮にもとづく依頼、環境整備としての依頼も自治体格差はあるが着実に伸びている。当然、依頼内容も福祉的内容から社会生活全般にかかるさまざまな内容へと広がっている。今後さらに、法の理念の社会への啓発や浸透により、利用者層の広がり、それによる今まで以上の多種多様なニーズの増加が当然想定される。同時に、多種多様なニーズに応えることのできる要約筆記もますます求められるだろう。

また、近年はICT技術の進歩に伴い、要約筆記とは異なる文字支援の方法も出現している。その一例として、音声認識ソフトを使用しての情報保障も今後、増えていく可能性は想定される。そこで、一般的に使われている要約筆記用ソフト IPtalk 開発者に、ソフトに音声認識を組み込んだ背景などの聞き取り調査を実施した(3-1-2)。その結果、現在の認識率では、正確性のために訂正者が必ず必要な状況であること、音声認識した文に責任を持つのはだれなのかなど、その場の情報保障として活用するには多くの解決すべき点が残されていることがわかった。将来、正確な音声認識文が可能になったとしても、それは発信者が一方的に発信するものである。音声認識文だけで支障のない利用者や場面であれば、有効に活用されることだろう。だが、利用者である受信者側の条件やニーズに合わせた文字表示が求められる場合、要約などのニーズに対応できるリスピーカーがいないと、単なる音声認識文では対応できないことになる。音声認識ソフトが、利用者個々人への配慮やニーズへの柔軟な対応のできる要約筆記の代用にはならないだろう。

なぜ、連係をするのか。同じ時間で同じ音声情報をより豊かに効果的に伝えるために作業量を倍にするためのシステムなのだと考えらえる。

今回、連係入力を分析した結果、どの事業体でも多くの文字がどんどん出てきたのは確かだ。圧倒的な情報量だった。しかし、読みにくかったり、話の内容をつかむのが難しい場面も多く見られた。動画は20分程度のものだったが、スクリーンに表示される文字を1~2時間読み続ける状況を想像してみると、読み続ける疲労をいかに軽減できるかは通訳としての第一のキーポイントであるとわかる。現在のように、表出までの時間に大きな差やむらがあったり、空白のない画面では読むだけで疲れ、内容の理解までには至らない人も多いだろう。不特定多数に提供する

全体投影ではとりわけ注意が必要だ。

下からスクロールしていく文字で内容をつかむには、読んですぐに理解できる文である必要がある。それには、書きことばとしての日本語文の理解しやすさや、内容の理解しやすさが不可欠である。話しことばに引きずられて、語句の羅列や、どこで切れるかわからないような長文では、読み手は表出される文字を追うだけで精いっぱい内容まではつかめない状況になる。1人で、理解できる正しい日本語文を作れる力が十分あることが前提になるのはもちろんだが、連係入力では2人で1つの文を作り上げる。自分が作ったのではない後続の文章と整合性をもたせる。また、その逆も同様である。入力できることばが増えるということは副詞的語句や挿入語句も入り込んでくる。当然、文構造も複雑になる。そうした文章を、通訳として通用するように2人でも作れる力が必要になる。

多くの文字が出てきても、それが即情報の質に結びついていない状況もあちこちで認められた。情報量の多さイコール質の向上になるような、話を聞きつかむ力、それを言語処理する能力が一人ひとりに求められる。

連係入力によるパソコン要約筆記が通訳として機能するには、他の要約筆記と同様、同時性、正確性、読みやすさという要約筆記の三原則の達成が不可欠である。今後の課題として、連係入力の利点である文字数の多さを活かし、その場の通訳となりうるために必要な技術の整理とその指導方法を明確にする必要がある。手書きおよび一人入力のパソコン要約筆記は、全国平準化を目指し、定着化が進められている。それに対し、連係入力のパソコン要約筆記は、全国共通の指導法がなく、各地域独自の方法で指導し、実践しているという実態がある。今後、利用者のさまざまなニーズに応えられる要約筆記の1つの方法として連係入力による可能性を探るとき、今回の研究成果を踏まえ、通訳として統制のきいた連係入力を目指すことは、聴覚障害者の意思疎通支援手段として有効だろう。

3-3 あるべき連係入力モデル

3-3-1 連係入力の習得内容

1) 目的

連係入力の標準モデルを提案し、研修の実施可能性を探るため、要約筆記事業体が実施する連係入力研修の習得内容とその状況を調査する。

2) 方法

要約筆記事業を実施する事業体に協力を求め、平成 29 年度に Z 県で実施された現任要約筆記者に対する連係入力のための研修（「Z 県パソコン要約筆記者専門研修（連係）」）を聴講した。

3) 結果（研修の概要）

9 月から 3 月まで全 7 回（14 時間）の研修が実施された。そのうち、第 1 回、第 2 回、第 4 回、第 5 回を聴講し、研修でおさえるべきポイントを確認した。研修の柱は、個人の入力技術向上、連係入力の技術、実践の 3 つである。

第 1 回、2 回のテーマは、一人入力の技術を高めること。第 1 回ではまず連係入力の考え方を共有した。一人入力からの発展ととらえ、情報量を増やすことを目指す。単に文字数を増やしたり、話し手の言ったままを入力したりすることではない。ポイントを落とさずわかりやすい文を作る。

実習では、必要不可欠な情報を漏らさず話の趣旨を確実に伝えるために、話をかたまりで聞く、話を抽象化して聞く、必ず入力すべきことを見極め落とさないことをおさえていた。

第 3 回、4 回は、連係入力の技術。第 4 回のテーマは文構造だった。冗長で長すぎる文、主語と述語が遠い文、主述がねじれた文などはわかりにくい。スムーズな連係のためにも、ペアが同じ判断で長文や挿入文などを処理していく必要がある。わかりやすい文づくりへの意識は不可欠。また、連係では、話し手の文構造を変えないことが原則である。主語の置き換えはしない。

実習では、読みやすい文か、伝わる文か、意図をとらえているかを検証。不要な情報を削るよう指導していた。

第 5 回以降は、実践的な内容で実習が中心だった。

4) 考察

受講者は一人で入力できる技術を持っており、現場での経験もあるとみられた。受講者はタイピング速度 120 文字以上/分で、前もって選考試験に合格した人で、連係入力の技術のレベルアップを図ることが研修の目的であった。情報量を増やしつつわかりやすい文を作ることを目標に、指導が組み立てられており、養成講習会の延長線上にある内容と考えられた。

現在、要約筆記者養成カリキュラムでは一人入力で支援ができることを養成の目的としている。より実践的な連係入力の技術を習得させるには、「要約筆記者養成テキスト」第 15 講だけでは時間的、技術的な限界がある。第 15 講では連係入力の基礎を学び、1 人で確実に入力できる力を持った要約筆記者が、研鑽を積むことで実践的な連係入力が可能になると考えられる。

表 3-4 Z 県 連係入力研修カリキュラム

	テーマ	コメント
1 回	個々の入力技術を高める 「確実な情報を伝えるために－ 1」	連係入力も 1 人入力の技術が基本となる。 全ての要となる、伝えるべき情報の取捨選択、正しい日本語で伝える技術を身につける(情報の多い 1 人入力)。
2 回	個々の技術を高める 「確実な情報を伝えるために－ 2」	
3 回	連係入力 基礎 「ペアで入力する」	※連係入力未経験者がいない場合、この内容は省く。
4 回	連係入力 技術－1 「情報を増やす」	単に文字量を増やしても情報は増えない。 「その言葉は必要か」の観点で、分かりやすい情報豊かな通訳文を作る。
5 回	連係入力 技術－2 「文構造を考える」	分かりやすい文を作るためには文構造に着目することも大事。
6 ～ 8 回	連係入力 実践	入力と検証

表 3-5 Z 県 パソコン要約筆記専門研修（連係）日程表

	日にち	曜日	時間	内容
1	9 / 1	金	19 : 00～21 : 00	個々の入力技術を高める「確実な情報を伝えるために－ 1」
2	9 / 12	火	19 : 00～21 : 00	個々の技術を高める「確実な情報を伝えるために－ 2」
3	10 / 19	木	19 : 00～21 : 00	連係入力 技術－ 1 「情報を増やす」
4	11 / 13	月	19 : 00～21 : 00	連係入力 技術－ 2 「文構造を考える」
5	12 / 12	火	19 : 00～21 : 00	連係入力 実践
6	1 / 18	木	19 : 00～21 : 00	連係入力 実践
7	3 / 13	火	19 : 00～21 : 00	連係入力 実践

Z 県 連係入力研修受講審査(平成 29 年度)

試験は以下、2 種類とする。

I. 入力速度審査

II. 内容審査

I. 入力速度審査

<審査方法>

IPtalk 練習リモコン利用。試験用に作成した問題文を読み込み、それを見ながら入力(音声はなし)。流す速度：120 とし、自動調整にチェックを入れる形。

<判定基準>

合 格：70 点以上

実入力速度 120 文字／分を基準点(70 点)とし、誤字・脱字：1 カ所につき 2 点減点などのほか、適宜間違いの質、状況などを精査して判断する。

II. 内容審査

<審査方法>

5 分程度の音声(講演)を再生し、聞きながら 1 人入力する形。ソフトは IPtalk を使用。

<判定基準>

減点法

全 22 要点の 8 割が書けている(= 2 割書けない)ことを合否の基準とし、間違いの質、状況などを精査して判断する。

3-3-2 連係入力モデル提案

1) 目的

連係入力の手法は、1990年代の後半に2人連係入力ができるパソコン要約筆記用ソフトが開発されたことにより、全国に広がった。それまで、パソコン要約筆記は、ワープロソフトを使って1人で入力する方式が主流だった。非常に高い入力技能を必要としたため、当時のボランティアで担うことは難しかった。2人で入力することにより文字数が増えることが期待され、全国で使われ始めた。

連係入力が普及する一方で、全国共通の指導法が確立されたとはいえない状況が続いた。養成の指導内容は地域によって異なっており、連係入力の定義も方法も統一されていなかった。専門性を備えた要約筆記者を養成し、福祉サービスとして機能する安定的な要約筆記者事業を行うには、体系的指導が欠かせない。そのためには、連係入力の標準モデルを示す必要がある。

要約筆記者養成カリキュラムの到達目標は、「1人で入力できる」ことである。連係入力はそのうへの技術としてとらえる。1人で要約筆記ができる技術を持った者同士が組むことで、難聴者の多様なニーズに応えることができる。連係入力は、単に文字数を増やすことだけを目的とするものではない。字数も含め伝える内容を増やし、わかりやすく同時性を持った文を出さなければいけない。

要約筆記を長時間利用する難聴者の読む負担を考え、さらにその場に参加できる通訳をするために、何が読みやすさにつながるか、通訳のスキルとして必要なものは何か。連係入力の標準モデルを提案したい。

2) 方法

3-1「要約筆記利用の実態と課題」および3-2「要約筆記場面の分析」で、聞き取り調査および連係入力の要約筆記場面の分析を行い、現状の課題を分析、整理した。また、前項では事業体主催の研修を聴講し、習得すべき内容を調査した。ここまでの結果を踏まえ、通訳として機能する連係入力の標準モデルを示す。

3) 結果

① 連係入力のポイント

通訳として機能する連係入力のポイントを、読みやすさの2面から挙げた。画面を目で追ったときに負担なく読める視覚的な読みやすさと、読んだときにすぐに意味がつかめる理解面での読みやすさである。

パソコン要約筆記は、そのソフトの性質上、入力した文章が画面の下の方から上がってくる。文章を表出すると、それまでの文章は順に上に移動する（スクロール）。画面が動くので移動している間は読みづらい。また、画面の上の方の文章は消えていくため読み返すことはできない。視覚面、理解面の両面での読みやすさは重要なポイントである。

①-1 視覚面での読みやすさの要素

- ・表記：正確な入力と変換、適度な読点

読点がないと意味がとりにくい。適切な位置に読点があることで意味のまとまりとして文が

読める。1文を分担して入力するときも適度な読点を意識する。

- ・表出：コンスタントな表出

読みやすさの中で最大の要素となる。入力者2人が一定の文字数で交互にリズムよく表出すると、スクロールも安定し読みやすい。また、次の表出までの時間が一定であれば、安心感につながり待たされ感も少ない。コンスタントな表出はチーム内でも同様である。ペアごとの文字数、表出のリズムを同じにし、統一感を持たせる。

- ・空白：適度な空白

空白がない画面は視覚的に疲れる。改行により、画面に適度な空白部分を残す。後述の「1文の長さ」も密接にかかわる。

- ・訂正：すばやい訂正

連係入力では修正が難しい。訂正をしている間にペアが表出してしまうリスクを抱え、表出のリズムも損なわれる。すばやい判断と訂正が必須である。

- ・1文の長さ：短文

画面のなかで文字を読んでいくので、1文の文字数が極端に多いと画面いっぱい文字が広がってしまい読みづらい。また、一度に表出されたら読み切れないうちに文章がスクロールされる。主語と述語が離れるので意味がとりにくく、主述がねじれるおそれもある。短い文を作り、主語と述語を近づける。

①ー2 理解面での読みやすさの要素

- ・構文：日本語として整った文章、主述の一致

前に述べたように、要約筆記の文章は動き続け消えていくので一瞬で読み取れる文でなければならない。主語や述語、助詞を漏らさず、適切な接続詞、語句を選ぶ。1文を分担して入力する場合、前後でねじれがないようにする。

- ・内容：重複や欠落がない、誤読がない文、意味がわかる文、展開がわかる文

内容がすんなり頭に入っていけるように、話の流れにそってわかりやすい文を作っていく。

② 必要なスキル

以上のポイントから、読みやすい要約筆記を実現するために必要なスキルを挙げた。

- ・タイピング力と変換技能

入力スピードは、パソコン要約筆記では不可欠のものである。漢字かな混じり文で少なくとも1分間に100文字以上入力できることが前提である。120文字以上打てる力があれば、読みやすさやわかりやすさに意識を向けることができる。また、ロスタイムがない正確な入力技術やすばやい変換技能も求められる。

- ・モニタリング力

ペアの入力内容を確認めながら、つながる文をつくって表出する。連係入力はその作業の繰り返しである。入力のタイミングを計り、スムーズに文をつなげるためにも、高いモニタリング力が必要である。

- ・要約力

聞いたまま入力したり話に飛びつくと、脈絡のない文を作ることになる。聞きつかんで要約する力は必須。また、利用者や場面に合わせて文字数を調整するには要約率を自在に変える力が必要となる。ただし、大きくまとめたり抽象化しすぎたりすると、次の入力者はつながりのある文を作りにくい。

- ・構文力

1 文を分担して入力する場合は、ペアの入力部分を見ながら瞬時に整合する文を作ることになる。特に文のねじれには敏感でありたい。

- ・情報選択の判断力

利用者の目的に合わせて情報の優先度を判断し、その場に必要の情報を選択していく。ペアが同じ判断基準で入力することで重複や欠落も防げる。

- ・先読みして文を作る力

ペアの入力に合わせて、話を先読みしながら文を作っていく力である。

- ・分担率の調整力

話の情報の密度やスピードの変化に対応し、入力分担率の自在な調整をする。また、1 文を交互に入力するか、1 文を分担して入力するかを選択もしていく。

4) 考察

以上の整理から、めざすべき関係が見えてきたと思われる。読みやすさとそのために必要なスキルは一人入力に求められる技術と一致する部分が多かった。関係入力は、1 人で入力できる力のうえにある技術だと改めて確認できた。

お互いの技術の未熟さを補うための関係では読みやすさの達成はできない。必要なスキルを備え同じ技能を持つ要約筆記者が組んでこそ、通訳としての機能が果たせる。また、チームで統一した画面を提供するためにもチーム全員が共通した意識、技術を持つことが望まれる。

関係入力では、より多くの要素を残すことが可能である。入力のスピードは、字数を増やすことに費やすのではなく、話の意味を豊かに伝えることに生かすべきである。専門的内容の講義や研修のように、話し手と聞き手の間の知識差が大きい場合、具体的な例示が入ると聞き手の理解の助けとなる。豊富なエピソードをつなげることで話が展開される場や、置換ができない専門用語や固有名詞が多い場でも、関係入力は有効だろう。

利用者や場面に合わせて、読みやすくわかりやすい関係入力の画面を出していく。それによって利用のしかたや幅も広がっていくことだろう。

5) 参考文献

- ・栗田茂明「IPtalk の開発とパソコン要約筆記－聴覚障害者のための情報保障」『情報管理』9月号、2016、p366-376
- ・特定非営利法人 全国要約筆記問題研究会『厚生労働省カリキュラム準拠テキストにおけるパソコン要約筆記の技術指導の平準化を図る検討事業報告書』
- ・一般社団法人 全日本難聴者・中途失聴者団体連合会、特定非営利法人 全国要約筆記問題研究会『厚生労働省カリキュラム準拠 要約筆記者養成テキスト下』
- ・社会福祉法人 聴力障害者情報文化センター『要約筆記者指導者養成研修 指導者用テキスト』

3－3－3 連係入力のカリキュラム試案

1) 目的

連係入力の基礎として指導すべき内容を整理し、要約筆記者養成カリキュラムに基づいた指導計画案を作成する。それにより平準化された体系的指導への道筋を示す。

2) 方法

前項までの結果を踏まえ、聴力障害者情報文化センター主催・要約筆記者指導者養成研修における講義（選択科目）「連係入力の考え方と指導法」や協力事業体の指導計画を参考に作成する。

3) 結果

p101 表3－6参照。

4) 考察

養成カリキュラムでは、選択必修科目は「おおむね10時間以上を選択」とある。しかし、84時間で養成する事業体が大半であることから、連係入力の指導に割ける時間数は、講義と実技を合わせて8～10時間程度と考えた。

ここで提案する「モデル指導計画」は、講義2時間、実技6時間の計8時間のものである。学習目標は、「連係入力の方法を知り、連係入力の基礎として必要な考え方も身につける」としたのでご覧いただきたい。

連係入力に必要なスキル向上には、3－3－1、4)で述べたように、要約筆記者の現任研修などが必要と考えられる。

5) 参考文献

- ・一般社団法人 全日本難聴者・中途失聴者団体連合会、特定非営利法人 全国要約筆記問題研究会『厚生労働省カリキュラム準拠 要約筆記者養成テキスト下』

表 3－6 連係入力モデル指導計画（8時間： 講義2時間、実技6時間）

目標：連係入力の方法を知り、連係入力での基礎として必要な考え方を身につける

回	テーマ	時間	指導内容
1	連係入力の考え方 連係入力の手法	1.5 h	一人入力での学びを生かし、一人で伝える力を合わせることでニーズに応える 連係入力の役割と方法 デモ： 実際の連係入力を見てみよう
	技術実習 1	0.5 h	連係入力をやってみよう： 2人で入力してみよう 相手の入力を確かめながら表出する
2	連係入力の方法	0.5 h	入力者1・2を詳しく： 1文交互入力と文の前後で分担入力
	技術実習 2	1.5 h	入るタイミングをはかりモニターして文をつなげる 先打ち、後打ち練習： 文の前後を分担入力 講師やアシスタントと組んでやってみる 内容、文章のねじれはないか
3	チームでの情報保障	0.5 h	連係入力におけるペアの組み方と交代方法 サブの役割（訂正、資料提示の方法とタイミング）
	技術実習 3	1.5 h	交代、資料提示、訂正： チームで交代して通訳する 資料提示、訂正を試みる
4	総合実習	0.5 h	連係入力の注意点：起こりがちな例から対策をおさえる
	技術実習 4	1.5 h	習得した技術を駆使して、総合実習

4. 分析・考察

4-1 聴覚障害者の情報保障のあり方

1) 情報保障手段

聴覚障害者は、音声によって提供される情報や会話を理解できないため、視覚による代替手段を用いる。この方法には、手話通訳、手書き要約筆記、パソコン要約筆記、音声認識、筆談、字幕などがある。最近話題の音声認識については、少子高齢化による担い手不足と予算に対するコスト減の手段として注目されている。加えて、時代と共に聴覚障害者の求めるものが変化してきた。聴覚補償により、聞くことを主たるコミュニケーション手段としている聴覚障害者のなかには、話し手の発言のままの文字化を望む場合もある。近年、進歩するICT技術に対応した音声認識ソフトが注目されてきた背景のひとつでもある。

しかし、課題は2つある。1つめには、誤認識・誤変換があげられる。3-1-2で述べたように、訂正係を置き、訂正を経ないと正しいものは表示できず、その訂正によるタイムラグが生じる。また、訂正係の養成の方法も確立されておらず、養成にも時間がかかると思われる。2つめは、3-2で分析したように、話しことばそのものの羅列では、すぐに意味理解が難しい。話されている場の状況や前後の文脈が背景として共有されていないと通じないこともある。要約筆記は、その場で利用者がわかるように通訳者の頭を通して認識されたことが表出される。そして通訳は、その場のコミュニケーションに責任を持つ。その場で理解し、考え、自己決定に結びつくように情報を提供できなければ、聴覚障害者の権利は守れない。したがって、多くの利用者のニーズは、原発言の文字列ではなく、利用目的にそった内容が遅れずに表出されることといえる。

聴覚障害者のニーズは多様である。話されたままのことばすべてを知りたいと要望し、大量の流れる文字から自分で必要な情報を得たいという人もいる。一方で、話された言葉のまま提示されると読む量が多くなり、読み疲れ、内容も理解できない、との声もある。専門職である要約筆記者が文字量の多寡とスクロール速度を対象者に合わせて適切に調整することが求められる。

2) 連係入力

連係入力の定義や方法は地域により違いがある。厚生労働省の「要約筆記者養成カリキュラム」（平成23年3月30日通知）では、「1人で通訳できる」ことが到達目標で、連係入力はそのうえの技術としてとらえている。パソコン要約筆記が、「場面と利用者に合わせた文字数の表出をすることで、利用しやすい要約筆記を可能にするもの」であるなら、連係入力は、その可能性をさらに広げるものといえる。「厚生労働省カリキュラム準拠要約筆記者養成テキスト」

（平成25年3月30日 一般社団法人全日本難聴者・中途失聴者団体連合会と特定非営利活動法人全国要約筆記問題研究会 発行）第10講では、文章要約における要約率の違いを学ぶ。要約の作業にも幅があることを考えれば、要約筆記における要約にも同様の幅があると言える。手書きや一人入力により要約率の高い表出が適している場面も、要約率が低く、話しことばを整文しただけに近いものが求められる場もある。連係入力によって、語句の処理を最小限にして比喻や例示、引用などをそのまま使うことや、エピソードを含めることも可能となる。

通訳者として、利用者のニーズの有無や適切さの判断、関係入力の生かせる状況を選択する力も必要となる。

要約筆記における「要約文」を作成するにあたり、場に応じて文字数を調整し、話の内容を豊かに伝えることを主眼に関係入力を分析・考察した。

3) 関係入力考察のまとめ

3-2-1では、利用者の視点で、読みやすさの観点から課題を整理した。読みやすさの要素として、文字遣いや文構成、文字表示量、スクロールなどがある。日常生活で目にする新聞・書籍等の文字情報に準じた表記であれば使いやすい。一般に通用する日本語表記の基準にそったものである。読み取りやすさは内容の分かりやすさともいえる。利用者の視点で考えれば、表出までの時間、1回にあがる文字量、日本語構文としての正しさが関係する。文の読みやすさ、意味の取りやすい内容と考えれば、話されたままではなく、通訳者が単文化と短文化をおこなうのは必須といえる。また、全体投影ではなくノートテイクなど個人支援の場合には、特に利用者に伝わるように要約の4つの手法を使いこなす。重複する語句や、省略しても理解が妨げられない語句を「省く」・まわりくどい表現をやめ、直接内容に迫る表現にする「縮める」・複数の情報や並列の情報を統合したり、抽象的な表現にする「換える」・原文にない情報であっても、要約文理解に必要であれば加える「補う」。多様な個人のニーズに応えるためである。

要約筆記は、聴覚障害者のその場の通訳として機能すると考えれば、利用者がその場に参加する利用目的にそったものでなければならない。話された情報のうち、何を優先して伝えるかは、利用者の目的にかなったものという判断になる。これは通訳者の恣意的な判断に基づくものではない。判断に必要な力量を持つ要約筆記者の存在が前提となる。そのうえで、文字数が重要な条件となる通訳場面もあり、そこでは関係入力により、利用目的にかなう通訳の提供できることをみてきた。

3-2-1では、関係入力の課題も述べた。一人入力でも読みやすさのためにはコンスタントなスクロールが必須だったが、関係入力では文字数が増えるため、さらにコンスタントなスクロールが課題になる。入力をし終えていても順番を飛び越えては表出できないため、ペアの表出が終わるまで待つことになる。スクリーンに何も出ない「待たされ感」や、2名が相次いで表出するために一気に何行もスクロールする例もあった。また、関係入力では文字数が一人入力より多くなるということと、話されたことばや言い回しを再現するだけでは分かりづらい面も如実だった。

これらを整理して、3-3では、到達すべきモデルを示した。要約筆記はその場の通訳機能を有するものである以上、文字数の多寡だけが通訳の価値でないことは自明だろう。同時にパソコンというツールを要約筆記に最大限生かすなら、利用者の通訳利用の目的に沿った文字数が確保されることは意義のあることになる。それは単に文字が多いにとどまらない。しかし、一方で話しているとおりの言い回しさえ提供すればいいものでもない。

関係入力の特長を生かすには、パソコン要約筆記者のタイピングやスクロールといった、入力・表出の技術と同時に、文章構成力や語彙力をはじめとする日本語運用能力がより求められ

る。話されたことをそのまま打てばよいと考える難聴者もいるだろう。しかし、聴覚障害者の情報保障のあり方を考えたとき、その場での通訳利用のためには、適度な要約による読みやすい文章、理解を遅延または阻害しない文章の提供が求められると考察した。

ちなみに、現状では、音声認識が通訳として利用できる状況にはない。また、音声認識の認識率があがっても、文字量とスクロールの速さについていけず利用できない聴覚障害者もいるだろう。聴覚障害者の「権利擁護」が要約筆記のよって立つところである以上、この点はどんな状況でも念頭に置く必要がある。

4) めざす連係入力

ここでは技術に関する詳細を述べる紙幅はないが、連係入力で増やすことのできる文字は、なにを記すべきだろうか。

養成では「要約技術」として、話しことばを処理する方法を学ぶ（「要約筆記者養成テキスト」第5講）。話の意図を明確に浮かびだすためには、多くの文字に埋没させずに話し手の「言葉」が伝わるのが重要だ。要約する作業のなかで初歩におさえる「要約技術」は基本技術として確実に習得されることが望ましいが、そこでとどまっては通訳技術としては初心者段階で終わる。通訳者の話の聞き方は、そこで残すべき単語の選択がより適切なことだといえる。手書き要約筆記では意図の伝達を第一義とするが、文字数を増やすことができれば、話し手の言語の表現を伝えることもある程度可能である。

例えば、要約技術で最初の段階で習得する「副詞」を取り上げてみる。副詞は、話の内容にかかわらず話し言葉では盛り込まれやすい。習得の初歩の段階で「副詞」を省略することは必須である。これに振り回されて話に遅れるのは通訳技術としては未熟である。話の接ぎ穂に挟まれる副詞、話し癖でたびたび登場する副詞、こうしたものを聞き分ける知識や意識がなく、伝える意識が薄いと、連係入力は弊害が前面に出ることになる。

しかし、副詞のなかでも「話し手の心情の表れ」や「場面や状況を詳しくする」などの使用では、連係入力であることでそれを取り込むことができる。こうした語を意識的に選択して、連係入力をすることで増やした文字数に生かせるなら、内容に厚みのある要約筆記文が可能になる。

副詞以外にも、非専門用語は要約（置換）の可能なものが多いが、専門用語はほかの語に置換できるものは少ない。したがって、専門用語の頻出する学会や研修においては、その有効性はある。ただし、こうした場も視覚情報を的確に使用したり、頻出する用語も要約筆記文の中の処理技術を駆使することで連係入力を行わなくても可能なことも十分ある。

つまり、こうした場面でどの語を生かすかの選択力が必要だと考えれば、連係入力は入力の技術ではなく、日本語の力であると考えことになる。聴覚障害者の利用目的や場面の状況に合わせて機能する通訳を提供することは、今後もさらに追究する必要がある。

5) 対人援助技術

もう一点、あえて挙げるなら、要約筆記が通訳として機能するためには、要約筆記は対人援助の技術が備わっていることが不可欠である。

第二種社会福祉事業の従事者としてという観点からも、人への援助をする役割に対して、真摯な姿勢を再認識しておきたい。とくに、ノートテイクは、要約筆記の中でも個人に対する情報保障という面で技術的にも責任は重く、対人援助の知識や実践力、倫理観などの考え方も重要であることはいうまでもない。利用者や周囲の観察により、その人に必要と判断される通訳を提供すべきである。また、聴覚障害者のみならず、その場の人すべてが十分な要約筆記の利用を可能にすることを視野に入れていく。対人の仕事の意識を全要約筆記者が保持できること、その共通認識を元に、派遣事業に従事できる要約筆記者の存在が社会に認識されることが必要である。

5) 参考文献

- ・一般社団法人 全日本難聴者・中途失聴者団体連合会、特定非営利法人 全国要約筆記問題研究会『厚生労働省カリキュラム準拠 要約筆記者養成テキスト下』

4-2 要約筆記事業が担う部分

1) 要約筆記事業の歴史

要約筆記は 1960 年代に誕生した。聞こえづらさを抱える難聴者や突然聞こえなくなった中途失聴者は文字による支援が必要ではないか、周囲の人のこの気づきが出発点であった。手話を母語とする人とは異なり、中途失聴、難聴の人たちには文字による音声情報の伝達が必須のことだった。

それまで聞こえる世界で音声から閉ざされ、孤立していた中途失聴者、難聴者は、要約筆記を利用してコミュニケーションを取ることが可能になった。同じ障害を持つ人たちとのコミュニケーションにより、ろう者とは異なる自分たちのアイデンティティを確立していく。中途失聴、難聴者の集団化が進む中で、自らの知る権利のために、社会に必要な支援を求めていく。その一つが要約筆記の公的支援制度確立の要望だった。

運動の成果が実り、1981 年には都道府県、市町村の社会参加促進事業に入った。法的な位置づけはなかったが、公的な事業になった意味は大きい。2000 年に社会福祉法が改正され、要約筆記事業は第二種社会福祉事業に位置付けられた。要約筆記者は中途失聴、難聴者の知る権利を護る専門性を持つ者として、コミュニケーションを仲介する役割となった。

その後、2006 年には障害者自立支援法が成立し要約筆記は地域生活支援事業におけるコミュニケーション支援事業に位置付けられ、市町村での派遣が必須事業となった。続いて、2013 年には障害者総合支援法が成立し、意思疎通支援事業に位置付けられた。

こうして、誕生から 50 年ほどを費やし、要約筆記はボランティア的な支援から、中途失聴、難聴者の権利を擁護するために制度化され、法的に確立された。

2) 要約筆記事業の現状

現在、要約筆記事業は障害者総合支援法、地域生活支援事業の意思疎通支援事業に位置付けられている。

要約筆記者養成は、都道府県、政令市、中核市の必須事業、要約筆記者派遣は市町村の必須事業である。厚生労働省の資料によれば、スタート時に 10%に満たなかった要約筆記派遣事業の実施率は 28 年度 78%にまで至った⁶。

今回の聞き取り調査結果では、障害者差別解消法施行の前後の 2015 年と 2017 年度を比較した。全体的に要約筆記者派遣件数は増加しており、障害者差別解消法施行および障害者雇用均等法改正の影響が大きいといえる。依頼の内訳としては、パソコン要約筆記が増加しているが、パソコン要約筆記者の不足から、手書きの要約筆記で対応している実態もあった。

また、障害者総合支援法の「意思疎通支援事業での派遣件数」と主催者（事業者あるいは依頼者）が費用負担をする「その他の派遣件数」も比較した。両方を実施する事業体では、意思疎通支援事業以外の派遣依頼も増加している傾向が分かった。障害者差別解消法と改正障害者雇用促進法の施行で公的機関は合理的配慮が義務となった。事業者の責務が明確になり、行事や雇用者への研修等に要約筆記を準備するようになったことが要因の一つ、と調査対象者からの意見も多

⁶ 厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部企画課自立支援振興室「障害保健福祉関係主管課長会議資料」p172 平成 30 年 3 月 14 日

かった。

今回の聞き取り調査ではノートテイクについても調べた。以前は個人が依頼するケースがほとんどだった。聴覚障害者が自分の生活上の必要性から要約筆記者を伴い、受診や会合に参加するような場合である。だが、現状では事業者が開催する会議や研修などでの合理的配慮に基づいた依頼も増加している。

さまざまな制度の充実や社会の成熟に伴い、聴覚障害者の社会進出が進んでいる。特に、教育場面における情報保障の充実で、若年層は学齢期から何らかの情報保障を受けてきた体験も持っている。自分に必要な情報保障を求めて、他の人と同じように生きるという権利意識の高まりも増加の一因だろう。こうした傾向の結果として、ノートテイクの派遣場面が多様化している。会議や受診以外に就労の場や学会、キャリアアップの研修、司法関係など、要約筆記者により専門性が求められる場面も増えているといえる。

3) 要約筆記事業の課題

こうした現状の中で、要約筆記事業の課題を考えてみる。

①要約筆記の専門性の課題

ア) 要約筆記者の専門性の課題

要約筆記は、音声を文字情報に変換して通訳する。聴覚障害者の目的は読むことでなく、要約筆記を利用して自分の目的を達成することである。

要約筆記者は専門的な知識と技術を駆使して、その場で文字量、理解度から考えた文章、文字遣い、スクロール量や表出のタイミングなどを調整する。高度な内容であればあるほど、こうした調整が必要となる。

前述したように、要約筆記の依頼場面は大きく広がっている。その広がりに対応するためには、要約筆記者には、背景知識も含めた情報収集により、より高度な支援技術が求められる。

また、要約筆記の作業を支えるのは、利用者と場面についての観察力である。利用者により濃淡はあるが、その人の聞こえの状況や要約筆記の利用状況、周囲の状況により通訳を活かすためには、対人援助技術も重要である。

これらの技術は要約筆記者養成講習会で学んだ基礎の上に、登録後のOJTや自己研鑽を通じて応用力を高めることが必須である。だが、地域の状況が一樣ではないことから派遣現場によっては十分に機能していない現状がある。

イ) 利用者のニーズからの課題

この10年あまりでICT技術は目覚ましく発展し、音声認識は利用しやすいツールとして身近になった。

中途失聴、難聴者は、十分ではないが聞こえている人、あるいは聞こえていた経験がある人たちである。そうした経験から、音声のままの文字表示を求める心情が働くのだろう。音声が一瞬時に文字になり、音声そのままの文字量が入手できる体験は、音声で発せられたすべてが分かることへの期待感につながっているようだ。

この心情は理解できるが、音声認識の誤認識は話し方や声の質、場面の状況により差が大きく、

ゼロにはならない。話したい人同士が会話支援として利用するなら、お互いがコミュニケーションを確認しながら理解を深めれば解決できる。だが、聴覚障害者がさまざまな分野で参加するとき、音声認識だけでは十分ではない。そこに表示される話し手の音声の変換は、読んですぐ理解できる文にはなっておらず、要約筆記同様の利用には、まだまだ難しい面がある。特に専門領域に進出する場合、知る権利の保障は目的が果たせてこそとなる。理解して目的を達するための文字情報の質、量をどう考えるかは、聴覚障害者も含めて検討しなければならない課題だろう。

②福祉サービスとしての要約筆記派遣の実情

ア) 福祉サービスの普及について

今回の聞き取り調査でも地域格差が明確になった。要約筆記事業は実施されていても、市町村事業であるため実施要綱等の違いが大きく、それは放置されている。市町村により、趣味の場への派遣はできない、あるいは連続講座への派遣回数に制限があるなどがみられる。厚労省からは、平成25年3月、「地域生活支援事業における意思疎通支援を行う者の派遣等について」が通知されている。この中に、いわゆるモデル要綱と呼ばれるものが掲載されているが、すべての事業者が採用に至っているわけではない。居住地により利用範囲、対象、回数が異なることは聴覚障害者の人権を擁護する観点からは課題が残る。

イ) 難聴者の心理からくる課題

聴覚障害者、とりわけ中途失聴、難聴者の心理面からの課題もある。中途失聴、難聴者の多くは、音声日本語の世界でコミュニケーションの不全感を常に感じながら日常生活を送る人たちである。その不便は承知していても、コミュニケーションの場に人が介在することへの抵抗からか、自分から率先して要約筆記を依頼することは少ない。制度が整う中で、自分から求めることができる世代も徐々には増えるだろう。だが、現状では不全感を抱えながら我慢している状況も散見される。結果として、人間関係から隔てられ十分に社会生活が送れない人がいるのも事実である。

そうした社会生活を余儀なくされてきた人たちには、権利意識の希薄な人も少なくない。我慢するために自分の権利に目をつぶる。権利に目をつぶることで不利があるが我慢する。これしかないと思いつむ。この負のスパイラルが働いて、中途失聴、難聴者の権利意識はさらに希薄となる。これこそが、中途失聴、難聴者の障害特性の一つであり、支援の難しさでもある。

ウ) 社会サービスとしての要約筆記の普及

聴覚障害者が要約筆記という情報保障を利用して対等に社会参加するには、福祉サービスを超えた環境整備、合理的配慮の一つとして要約筆記の普及を進める必要がある。この領域では、情報保障として手話通訳者や要約筆記者を用意するのは事業者の責務だが、事業者への普及、啓発は十分ではない。

合理的配慮にあたるとして当事者が要約筆記の派遣依頼をした場合、派遣コーディネーターから事業者働きかけをすることがある。今回の聞き取り調査で、事業者の公的機関でも合理的配慮の知識が乏しい、あるいは要約筆記を知らない事業者もいるという例もあがった。

また、障害者雇用促進法では雇用者には合理的配慮をする義務がある。だが、過度な負担を課

さないという点から、必要な配慮が受けられない実態もある。中途失聴、難聴者の就労者は、当然の権利であっても、配慮を求めることで職場での不利を招くことを恐れている。要約筆記を求めても過度な負担だからと筆談や同僚のサポートだけで済ませるケースもある。こうした代替手段では十分ではないと分かっているにもかかわらず、承諾せざるを得ないことも多い。本来なら必要な手段を講じて本人の力を発揮させる考え方に立つべきだが、こうした理解に至る啓発も必要だろう。

そうした場面で要約筆記の代替手段として音声認識が用意されることもある。しかし、今まで述べてきたように現状では音声認識では十分とはいえない。だが、音声認識の導入で、すべて解決できるという安易な理解をする企業担当者もいる。音声認識のメリット、デメリットが整理されないまま、導入されているのは課題といえる。

環境整備にも課題がある。内閣府から示されている「障害を理由とする差別の解消の推進に関する基本方針」には、合理的配慮の提供は環境整備を基礎として、個々の障害者に応じて個別に実施されると記載されている。

第2 行政機関等及び事業者が講ずべき障害を理由とする差別を解消するための措置に関する共通的な事項

3 合理的配慮

(1) 合理的配慮の基本的な考え方

エ 合理的配慮は、障害者等の利用を想定して事前に行われる建築物のバリアフリー化、介助者等の人的支援、情報アクセシビリティの向上等の環境の整備（「第5」において後述）を基礎として、個々の障害者に対して、その状況に応じて個別に実施される措置である。したがって、各場面における環境の整備の状況により、合理的配慮の内容は異なることとなる。⁷（下線筆者）

環境整備は障害者差別解消法の努力義務ではあるが、合理的配慮以前に、まず環境整備が基礎とするとある。要約筆記が環境整備として用意されれば、合理的配慮を求めずとも参加できる中途失聴、難聴者は多くいる。環境整備が共生社会にとって重要であることの普及も課題だろう。

4) 社会サービスを広げるために

聴覚障害者にとって、音声情報を知ることが権利である。この認識を拡充する必要がある。障害特性から権利意識が希薄である中途失聴、難聴者だけではない。社会全体が聴覚障害者への情報保障の必要性を理解する必要がある。聴覚障害者が見えない障害であることに加えて、中途失聴、難聴者は話すことができるので不利は分かりづらい。当事者が声をあげ、行政も含めた事業者が聴覚障害者の生きづらさ、その対応の必要性への理解を社会に広げることが重要だろう。

⁷ 内閣府 「障害を理由とする差別の解消の推進に関する基本方針」
<http://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/sabekai/kihonhoushin/honbun.html>

ここまで述べてきたように、今後は障害者総合支援法の意味疎通支援事業での福祉サービスと、事業者が用意する環境整備や合理的配慮の領域とで聴覚障害者の情報保障が行われることになる。どちらか一方だけで、聴覚障害者の人権が擁護できるものではない。

財源の問題や民間事業者の理解の不十分さから、要約筆記がなければ参加できない状況も予想される。そうした場合には、福祉サービスは最後の砦として聴覚障害者の権利擁護として機能すべきである。福祉サービスと社会サービスの両者を機能させることが聴覚障害者支援には重要となるだろう。

そのための方策として、要約筆記者が専門性を活かして、福祉サービス、社会サービス（環境整備、合理的配慮）において、利用者のニーズの応える情報保障を実現することは大きな責任を伴う。それぞれの場で専門性の高い要約筆記が提供することで、利用者のみならず一般市民の理解を得ることは利用促進につながると思われる。

現在、要約筆記者養成は福祉事業である障害者総合支援法の意味疎通支援事業で実施されている。通訳技術とともに社会福祉や対人援助技術の基礎を学んでいる。養成された人材を社会サービスとしての要約筆記にも利用すれば効率かつ効果的に聴覚障害者の情報保障が達成できるだろう。

また、ICT技術による最新技術は文字情報のあり方に大きな変化をもたらし、将来的な期待もある。今後、音声認識など要約筆記以外の方法を情報保障に活かすには研究が不可欠といえる。

通訳としての要約筆記も継続した研究が必要となる。本研究では要約筆記事業の文字数の確保と通訳行為の両面の条件を達成するため、連係入力のある方を検証した。文字量の確保だけでなく通訳として機能するための課題が見えた。この結果を今後の要約筆記事業に活かすことで、専門性を活かして中途失聴、難聴者のニーズに応えるものにしていきたい。

5) 参考文献

- ・(一社) 全日本難聴者・中途失聴者団体連合会(特非) 全国要約筆記問題研究会「今後の要約筆記事業についての提言」2015
- ・厚生労働省「『地域共生社会』の実現に向けて」
<http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000184346.html>

5. 検討委員会等の実施状況

5-1 会議録

5-1-1 会議開催一覧

会議開催一覧

会議名	日時	開催場所
第1回検討委員会会議	平成29年8月30日(水) 18:00~20:30	東京都障害者福祉会館
第2回検討委員会会議	平成30年3月23日(金) 10:00~12:00	東京都障害者福祉会館

会議名	日時	開催場所
第1回調査事業担当会議	平成29年8月29日(火) 18:00~20:30	ビジョンセンター田町
第2回調査事業担当会議	平成30年2月4日(日) 13:00~18:00	シック会議室
第3回調査事業担当会議	平成30年2月12日(月) 10:00~15:00	品川会議室スペース
第4回調査事業担当会議	平成30年3月21日(水) 16:30~20:00	(特非)全要研 名古屋事務所

5－1－2 検討委員会会議

第1回検討委員会

平成29年8月30日（水）18時～20時30分

出席者： 引間・小中・新谷・石原・三宅・山岡

議案1) 委員長の選出

- 2) 調査事業担当の検討内容について
- 3) その他

審議に先立ち、委員の紹介を行った。また事業実施計画に基づき、本事業の主旨等を説明した。

審議1) 委員長の選出

- ・委員長に小中氏を選出した。

審議2) 調査事業担当の検討内容について

- ・地域で行われている連係入力について、まずは実態を把握し、整理し、読みやすいわかりやすい要約筆記をとの検討の方向性を確認、共通理解できた。
- ・連係入力の実態をつかむ方法は、昨年度のアンケート結果から連係入力を行っている地域に協力を依頼し、入力の映像と資料を提供いただく。候補地域は、調査事業担当であげた9つに2地域を加える。
- ・共通の音源を使用し、20分の入力映像の後半10分間を分析の対象とする。音源は一般的な内容とし、調査事業担当でまずは検討する。
- ・15講のテキスト改編は、現状の内容を整理した上で、補足、修正する方向。
- ・音声認識ソフトの開発者へのヒアリングは、ICT活用による技術の提供で、要約筆記との関わりについての認識をお聞きするもの。要約筆記と音声認識の整理につなげる。

まとめ

- ・利用者の意見を聞く方法やタイミングは、調査担当事業へ持ち帰り検討する。
- ・今後の日程は、スケジュールどおり。次回はモデル整理ができた11月上旬を予定。メーリングリストにて調整する。

第2回検討委員会

平成30年3月23日（金）10時～12時

出席者：村山・新谷・石原・三宅・山岡・金剛（事務局）

議案：1）調査担当による事業実施状況と分析結果
2）報告書内容

審議 1）調査担当による事業実施状況と分析結果

以下項目について、実施状況と調査分析結果の報告をおこなった。

① 事業体への聞き取り調査について

- ・昨年度実施したアンケートから、派遣事業数の多いところに聞き取り調査をした。事業体によって、まとめ方やカウントの仕方が異なっており、基準が難しい。
- ・コメントの根拠としてのデータの出し方に工夫が必要。また時系列での調査がない。差別解消法施行後に増加とあるが、調査対象のうち、どのくらいだったのか。割合から全国の様子を割り出すような分析も必要。都市部のデータをシンボリックに都市の状況として示すことも可能ではないか。
- ・集計方法は、厚労省によるフォームの作成などでの、全国統一が望ましい。

② 要約筆記用ソフト開発者へのヒアリングについて

- ・音声認識との関係からみた要約筆記事業の捉え方の調査のため、IPtalk 開発者の栗田氏へのヒアリングを実施した。氏がまとめた資料には、今後のパソコン要約筆記のあり方や技術のロードマップが示されているので、参考にしたい。

③ 連係入力による要約筆記画面映像の収集について

- ・昨年度事業のアンケートで、派遣で連係入力をしているとの回答を得た地域から選んで協力依頼をした。細かな分析を実施するため、対象は4事業体とした。
- ・連係といっても地域によってやり方がばらばらな様子が動画からわかる。ここから養成の課題を探っていく。

④ ①②を踏まえての読みやすさを中心に③の分析について

- ・収集した動画を、表出と入力の2方向から時間計測し分析した。結果はグラフでも示した。
- ・1人入力と連係入力の確実な違いは文字量。専門性が高い現場では、置き換えられない用語の使用、教育現場では多くの例示が必要な場面がある。通訳として機能するには、どちらが否定されるものではない。今回の調査事業では、地域差がある全国の実情を踏まえ、養成課題を明らかにしていく。従って1人入力との比較は調査対象から外す。

⑤ 連係入力の研修の聴講について

- ・Z情報提供施設での研修を、カリキュラム作成の参考にするため委員が交代で聴講した。

⑥ あるべき連係入力モデルの設定

- ・目指すのは、文字量だけでなく、通訳として機能することを反映させる。

⑦ ⑥を実現するためのカリキュラム案の作成

- ・④の分析から、養成カリキュラムの15講の10時間以内で検討。8時間で基礎を学ぶ。文字の多さだけでなく、通訳として機能するよう、構文の学びもいれる。その人にあった形で出せるとの考え方も身につけさせるように検討した。
- ⑧ 要約筆記者養成カリキュラム準拠要約筆記者養成テキストへの反映
 - ・1人入力を学んだ人が、次に連係入力を学ぶときの基礎との考え方。カリキュラムが1人入力を基本としているため、その上の積み上げとして変更した。
- ⑨ 要約筆記事業の今後について
 - ⑨ー① 聴覚障害者の情報保障のあり方
 - ⑨ー② 要約筆記事業が今後担う部分について

審議 2) 報告書内容

- ・構成案を確認。調査事業担当で執筆担当部分を決め、とりかかっている。

まとめ（合意点等）

- ・今回の会議での意見を反映し、期日までに調査報告書を作成、提出する。
- ・聞き取り調査については、再度検討し、差別解消法施行前のデータや派遣増減、場面についての追加調査を実施する。
- ・ニーズの種類や派遣の増減など要約筆記の使われ方から、パソコン要約筆記の課題へのつながりを明確にする。
- ・その他意見があれば、3月26日（月）までにメールにて報告する。

5－1－3 調査事業担当会議

第1回調査事業担当会議

平成29年8月29日（火）18時～20時30分

出席者：村山・引間・坂井・平賀・小森・松井・松田・山岡・金剛・小笠原

議案：1) 調査内容の確定

2) スケジュールの確認

3) その他

今後の日程調整について

議案に入るまえに名簿と事業実施計画に基づいた事業概要を確認した。

審議 1) 調査内容の確定

- ・調査は連係入力の実態分析と、今後の要約筆記事業のあり方を考えた現状の課題整理の2点を実施する。
- ・連係入力の実態分析では、指導内容と入力の様子を、昨年アンケートよりピックアップした事業体から収集。指導内容は資料やテキスト、入力の様子は動画撮影を依頼する。
- ・ヒアリングはIPtalk 制作者とUD トーク開発者に、それぞれ要約筆記と音声認識の整理について行う。

審議 2) スケジュールの確認

- ・スケジュール表のとおり、進めていくことを確認した。

まとめ（合意点等）

- ・連係入力とは、1人入力ができる人同士が、より情報量を増やすために行う手法と確認した。
- ・連係入力動画の依頼先を決定した。
- ・動画の分析と課題整理は、坂井・平賀チームと小森・松田チームが担当。送られてきたものから順次開始する。まとめ方は両チームで比較ができる形にする。
- ・資料の分析は、松井・金剛チームが担当。各地域から送られてきたテキスト等を対象とする。
- ・参考としてPEP-net、IPtalk 9 tの資料を、メンバーがそれぞれ確認する。資料はウェブサイトから入手する。
- ・今後の要約筆記事業のあり方を考えた現状の課題整理については、2015年の提言の課題整理が第2次WGで進められているところ。それを基に検討していく。
- ・専門研修の聴講をZ 情報提供施設所長に依頼する。

第2回調査事業担当会議

平成30年2月4日（日）13時～18時

出席者：坂井・小森・松田・山岡・金剛・小笠原・米倉

議案：1) IPtalk 開発者 栗田茂明氏 ヒアリング
2) 研究事業の進捗状況について
3) その他

審議 1) IPtalk 開発者 栗田茂明氏 ヒアリング

- ・栗田氏の書かれた論文資料の指定部分（IPtalk9t67の説明 161 ページ、70 ページ、235 ページ、150～151 ページ）を読み込み、3点について伺った。
 - ①IPtalk を制作された経緯
 - ②文字情報による聴覚障害者支援について（音声認識と要約筆記の関係）
 - ③IPtalk の今後

審議 2) 研究事業の進捗状況について

①事業体への聞き取り調査について

- ・派遣事業数の多いところに聞き取り調査をした。事業体によってまとめ方やカウントの仕方が異なり、基準が難しい。

②連係入力による要約筆記画面映像の分析について

- ・依頼をした5事業体のうち、協力が得られた4事業体の、連係入力の様子を撮影した動画を観た。
- ・入力部を隠し、表出の状況を全員で確認しながら、主に読みやすさについて意見交換を行った。表出ではスクロールと文字数に注目し、読みやすさとの関係が大きいとの意見が出された。また、文字数が多くても、文になっておらず、内容がわからないところもあった。待たされ感や、逆に速すぎる表出によるスクロールなどの課題は今後の分析により明らかにする。
- ・ペアで互いの入力数が極端に違うところもあった。表出されるまでに入力者がどういった操作をしているのかの分析も必要。
- ・連係といっても地域によってやり方がばらばらな様子がわかった。動画を分析し、養成の課題を探っていく。

まとめ（合意点等）

- ・聞き取り調査のまとめ方を工夫する。
- ・収集した動画を表出と入力の2方向から細かく分析する。

第3回調査事業担当会議

平成30年2月12日（月）10時～15時

出席者：小森・松田・松井・山岡・金剛・小笠原

議案：1）報告書にむけて
2）その他

審議 1）報告書作成にむけて

1. 連係入力の詳細分析

（1）コンスタントなスクロール

一人入力でも読みやすさのためにはコンスタントなスクロールが必須。連係入力では文字数が増えるため、さらに課題となる。入力をし終えていても順番を飛び越えては表出できない。それが「待たされ感」につながる。

2. 目指すべき連係について

動画と同じ音源で、委員が連係入力を実施した。タイピングやスクロールといった、入力・表出の技術と同時に、文章構成力や語彙力をはじめとする日本語運用能力がより求められる。

まとめ（合意点等）

- ・連係入力により、聴覚障害者の通訳利用の目的に沿った文字数が確保されることは意義がある。しかし、それは単に文字が多いにとどまらない。話しているとおりの言い回しささえ提供すればいいものでもない。
- ・その場での通訳利用のためには、適度な要約による読みやすい文章、理解を遅延または阻害しない文章の提供が求められる。

第4回調査事業担当会議

平成30年3月21日（水）16時30分～20時

出席者：平賀・小森・松井・松田・山岡・金剛・小笠原

議案：1）報告書作成にむけて
2）その他

審議 1）報告書作成にむけて

1. 連係入力の分析結果のまとめ

（1）利用者の視点で、読みやすさの観点から課題整理した。

①表記…表出のリズム、適度な空白、訂正の仕方などで視覚的な読みやすさを分析した。

②読み取りやすさ（内容の分かりやすさ）…構文など理解面での読みやすさを分析した。

（2）（1）の達成のための連係入力者の入力状況からの課題整理…読み手側で問題だと感じたところは、入力側の誤入力や誤変換での遅れ、モニター不足での重複による取り戻しや、待たされ感、は互いの入力をどこから入るか見極めに問題があった。

2. 目指すべき連係について

（1）通訳として機能する連係のポイント…文字数の多さだけでなく、内容がわかること。

（2）目指すべき連係とは…コンスタントな表出で、利用目的やニーズに対応できるもの。

3. 連係入力のカリキュラム…第15講でのカリキュラム

（1）一人入力後の連係の基礎内容…一人入力での学びを生かし、一人で伝える力を合わせることでニーズに応える。

（2）10時間以内の内容（項目立て）…講義2時間、実技6時間の指導計画を作成した。

4. 要約筆記事業の今後

（1）音声認識と要約筆記

（2）社会インフラとして要約筆記事業の他の事業とのすみわけの現所と課題

（3）聴覚障害者の人権と一般社会への啓発の必要性

5. 報告書の担当

まとめ（合意点等）

- ・入力状況の詳細な分析から、要約筆記として、読みやすさのための目指すべき連係の姿が整理できた。
- ・連係入力のための指導計画と項目を整理し、カリキュラム案を作成した。
- ・現状で音声認識が通訳として利用できる状況にはない。また、音声認識の認識率があがっても、

一定の割合で通訳は権利擁護として必要である。

2017年10月30日

様

特定非営利活動法人 全国要約筆記問題研究会
理事長 三宅 初穂

動画撮影ご協力のお願い

秋冷えの候、時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。平素は当会活動にご理解、ご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、今年度、当会では「意思疎通支援事業における要約筆記者の専門技術のあり方」について、厚生労働省平成29年度障害者総合福祉推進事業補助金の交付を受け、検討を進めているところです。

今年度の課題の1つであるパソコン要約筆記における連係入力については、実態調査を行い、現状を整理した上で、効果的な研修プログラムや指導法の作成、テキストへの反映を目的としております。

つきましては、貴センターに以下のご協力をいただきたく、お願いする次第です。

要約筆記事業整備の主旨をお汲み取りいただき、なにとぞご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

記

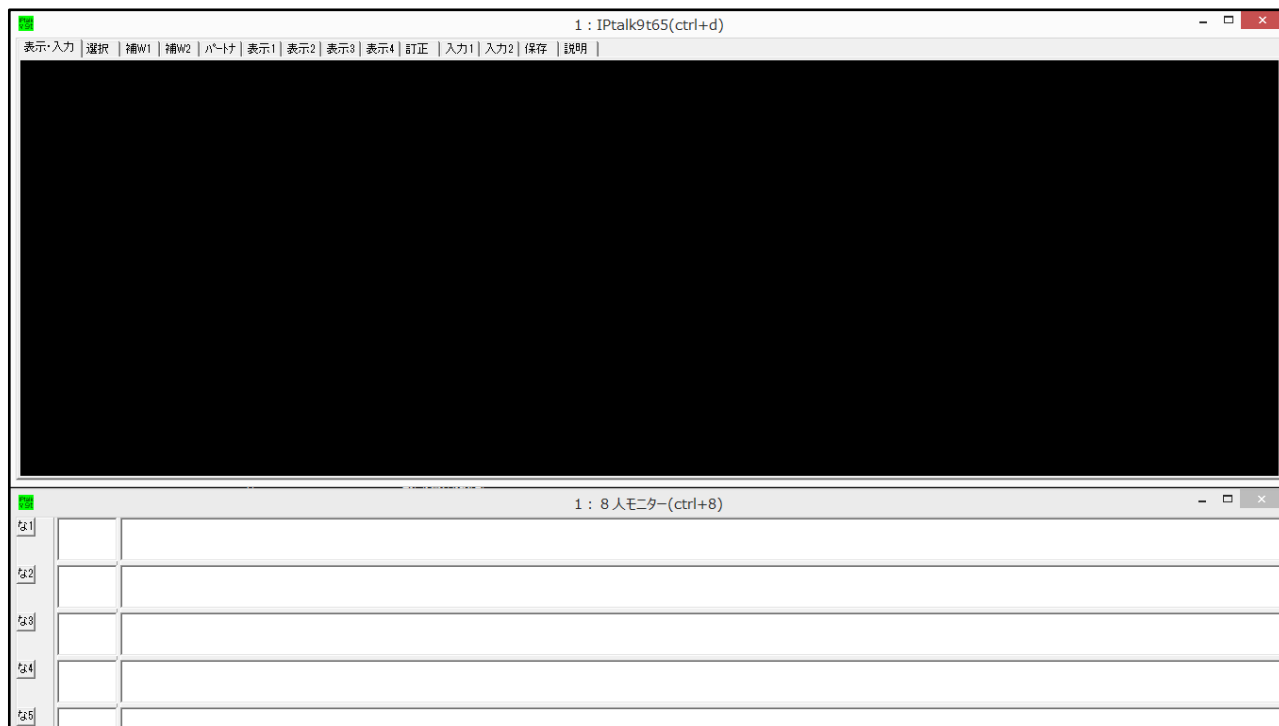
1. 全体投影現場を想定した連係入力場面の動画撮影20分間
2. 上記動画での入力状況の記録提出
3. 連係入力指導におけるテキスト、資料のご提出

※・1. 2のみでも結構です。

- ・1. 2につきましては、別紙を参照願います。
- ・動画送料などは実費費用をご連絡ください。

動画撮影用設定について

撮影画面



1.表示機で IPtalk を起動し、設定ファイル「連係動画撮影用表示全般設定.dp9」を読み込んでください。

表示部の下に8人モニターが出ていますが、消さないでください。

2. 全体投影で通常使用しているように、文字数、行数、機能等を設定してください。8人モニターが出ているのであわせづらいと思いますが、画面の範囲で調整してください。

ウィンドウの幅は変更してもかまいません。

3. 入力者でネットワークを組み、[パートナー]タブで自分のパソコンの名前をA、B、4名の場合はさらにC、Dに変更してください。

4. 連系のペアは、AとB、CとDが組んでください。

5. 通訳が終了したら、表示文の記録をとってください。

2018 年 2 月 15 日

要約筆記事業ご担当者様

「意思疎通支援事業における要約筆記者の専門技術のあり方」事業
聞き取り調査ご協力をお願い

特定非営利活動法人 全国要約筆記問題研究会

理事長 三宅 初穂



謹啓

平素より障害者福祉の向上のためにご尽力をいただき、心より感謝申し上げます。

また、平成 28 年度厚生労働省障害者総合福祉推進事業の補助金による「厚生労働省カリキュラム準拠テキストにおけるパソコン要約筆記の技術指導における平準化検討事業」実施に際しましては、アンケート調査のご協力をいただき、ありがとうございました。今年度も厚生労働省障害者総合福祉推進事業による補助金交付を受け、引き続き、標題の検討事業を実施しております。

つきましては、昨年アンケート調査にご協力いただいた貴事業体ご担当者に要約筆記者養成、派遣事業に関する聞き取り調査のご協力をお願いしたく存じます。昨年度のアンケート結果を踏まえ、さらに詳細に現状把握を行い分析する目的で行います。

大変お忙しいなか恐縮でございますが、事業体ご担当者には、ご協力賜りますよう、よろしくお願いいたします。

謹白

※お伺いしたい内容

- ・2017 年度、または直近の要約筆記派遣数のデータ等(貴センター運営委員会等に年次ごとに報告されているデータから公開可能なもの)
- ・「総合支援法に基づく要約筆記派遣」手書き パソコンの件数
- ・依頼者が費用負担する要約筆記派遣 手書き パソコンの件数
- ・全体投影、ノートテイクの別や、派遣のおおよその場面、または内容種別(センターでの集計方法によるもので結構です)
- ・その他最近の派遣の動向など

※担当者よりお電話またはメールをさせていただき、聞き取り可能な時間をお伺いします。

※ご不明の点がございましたら、以下までご連絡をお願いいたします。

(特非)全国要約筆記問題研究会

意思疎通支援事業における

要約筆記者の専門技術のあり方事業担当

金剛弘美

TEL/FAX 052-325-7070

zenyouken@miracle.ocn.ne.jp

5-4 名簿
検討委員会委員

所属等 オブザーバー		氏 名
検討委員会	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部企画課 自立支援振興室室長補佐	村山 太郎
	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部企画課 自立支援振興室情報意思疎通支援係長	引間 愛
	NPO 法人 全国聴覚障害者情報提供施設協議会 理事長	小中 栄一
	一般社団法人 全日本難聴者・中途失聴者団体連合会 理事長	新谷 友良
	社会福祉法人 聴力障害者情報文化センター 公益部門 部長	石原 茂樹
	特定非営利活動法人 全国要約筆記問題研究会 理事長	三宅 初穂
	特定非営利活動法人 全国要約筆記問題研究会 副理事長	山岡 千恵子
	調査事業担当 千葉聴覚障害者センター	坂井 映子
	奈良県聴覚障害者支援センター	平賀 裕子
	特定非営利活動法人 全国要約筆記問題研究会	小森 紀子
	特定非営利活動法人 全国要約筆記問題研究会	松井 美智子
	特定非営利活動法人 全国要約筆記問題研究会	松田 順子
	特定非営利活動法人 全国要約筆記問題研究会	山岡 千恵子
	特定非営利活動法人 全国要約筆記問題研究会	大森 優紀
	特定非営利活動法人 全国要約筆記問題研究会	金剛 弘美
	特定非営利活動法人 全国要約筆記問題研究会	小笠原 晶子
	特定非営利活動法人 全国要約筆記問題研究会	米倉 光代

厚生労働省 平成 29 年度障害者総合福祉推進事業

意思疎通支援事業における要約筆記者の専門技術のあり方報告書

発行日 2018 年 3 月 31 日

発行者 特定非営利活動法人 全国要約筆記問題研究会

〒461-0001 名古屋市東区泉 2-21-25 高岳院ビル 4B

TEL 052-325-7070 FAX 052-325-7071

無断転載・転用を禁止します。